
【証言と資料】

日本ミニコミセンター から住民図書館まで

本インタビューは、25年にわたって「住民図書館」の館長をつとめられた丸山尚氏のジャーナリストとしての半生を記録したものである。住民図書館とは1976年4月に設立され、日本各地の市民運動・住民運動や個人の発行するミニコミを収集・保存・公開してきた、市民の手弁当による自立的なアーカイヴであった。

丸山氏のジャーナリストとしての人生は、1961年に『現代の眼』編集者となることから始まる。丸山氏は1971年に「日本ミニコミセンター」を設立するが、そこに至る10年の編集者時代の経験は、60年代出版ジャーナリズムの世界と深く関わり、広い人脈に連なっていた。同センターは3年の活動の後閉鎖されるが、76年に住民図書館館長となった丸山氏は、25年間の民間アーカイヴを守り続けた。

本稿では、日本ミニコミセンター設立以前、ミニコミセンターの活動、それに住民図書館の活動を前期・後期に分け、丸山氏の活動に即して軌跡をたどっている。50年にわたる丸山氏のジャーナリストとしての軌跡を追うとき、市民・住民運動史とジャーナリズム史の交差する場所として氏と住民図書館の姿が見えてくる。

[証言と資料]

日本ミニコミセンターから住民図書館まで 丸山尚氏に聞くミニコミ・ジャーナリズムの同時代史 1961-2001

道場親信 MICHIBA Chikanobu

丸山 尚 MARUYAMA Hisashi

【解題】

本インタビューは、25年にわたって「住民図書館」の館長をつとめられた丸山尚氏のジャーナリストとしての半生を記録したものである。住民図書館とは1976年4月に設立され、日本各地の市民運動・住民運動や個人の発行するミニコミを収集・保存・公開してきた、市民の手弁当による自立的なアーカイヴであった。同館は2001年12月に閉館し、集められたミニコミは埼玉大学共生社会教育研究センターを経て、現在は立教大学共生社会研究センターで所蔵・公開されている（現在の所蔵ミニコミは約1万タイトル、18万点にのぼる）。この住民図書館を守り育ててきた丸山氏は、1995年度から99年度まで本学表現学部文学部の非常勤講師としてミニコミ・ジャーナリズムについて学生への講義を担当されてもいる。

丸山氏のジャーナリズムとの関わりは、氏が「ジャーナリズムの師」と呼ぶ鈴木均との出会いから始まっている。1961年、現代評論社『現代の眼』編集部に入った丸山氏は、62年に同誌の編集長として迎えられた鈴木と出会う。まもなく鈴木は社を辞めるが、その後も長く続く付き合いがここから始まったのである。鈴木はのちに現代ジャーナリズム研究所・日本エディタースクールなどの創立に関わり、編集者を「出版ジャーナリスト」と位置づける独自のジャーナリズム論の立場を確立する¹⁾。丸山氏は鈴木に大きな影響を受け、自らの仕事を一貫してジャーナリズムのそれとして位置づけてきた。

丸山氏は1971年に「日本ミニコミセンター」を設立するが、そこに至る10年の編集者時代の経験は、60年代出版ジャーナリズムの世界と深く関わり、広い人脈に連なっていた。『現代の

眼』編集部に始まり、『NOMAプレスサービス』（日本経営協会）、現代ジャーナリズム出版会へと続く編集者としての仕事の中で、氏は現代ジャーナリズムおよびジャーナリズム研究に関わる数々の人材と出会い、親交を結んでいく。この様々な出会いとつながりが、その後のミニコミ・ジャーナリズムとの関わりや苦難に満ちた住民図書館の運営を支える基盤となるのである。出版界といえば「マスコミ」に属するものと考えられがちであるが、60-70年代の心ある出版ジャーナリストたちはミニコミや市民運動の動向に関心を持ち、一方向的なマスメディアのあり方を問い直す丸山氏の仕事を好意的に見守っ



丸山尚氏（肖像）

ていた。

本稿では、日本ミニコミセンター設立以前(I)、ミニコミセンターの活動(II)、それに住民図書館の活動を前期(III)・後期(IV)に分け、丸山氏の活動に即して軌跡をたどっていくことにしたい。このうち住民図書館については丸山氏自身が折々に発表してきた文章の中でアウトラインは示されているが²⁾、ミニコミセンター前史、およびミニコミセンター自体についてはこれまでまとまった形でふり返られることはほとんどなく、今回初めて活字になる事実も多い。50年にわたる丸山氏のジャーナリストとしての軌跡を追うとき、市民・住民運動史とジャーナリズム史の交差する場所として氏と住民図書館の姿が見えてくる。このうち本稿では丸山氏が『現代の眼』編集部に入った1961年から住民図書館が閉鎖する2001年までの40年間を中心に、資料も交え追跡していくことにしたい。資料の多くは丸山氏自身からご提供いただいたものである。

なお、本稿は2011年12月から2012年10月にかけて、11回にわたって続けられたインタビューを再編集したものである³⁾。各回のインタビューは、元住民図書館運営委員の五味正彦氏(元模索舎代表・元ほんコミニケート社・現有機本業)と共同で行なっている。また、その際、東京大学大学院の清原悠氏、NPOアンティ多摩の江頭晃子氏(和光大学非常勤講師)、立教大学共生社会研究センターの平野泉氏も同席されている。第8回には、特別に経緯を知る方として元住民図書館運営委員の宮崎省吾氏(元横浜新貨物線反対同盟連合協議会事務局長)にもご証言いただいている。編集にあたっては、丸山氏の発言を中心にまとめ、質問者および五味氏、宮崎氏の発言は最小限に絞り、他の方の発言はすべて割愛していることをあらかじめおことわりしておく。なお、『ミニコミセンターニュース』『ぶりずむ』『タクシージャーナル』の閲覧にあたっては、立教大学共生社会研究センターのお世話になった。記して感謝したい。

はじめに

——丸山さんは25年にわたって住民図書館の館長をつとめてこられました。住民図書館が閉鎖して10年になりますが(2011年)、そこに至る軌跡についておうかがいしたいと考え、今回のインタビューを企画いたしました。私1人では

心もとないということもあり、五味正彦さんにも共同の聞き手に——ときには当事者として語り手に——なっていただきました。

今回のインタビューでは、住民図書館だけでなくそれ以前からの丸山さんのジャーナリストとしての活動をお聞きしたいと考えています。大きく言って2つの目標を設定しています。まず第1に、住民図書館の前史となる日本ミニコミセンター、さらにそれ以前の編集者時代から住民図書館までの軌跡をおうかがいしたい。こちらについては丸山さんはほとんどお書きになられていないと思いますので、より詳しく質問させていただきたいと思います。第2に、住民図書館を運営してきた丸山さんの「苦闘」ともいべき記録を残したい。この点については丸山さんご自身でもいくつかお書きになられてもいますので、これまで書かれていないことがらを中心にうかがいたいと思います。そしてこの2つの時代、2つの仕事を結び合わせるキーワードとして、「ジャーナリスト」としての丸山さん、あるいは丸山さんのお仕事としてのジャーナリズムというものを設定できるのではないかと思います。この「ジャーナリスト」「ジャーナリズム」という概念については鈴木均さんの議論に沿う形で考えています。鈴木さんは「私の「定義」にそえば、あくまで編集なる仕事および人は、職業としてのジャーナリズムの一分野となる」⁴⁾と述べています。丸山さんはこの鈴木さんの薫陶のもとに出版ジャーナリストとしての編集者のキャリアを始め、やがて出版社を退社して日本ミニコミセンターを作ってから、書き手としてのジャーナリスト、さらにはミニコミ・ジャーナリズムの世界に身を置いてミニコミの研究と保存・公開のお仕事をされてきました。

丸山 道場さんには以前からインタビューをしたいという依頼は受けていましたが、なかなか機会がなかったですね。今回お話するという事になってからふりかえてみると、僕は、ミニコミセンターについて聞かれることというのはほとんどなかった。いままで住民図書館に関しては随分書いているけれども、ミニコミセンターについては僕自身総括していないということに気がつきました。

——では、よろしくお願いします。

I. 出版ジャーナリストとして ——ミニコミセンター前史

1. 出版ジャーナリズムの世界を志したわけ

編集者になろうと思った理由・学生時代・60年安保

——鈴木均さんがお書きになられている『現代人物事典』⁵⁾の丸山さんの項目によると、丸山さんは1936年6月9日長野県飯山市生まれということです。2012年で76歳になられるわけですね。国学院大学を出られて現代評論社に入社されたということですが、まず、どうして編集者を志したのか、そこからお話しいただけますでしょうか。

丸山 編集者を志した理由は、多分それしかないだろうと思ったからです。計数観念が乏しく、数字には全く弱い、典型的な文系人間と思っていましたから。辛うじてできることは、文章を書くことしかない。そして僕は小説家になりました。編集者をしながら小説を書いて、やがて作家でメシを食う、というのが設計図でした。——大学時代はどんな学生だったんですか。

丸山 大学ではノンポリでした。自治会に知っている者がいて、警職法や初期の安保阻止国民会議のデモなどにいたり、学内の学費値上げ反対はそれなりにやりましたが——まあ大したことではなかったが——それ以上ではありませんでした。それより学内に文芸同人サークルをつくり、同人誌『くらるて』を出して小説を載せていました。僕のくせは、人のつくったものには属さず、自分で始めるということなんです。

僕は大学を卒業するのに5年かかりました。昭和30(1955)年に入り、35(1960)年の卒業です。最終学年こそ一切しませんでした。それまではアルバイトをする苦学生でした。文部省の外郭団体である「学徒援護会」が、九段、千代田区代官町の旧近衛師団の中にありました。昔の兵舎が各大学生(学生数に応じて入寮希望者の数が決められた)の寮にもなっていました。その建物の一角に学徒援護会があり、苦学生にバイトを紹介してくれるのですが、僕は「塗装グループ」に入り、ペンキ塗りの技術を身につけました⁶⁾。

都会の学生は何らかの形で縁戚関係が都内にある。血縁が結ばれていなくても仕事についての情報があるけど、地方から上京してきて、ア

ルバイトするといっても今と違ってそう簡単にはないですよ。昔つけていた日記を見たら、学徒援護会の1人の採用をめぐる7人から9人が希望を出してる。ところが金もない連中が職を求めて来るんだから、学生服を質に入れて、真冬だというのにワイシャツ1枚でサンダルはいて。そういう生活をしていた時期なんで、塗装グループに属して筑摩書房なんかの入社試験を受けたことは覚えています。行ってないということは落ちたということです。

——卒業してすぐには就職しなかったんでしょうか。

丸山 いえ、卒業年次の60年4月に『日本経営新聞』という専門紙に入社して、4月から6月いっぱいまで3ヵ月つとめています。労働省の記者クラブにたむろして、取材が主でした。

——60年というと安保闘争の年ですね。60年安保のときはどんな経験だったのでしょうか。

丸山 60年安保は、市民でもなく、政党员でもなく、労組員でもなく、まして学生を卒えていましたから学生でもなく、単なる「アンボハンタイ」で、デモを見に国会周辺へ、折を見ては出かけ、見物人の域を出ることのない心情的反対派で終わろうとしていました。ところがそれでは終わらず、6月15日の右翼の暴力、警官隊の殺人的行為で樺さんが死ぬという修羅場が演じられているというラジオを聞いて、内から怒りが燃えてきました。すぐにこちらも死んでもいい覚悟で、同居していた弟2人を連れ、闘うつもりで夜間、国会前へ行きました。ここでは閉められた国会の西門だけ東門の柵を再びこわして中へ入ろうとする一派に加わり、機動隊の前での実力行使仲間に入りました。やる気になったところで、安保は時間がきて自動成立(6月19日未明)、60年は終わりました。したがって60年安保は、心情とほんのわずかな行動だけで終わりました。なぜか、60年安保は、既成グループに入るとか自分が中心になるとかわずかでもまとまって何かしようとした記憶がありません。市民としての意識がほとんどなかったのでしょう。学生気分のままだったようです。安保の闘いをみて、つくづくつとめているその新聞社へ行くのがいやになった記憶が戻りました。この月の内に、仕事に熱意が持てず退職しました。そのころ学生時代に塗装グループを一緒にやっていた連中が塗装屋に就職して、人手が足りないから「丸さんを頼もう」と。結構腕がいいもんだからあっちこっちから声がかかって「おれ

は今小説の修業をしてるんだから、こんなことやってられねえ」とか言いながらそれで食べていました。何をやっているのか(映画はたくさん見た、ストリップも)わからない暮しで、あっという間に過ぎました。小説は書こうとして書けるものではなく、内発性がないのに小説を書くのはムリでした。

そこへたまたま『現代の眼』を出している現代評論社に履歴書を出したら採用されたんですね。『現代の眼』には、おかしい理由で入った。履歴書を出したら電話がかかってきて、会いたい。それが後に日本の総会屋を代表する木島(鬼島)力也だったんですよ。行ったら、君を採用すると。採用するといっても、試験も受けていないし、今こうやって初めてお目通りするだけで。履歴書を見たら、君の弟は東大へ1人、東京外語大へ1人行ってるから君を採るんだと。

もう1人、隣に入社内定者がいました。それは平野義太郎の——東大の教授に「三義太郎」(ほかに大森義太郎・脇村義太郎)というのがいましたが——その平野の三男の俊治。その後、彼とは仲のいい友達になりました。

『現代の眼』編集部

——『現代の眼』編集部はどんなところだったんでしょうか。

丸山 現代評論社はいわゆる「総会屋」が経営していました。木島が総会屋です。総会屋のことを業界用語で「トリ屋」というんですが、企業から広告、協賛金名目でカネを巻き上げるために新聞、雑誌などを出すんですね。まさにただどりするから「トリ屋」です。そのために雑誌が必要になる。現代評論社はそういう会社でした。木島がそこのボスということになります。

『現代の眼』の編集長は榊原史郎さん、都立大学の出です。現代評論社(変更前は経営評論社)は『現代の眼』の前に『芽』を出していましたが、榊原さんは『芽』の頃からその雑誌の編集をして、木島を助けていました。あるとき、木島は榊原を編集長から降ろしました。雑誌が少しは売れるようになったせいか、榊原を編集長として不足に思ったのかもしれません。代わりに鈴木均さんが平凡社から『現代の眼』に移ってきました。青地晨さんの紹介で、最初は顧問のような形で、62年8月からは編集長になります。鈴木さん——僕たちは「均(キン)ちゃん」と呼んでいましたが——は短い期間に木島と対立して社を辞めてしまいます⁷⁾。木島はあ

からさまざまな人心操縦術をやります。部員の1人を飲みにつれて行き、1人にシャツを買ってやり「どうだ、あいつは最近一所懸命やってるか」などとやります。また、自分の力を見せつけるため、誰かをやり玉にあげ攻めます。まるで総会屋が企業の担当者を締め上げる技法に似ていました。榊原さんがやがて編集長に戻ります。

榊原の次に次長クラスで小沢一彦さんがいました。業界紙等に長くいた最年長者ですが、旧海軍大尉です。主にレイアウトや誌面管理で、企画面にはほとんどタッチしません。次は丸山実。私と苗字は同じですが関係はありません。新潟県出身で法政中退で『芽』の頃からいました。企画力に乏しいが腹が太かった。後の学生運動の時代に「『現の眼』(げんのめ)は全共闘の機関誌」といわれる内容の雑誌に変え、いささか売上を伸ばした功績は、この丸山実にあります。癌で早死にしました。『現代の眼』には写真家の中平卓馬や車谷長吉もいて、こういう人事も丸山実の腕だとすれば大したもの。次いで私と一緒に入った、平野義太郎の3男、俊治。頭は超優秀だったのですが、50歳台の若さで死にました。これで4人ですが、そこへ私を入れて5人。

次いで福村勝典と板垣実が入りました。以上の7名が僕がいた頃のメンバーです。編集部の雰囲気はよかったけれど、つねに木島の疑心暗鬼と気まぐれのため、暗かった。他に企業からの取り立て係の営業の2人、これは編集部の動きを木島に伝える役でもあり油断はできませんでした。長くいるところではないな、と僕は最初から感じてました。

——『現代の眼』を編集する中で印象に残っている企画はありますか。

丸山 すぐれた企画ではないですが、62年5月の憲法記念日に合わせて「憲法」の特集をやりました。均ちゃんはまだ顧問、編集長に就いてなくて、榊原さんが編集長だった。特集を1人に任せると僕は61年の内から企画・執筆の人選のため動いたように思います。ふだんつきあいのない京大系の学者や大阪の執筆者などを訪ね、特集とは別にたくさんの執筆者を回ってこいと命じられていたので、京都、大阪にまで出張しました。新幹線はまだありません。憲法特集の主題を何にするか、誰に書いてもらうか、構成をどうするか。榊原や他の編集部員にも相談して、半年くらいかけて特集を完成させました。黒田了一(大阪府立大教授)の論文が評判

よかった。黒田はのちに大阪府知事になります。

記憶に残っている記事としては、入りたての頃山谷のドヤ街に泊って、体当りのルボを書いたことがあります。血を売って生活する売血者について、ドヤの宿泊所に泊ったんだけど、着て行ったジャンパーが学生時代にバイトでやっていたペンキを塗るときの作業衣で、ズボンもジャンパーもペンキで汚れ放題。玉姫公園にたむろする野宿者よりも貧しく見えるんです(笑)。この記事は署名入りで載り、青地晨が長い間『週刊新潮』の「ダイジェスト」欄を担当していて、抜粋紹介してくれたのを覚えています。

2. 2人の「師」——正木ひろしと鈴木均

人生の師・正木ひろし

——正木ひろしさんとの出会いはこの『現代の眼』編集部のときなのでしょうか。

丸山 僕には師と呼ぶ人が2人いまして、僕の人生の師は正木ひろしである。ジャーナリズムの師は鈴木均である。2本の師を持って出版界へ入りました。

正木さんとの出会いは、61年です。仙台高裁で松川事件の判決が下って全員無罪だった。その判決が『現代の眼』の締切の3日前で、判決についての原稿をいただいたんです。こういうときにも原稿をとらなきゃ編集者じゃないと、たんかを切ってお願ひに行ったんですね。僕は学生時代、正木ひろしという人権派弁護士の『裁判官』と『検察官』というカップ・ブックスから出た本を愛読して、権力というのはひどいもんだ、日本にもすごい人がいるんだと思っていました。その正木先生のところへ初めて行って、3日で原稿を書いてくれと頼んだら、書いてくれました。正木ひろしがどういう人間かというのは、その後、家永三郎さんの『権力悪とのたたかい』⁸⁾を読んで『近きより』⁹⁾の発行者だということがわかって、僕の正木さんに対する目が変わった。『近きより』という、あの言論弾圧の厳しい中で軍部批判まできちっとやった小雑誌だ。本格的なミニコミを見た最初だった。それを、現物を目の前にして正木に演説をされて、すっかりとりこになりました。

その後僕は静岡で起こった丸正事件¹⁰⁾の弁護に関連して名誉棄損裁判を闘っていた正木さんを応援する「丸正事件後援会」をつくって事務局長になりました¹¹⁾。これは仕事をしながらずっと続けました。後援会に熱心だったのは家永

さんと高木彬光と青地晨だったです。それから作家の伊藤整です。後援会の会長をつとめていただきました。公判の度にきていただいて、帰りにごちそうになりました。

——事務局はいつごろまでやられていたんですか。

丸山 これは正木さんが死んで公訴棄却、裁判がチャラになって、同時に被告であった鈴木忠五弁護士は有罪判決を受けてそこで終わりました。鈴木弁護士は禁固6ヵ月・執行猶予1年と弁護士資格剥奪6ヵ月という判決を受けています。

この裁判は弁護団が大量にいまして、代表は森長英三郎弁護士が名誉棄損審では中心になっておられましたけれども、関原勇弁護士が直接の担当者でした。三島・沼津が事件の現地ですけど、休みになると我々は調査隊を組んで、いろんな人に、丸正事件のことをどう思いますかという調査をしに行った。丸正事件の会合になると、「暁の丸正」といって、男どもは朝方でないとか家へ帰れない。丸山が帰さない。酒を飲み始めたら、やまらない、とまらないで、今や糖尿病でどうしようもなくなってしまった。このとき金子勝昭さん(後出)も参加しています。

正木ひろしの伝記を書くことが僕のライフワークとしての目標だったんですが、どうにも書けませんでした。

ジャーナリズムの師・鈴木均

——正木さんとの関係についてはよくわかりました。もう1人の師、鈴木均さんについてお話しただけですでしょうか。

丸山 鈴木均さんは、慶応大学の経済を出て海軍中尉になって、戦後はいくつかの出版社で雑誌の編集をやったあと平凡社に移り、思想の科学研究会の『共同研究・転向』などの編集をやりました。『現代の眼』へ移ったのは青地晨の紹介なんです。青地晨は現代の眼の記事になる座談会のメンバーとして、料理屋で社長の木島と会ったはず。木島はしばしば酒席に招待して、編集長をやれる人を頼んだんじゃないかと思います。青地さんは『中央公論』の京谷秀夫を考えたが、京谷はうんといわなかった。そこで、以前『改造』の同僚だった鈴木均が、平凡社で『転向』などいい仕事をしているがカネにならず、平凡社にいい顔されていないので、鈴木を当てたらどうか考えたようですね。けれど木島は先ほどお話ししたとおり総会屋で、

ワンマン経営者でしたから、いろいろ均ちゃんも危惧することがあった。それで長期間かけてやっと話がまとまったわけです。

しかし、長期間かけなければならないほどやっかいな問題は解消していなかった。均ちゃんはいきなり編集長にならず、まず顧問になったと三一新書に書いていますが¹²⁾、それは木島の意向を汲んでのことと思われます。それで来てみたら、何しろ均ちゃんは“大物”だった。私は力強さを感じ、大いに期待しました。均ちゃんも僕をかわいがってくれて。でも均ちゃんと僕とはタイプはぜんぜん違うんです。均ちゃんは大らかで爛漫、神経が太い。移ってきて木島とはうまくいってないのに、大々的な就任パーティーを国際文化会館でやったり（鶴見良行が事務局長でした）、新入女子社員を執務中にコーヒー屋へ連れ出したり、不用意だなあということをしていました。均ちゃんは均ちゃんです。正しいが、ああいう場所（現代評論社）では通らない。均ちゃんはわずか3ヵ月で編集長を追われます。

以上のような具合で、『現代の眼』で会った鈴木均の印象は決してよいものではなかった。ところがこの人、48時間仕事をする人だった。月刊誌1号作るのに、何回も目次案を作り直してきて翌朝発表、入れ換え、修正をする。そのタフさ、雑誌づくりの熱意に驚きました。均ちゃんが『現代の眼』をやめる直前のことですが、キューバ危機がありました。ソ連の船団とアメリカの艦隊が一触即発の状態にらみ合っている。戦争だ、というときに、僕は均ちゃんに相談しなかった。そうしたら翌日均ちゃんは「丸山は電話を寄越すと思っていた」と怒ったんです。こういうときに取り上げないでどうするんだと。僕は期待されていたんですね。

均ちゃんは晩年、自らを編集者といわず、ジャーナリストと自称していました。均ちゃんは私の専門のミニコミを、マスコミより量的にも人材的にも怠る補助メディアとしてではなく、ジャーナリズムという広い分野の1部門として捉えていました。それは『投げる』というミニコミを自ら発行していた均ちゃんの経験から出たものでもあると思います。

——鈴木均さんがジャーナリズムの「師」であるというのはどういうことなんでしょうか。

丸山 大らかで、花街にも連れていかれ遊びもしたが、どんなときでも、モノを見る目に狂いはなかった。鈴木均は、若い後輩に自分の経験

をおいしいほど伝えるのに熱心だった。鈴木均は仕事人間で、24時間本や雑誌づくりの事を考えていた。鈴木均はモノごとの深奥を見抜く、鋭いジャーナリスト感覚を持っていた。鈴木均は、モノ事をよく知っていて説明してくれた。鈴木均はいつもカメラを肩にかけ、記録を心がけた。人があそこの〇〇がいいというと、自分でそれを確認に行った。あった事をそのまま並べれば、“師とする”理由は以上のようなものです。

均ちゃんにはその後もお世話になりました。僕が『現代の眼』をやめたとき、日本経営協会に誘ってくれました。それはあとで話します。均ちゃんが理事になっていた現代ジャーナリズム研究所にも関わりましたし、その後現代ジャーナリズム出版会ができてそこへ僕が移るのも、均ちゃんがきっかけです。

3. 『NOMAプレスサービス』と広報誌の世界

『NOMAプレスサービス』編集長に

——丸山さんが『現代の眼』をお辞めになるのは、鈴木さんが辞めてからしばらくたってからでしょうか。

丸山 しばらくたってからです。均ちゃんの家は中目黒にあって、僕は東横線、日吉だから帰りに寄って均ちゃんのところで飯を食って帰ってくるというようなことがよくあったんですが、そこで情報を入れていて、均ちゃんもすっかり僕を子飼いだと思っていたでしょう。『現代の眼』には、丸山尚は均のスパイをやっているから処分しろという勢力が、当然出てくるわけ。

それから私は、社団法人の日本経営協会というところへ、鈴木均の引きで移ったわけです。均ちゃんが仕事をめつけてきたぞ、で、そっちはやめだということはもう最初から、あうんの呼吸だったような気がします。

日本経営協会、これを略してNOMAという(NIPPON OMNI-MANAGEMENT ASSOCIATION)。ここで『NOMAプレスサービス』の編集長になりました。プレスというのは、社内報、紙誌、雑誌、新聞その他。『NOMAプレス』でとめるところを、創刊時に関与していた大野明男¹³⁾が、今の時代だから情報提供を総称して「サービス」と言ったらどうか、『NOMAプレス』じゃなくて『NOMAプレスサービス』と。そういう冊子を新たに発行する。その中身は、1つは自分の会社の社内報に自由に掲載できる原稿の提供。2つ目は研修指導を内容とする月刊誌を創刊し

たいと。「創刊したいと言ったって、私は社内報なんて見たこともありませんよ」と言ったら、鈴木均さんは「君ならやれる。俺が見込んだんだ」。こう言って、僕を日本経営協会の初代編集長に推挙したわけです。

当時、企業は社内報という社内コミュニケーション・メディア、社内情報紙を続々と作るようになっていた。外向けの広報活動と並んで対社員向けの内部広報活動です。社員に必要な情報をきちっと与えないと優秀な社員は育たないよ、とわれわれ作る側は主張しました。そういう社内報に自由に載っけていい記事を集めて、会員会社にタイプ打ちした原稿を配信するというのが『NOMAプレスサービス』です。共同通信や時事通信がやっているように、記事を配信したわけです。日経連も当時ほぼ同じ方式で情報サービスを行っていました。作家の沢野久雄は『NOMAプレスサービス』に随筆を書いたらあっちこっちに載っているそうじゃないか」と怒ってきました。仕組みを説明するのに骨が折れましたが、共同通信と同じだと説明して納得してもらいました。

読みものの用の原稿の他に編集技術指導記事を掲載して、レイアウトの基本は目立たせることにある、文章はこういうふうに短く切れ、そういうことを僕が書きました。極めて専門的な部分は専門家に頼みますけど、自分で書けるものは僕が書いた。

「裏技」を身につける

——その後ずっと本をお出しになる社内報の世界には、『NOMAプレスサービス』のときに出会ったわけですね。

丸山 初めて開眼した。そんなものがあると知らなかった。僕は一からそれを勉強することになりました。NOMAでは企業などを対象としたセミナーもやっていましたが、セミナーをやる人は来るけど講師がいない。それで当時の理事長竹内正治さんが「編集長、君、行け」といって僕を講師に派遣しました。僕はいつの間にか、『プレスサービス』の編集長と同時に、社内報編集実務のセミナーの講師もやるようになった。僕は、読まれるということのためには何をすべきかという話をしました。＜自分をさらけ出す、格好をつけるな、1人の人間としてのつながりを＞。これが僕の作った持論です。社内報を出したいが、どう作ったらいいかわからないという企業がいっぱいあった。そこで、ま

ず見出しというものが大変大事である。タイポリングの技術は、瞬間的に読者をつかむ。言葉が誌面の一番目立つところに配置されているかどうかだ、というふうに話をしました。

それはのちにミニコミセンターを始めてからも需要があって、随分助かりました。原稿で1日30枚書いたって3～4万にはなりませんから、それは随分助かりましたね。これが僕の「裏技」で、現代ジャーナリズム出版会から独立してミニコミセンターを始めてからは、漫画のコンテをつくったり、企業の社史まではいかない、社長の伝記みたいなものをゴーストライターで書いたり。一番最高は1本で200万もらった。そのかわり、その社長を褒めてやらなくてはいかんけど（笑）。

初の著書

『社内報 サラリーマンのジャーナリズム』

——鈴木均さんと石川弘義さんと3人で社内報に関する本を出されていますね¹⁴⁾。これは丸山さんの最初のご本になると思うんですが、どういう経緯で作ることになったんでしょうか。

丸山 石川弘義はそのころ社会心理学で売り出し中の若手学者だった。南博の弟子で、連載をしてもらっていた。あるとき均ちゃんが東洋経済の編集者を連れてきて、この3人で『社内報 サラリーマンのジャーナリズム』という本にして出したいんだがと言った出たのが、その本ですね。その本が「社内報」というタイトルのついた本では、日本で初めてでしょう。僕はこのとき28歳だった。

——かなり研究書的な感じですね。

丸山 そうです。僕は日本の社内報の発生について調べた。「社内報の現代史」(第3章)。これはカネボウのアメリカ流の労務管理が原点ですね。「社内報の社会心理」は、石川弘義。

当時、PR研究会といって、死んだ池田喜作というPR界の大御所がいて。その後、PR誌コンクール、社内報コンクールを始めた。僕はそのとき『NOMAプレスサービス』の編集長をやっていて、我が方はコンクールのような水ものの行事はしないんだと言って、たんかを切って、えらい池田喜作を批判したことがある。その僕が、何年か後には堂々と社内報コンクールの審査員、果ては、専門でない分野のPR誌コンクールの審査員までやって（笑）、池田喜作と一体化したという日和見話もあります。

——そのころ『現代ジャーナリズム』(後出)の第2号に、丸山さんが社内報について文章をお書きになられています、それが64年の3月。翌年に鈴木均さんたちと本を出されるんですが、この頃、共同で社内報の研究会みたいなものをやられてたんでしょうか。

丸山 やっておりません。これは「穴が開いたから、なんか載っけてくれ」と言われた程度で、積極的にこちらから書いたというよりも、穴埋め的に書いてみたというのが実態のように思います。社内報についてはこれと、その頃、日本社会党の機関誌である『月刊社会党』にも書いています¹⁵⁾。あの編集部には鶴崎友亀という男がいて、「明日のジャーナリズムを考える会」(後出)で一緒だったんですが、原稿を頼まれました。

4. 現代ジャーナリズム出版会

現代ジャーナリズム出版会への移籍

——日本経営協会から現代ジャーナリズム出版会に移られる経緯というのは、どうだったんでしょうか。

丸山 経営協会には3年ぐらいいましたかね。そのときに「現代ジャーナリズム研究所」が1年半前に旗揚げをしていた。研究所からは『現代ジャーナリズム』という雑誌も出してました¹⁶⁾。これはジャーナリズム研究所のメンバーとして僕が編集責任者をやりました。5号まで出ています。5号すべて僕の手元にあります。

この現代ジャーナリズム研究所が発展して、1年後に日本エディタースクールと現代ジャーナリズム出版会ができた。

エディタースクールの発足と同時に出版部をつくるというのは、谷川公彦¹⁷⁾さんの構想ですね。鈴木均と谷川の間に何があったかは、僕はあまりよく知りませんが、亡くなられた小林一博¹⁸⁾さんが間に入って、大変苦労した。現代ジャーナリズム研究所の出版部としてスタートするので、編集長として来てほしいという依頼を私は谷川公彦と小林一博から受けて移ることに決めたわけです。ところが日本経営協会が離してくれない。エディタースクールの方は、こっちへ早く来てもらわないと困る、ということで、最初の1ヵ月は交代で両方行っていたんです。友人の鳥居哲男に「オイ、俺の代わりに行ってくれ」と頼んで、NOMAから離れることができたんです。

明日のジャーナリズムを考える会

——そのころでしょうか。金子勝昭さんが、「明日のジャーナリズムを考える会」を丸山さんと一緒にやっていたと書かれていたけども¹⁹⁾、これはどんな会だったんですか。

丸山 日本経営協会にいたころのことです。仕事はおもしろいんだけど、どうも肌合いが違う。編集は編集でも企業の社内報担当者が読む冊子で肌合いが違うので、普通の編集者につき合いがない。これではだめだ、根が広がらないというので、鈴木均に話をした。そうしたら、日本評論社の編集をやっている三川喜一、彼は立命館大出の非常に優秀な、京都の出身の編集者ですが、三川さんが日本ジャーナリスト会議(JCJ)をベースにいろいろ知っているから会ってはどうかと。で、僕は四谷の近くの日評のボロの建物へ彼を訪ねて行って。それじゃ、ともかく勉強会から始めようということになった。鈴木均はよく知っているし、均ちゃんの紹介なら信用もできるだろうということで。

その後、当時『月刊社会党』編集部の鶴崎友亀という男がメンバーにいて、みんな若いんだから「若いジャーナリストの会」にしたらどうかとって名前がついた。また、三川さんを通じて文藝春秋の金子勝昭を知るようになった。金子勝昭は大変温厚な人間で、社内で「明日のジャーナリズムを考える会」という私的な懇親会、勉強会をやっていた。

金子は、うちにはもう既に会員が10何人いるから、「若いジャーナリストの会」といったって、すぐ年とるぞと(笑)。それは名言だということで文春の連中が使っていた名称の会を受け継いだ。「若いジャーナリストの会」は僕が組織したので、僕と、文春は金子勝昭がまとめたんだから、金子と、2人で連名で世話人という形になった。そこで『考える』という冊子を出しています。『考える』は10何号まで出たと思いますが、僕の手元にはその一部しかありません。金子勝昭は私の無二の友人になりまして、今もつき合っております。

——『考える』にはどんな人たちが参加していたんでしょうか。

丸山 ここに名簿がありますが、岩波書店から、講談社から、白桃書房なんて聞いたこともないようなものから、僕みたいな風来坊的な、ふらふらあちこちで動く人間も含めて、こういう1冊の、明日のジャーナリズムを考えるという発想で一致した例というのは、日本の出版界には

これまではなかったし、その後もない。昔は基本的には左翼系の出版社と、講談社や小学館のような出版資本系の出版社と、あとは雑魚、ゴミみたいな扱いを業界で受ける出版社とはまったく別の世界だった。

まず荒木和夫は後に三一書房の社長になります。荒瀬豊は朝日新聞に入社したんですが、新聞の現状に批判的で、朝日を辞めて東大の東京大学新聞研究所へ入った。東大の教授になり、東大のあとは日本女子大の教授になった。井家上隆幸はいわば書評ジャーナリストです。当時三一書房にいました。井出孫六さんは中央公論をやめて作家になりましたね。植田康夫君は、『週刊読書人』にいて、上智大学の教授になり、定年になって、今また『週刊読書人』の編集にあっている。

——先ほどの経緯もあると思うんですが、文春からはたくさん参加していますね。

丸山 大竹宗美さんはよくわかりません。岡崎というのは当時文春に2人いて、岡崎満義は「デブの岡崎」といって、これはなかなか有能な男でした。いわゆる文春で凝り固まっているのではなくて、彼自身が戦争遺児だったこともあり、戦争遺児の問題を記事にしたりした視野の広い編集者でした。金子勝昭さんは先ほどお話ししました。岩波書店の木村秀彦さんという人は記憶にありませんので名前だけでしょう。岩波には他に安江良介や島村ヨハネというのがいた。

香内三郎は、荒瀬が誘ったか、井家上あたりが誘ったか。いずれにしても、これはエディタースクールの谷川と東大の同期なもんだから、私や金子さんのルートでなくて、名前は出てますが会合に来たかどうかわからない。後藤宏行は思想の科学のメンバーで。当時ズボンに穴が開いたってんで、布で繕って履いてたから、僕は「後藤さん、偉いな。戦争中を思い出す。こういう偉い人も日本にいるもんだ」とからかったら大変恥ずかしがって、僕が女房と結婚したときにちゃんと記念品を贈ってきてくれた律儀な人です。名古屋学院大学の教授になった。佐々木担。これは読書新聞にいて、外語大を出た男で英語がペラペラで。読書新聞から共同通信へ途中入社しました。その仲介をしたのが新井直之です。佐々木さん。これは一刻な男でした。

——この文藝春秋社の「橘隆志」というのは、あの立花隆でしょうか。

丸山 そうです。立花さんは、2～3回来てます。住民図書館の会員として、最後まで支えてくれた。竹内修司。これも文春の役員になりました。堤堯、これも文春で出世しました。豊田健次も文春側のメンバーです。松浦侑も文春。社会党の鶴崎友亀も参加しています。羽田孝文というのは、当時産報という出版社があり、そこでやってました。ひょっとしたら僕が紹介したかもしれません。松浦総三はもとは『改造』の編集者で、あとで僕が最初の本（『占領下の言論弾圧』）を作ることになりますが、『文春』に載った東京大空襲の論文もデブの岡崎に紹介して載せてもらいました。松本市寿さんは、これは思想の科学の人です。鳥取の農家に生まれて、農業問題に大変詳しくて、ちり紙交換の会社もやっていたという変わった男で、最近の彼の業績は良寛の研究で本も出しています。三川喜一は日本評論。村松友視はこのころ中央公論社の編集者でした。中央公論の柳田邦夫と村松友視は僕の関係で、僕は2人とも親しかった。柳田は鹿児島県のラ・サールの出身で、学習院の学生のとき中央公論社へ毎月毎月原稿を書いて送っていた。「入社試験受けるから入れてくれ」と言ってきた、試験のときには半分もう社員の面できたという、そういう男であります。丸正事件と一緒に僕とやりました。『現代の眼』にも柳田邦夫の名前で3本か4本連続で小河内ダムなどについて書いてます。中央公論は社員でも外部のメディアに原稿を書く習慣があった。岩波書店では、社員は他誌に署名入りの原稿は書かない。山本篤三郎というのは社会党のバリバリで、神奈川県藤沢市に葉山峻という革新のエースのような市長のとき日評から引き抜かれて、総務部長から助役になった。弓削麗子さんは、これは旦那さんが船乗りで、しょっちゅう海外へ海上航海をしていたので、こういう会が勉強になると思って入りましたというあいさつをして入ってきた。吉田邦宏。これは中央公論で、柳田の関係で入ってきた。正岡貞雄。正岡さんというのは講談社から来た。講談社からはまじめ一方の渋谷裕久も来ていた。小学館からは真杉彰が来た。彼は小学館のPR誌『本の窓』の編集を担当していて、ミニコミセンターを立ち上げたとき、お祝いに僕に原稿を書かせてくれた。しかし、私はまだ未熟だったのだろう。ボツになった。それでも稿料は出す、という温情を示してくれた。大出俊幸は日本読書新聞。彼は瀬戸内海の因島の出身で、文春の岡崎満義

と京大の同期なんです。そして、高校の教師になったんだけど、上京の志止みがたく、読書新聞に投稿を熱心していたところ、これがとてもいいということで小林一博が当時因島へ行って、できたらうちへ来て、勤めて仕事をしてくれないかといったと思います。後藤澄夫さん、観光経営センター。森田友通は、今はスウェーデンにいる。新宿に虎屋というてんぷら屋があった。その虎屋が金を出した虎見書房の勤務でした。森彰英は、光文社の『女性自身』にいた。今年 (2012年) の春、草柳大蔵について書くと言って、僕の所まで取材に来た。井下田憲は姫路独協大の教授になった猛の弟です。社会党の機関紙局にいた。大野進はのちに「たいまつ社」という出版社を作りますが、方々に借金をしてつぶれます。渡辺金五郎さん。『教育』という雑誌の編集部にはいたことはわかるけど、詳しくはわかりません。それから、岩崎隆治。これは最初、ダイヤモンド社にいて、日本能率協会の雑誌があるんですけど、その雑誌の編集者です。日能を辞めてからはフリーになりました。照井規夫さんはテルちゃんといって、白桃書房につとめていました。日本経営協会に倉沢という男がいたんです。その奥さんが白桃書房に勤め

ていて、倉沢が「女房の友達なので入れてくれ」と僕に言ってきたので、メンバーになった。——あとで日本ミニコミセンターの設立メンバーになる菊池勝宏さんもメンバーになりますね。**丸山** 菊池勝宏は明治大学の経済学部を出しました。就職をしないでその年に発足した日本エディタースクール昼間部に入学しました。彼は卒業後は布川角左衛門さんのところで飯を食わせてもらってた。末川博の全集の編集をしていました。その関係で菊池はしょっちゅう京都へ行っていました。それが終わってからは日本書籍出版協会が発行元になる『日本出版百年史年表』²⁰⁾に関わりました。

その人の初めての本をつくる

——現代ジャーナリズム出版会は、編集者は何人ぐらいいらっしゃったんですか。

丸山 僕と社長の巖浩さん²¹⁾の2人です。

——丸山さんは現代ジャーナリズム出版会ではどんな本を編集されたんでしょうか。

丸山 僕は気負うわけではないんですけど、別の編集者がおやりになった著者よりも、初めて出す人の本を作りたい。まだ日陰にいる人。道場さんがお作りになった現代ジャーナリズム出

表 1 丸山尚氏編集・現代ジャーナリズム出版会刊行物

草柳大蔵『マスコミ新兵』(いるか叢書1) 1966.9
伊藤慎一『マスコミ物語』(いるか叢書2) 1966.9
日野啓三『ベトナム報道：特派員の証言』(いるか叢書3) 1966.11
三樹精吉『新聞の編集と整理』 1966.11
金久保通雄『マスコミ文章読本』 1967.9
今井田勲・三枝佐枝子『編集長から読者へ：婦人雑誌の世界』(いるか叢書5) 1967.12
稲野治兵衛『取材入門』 1968.4
影山三郎『新聞投書論：民衆言論の100年』 1968.7
田村紀雄『日本のローカル新聞』 1968.9
浅田孝彦『ニュース・ショーに賭ける』 1968.11
松浦総三『占領下の言論弾圧』 1969.4
日本民間放送連盟放送研究所『情報産業の将来：新しい主導産業はいかにして形づくられるか』 1969.8
浪江虔『自治体広報の実際：前進のキポイント』 1969.8
門奈直樹『沖縄言論統制史』 1970.1
高橋信三『第三のテレビ・CATV』 1970.2
小和田次郎・大沢真一郎『総括安保報道：戦後史の流れの中で』 1970.5
金久保通雄『編集企画：情報化時代のプランニング』 1970.5
大山勝美『開かれた映像：テレビ制作の新しい方向』 1970.7
野崎茂『第2世代テレビの構想：VP・CATV・空中波』 1970.10
金久保通雄『情報化社会入門：あなたの生活はこう変る』 1970.12
新村正史『デスクmemo. 1(1971)』 1971.2
戸井田道三『幕なしの思考』 1971.6
日本民間放送連盟放送研究所『能動的資料室：情報サービスの実務』 1971.7

版会刊行図書目録から挙げてみますと（表1参照）、『マスコミ物語』これは、東大の新聞研究所の教授で、所長にもなった伊藤慎一さんの最初の出版物です。『マスコミ文章読本』もそうですし、『編集長から読者へ』、『新聞投書論』も。『日本のローカル新聞』、『ニュース・ショーに賭ける』も初めてです。『占領下の言論弾圧』、松浦総三はその後何十冊も本を書きますが、これが初めての本です。松浦さんはずっと週刊誌が中心で、署名入りでは書いてなかったんです。草柳部屋だったですから。

それから『沖縄言論統制史』、門奈直樹さんいろいろ書いてますが、この本が初めて。『総括安保報道』というのは、小和田次郎の名前が先頭に来てますが、今京都にいる大沢真一郎が1人で書いた。小和田次郎というのは、共同通信の原寿雄のペンネームです。『デスク日記』というのがずっと評判でしたね²²⁾。原は大沢と共著で書くことを承諾したが、直後に東南アジア支局長としてインドネシアへ行ってしまったので大沢1人で書くことになったんです。『開かれた映像』。これはTBSの名ディレクターの大山勝美の初めての本です。それから『第2世代テレビの構想』、これは民間放送連盟研究所の野崎茂。のちに東京女子大教授になった。新村正史、これは新井直之さんのペンネームですけど『デスクmemo』は、『デスク日記』にあやかっています。新井さんは共同通信にいて東京女子大の教授になりました。樋口恵子の亭主です。

——日野啓三『ベトナム報道』は先日講談社文芸文庫に入りました。

丸山 これは彼の最初の本ですが、この本を出した後、芥川賞作家になっています。しかしあれが文芸文庫ですか。僕は、ノンフィクションを書いてもらいたかったが、まるで小説の用語法を用いた文章のように読んでしっくりこなかった。そこで大幅に手を入れさせてもらった。日野は最初、いい顔をしなかった。だが現実には書き直した方がいい文章になっているとわかる。何も言わなくなった。編集者がどこまで手を入れられるかは問題が大きい。日野との関係では、著者と編集者というより、友人の気分だった。

——そうなんですか？

丸山 あれを書いてもらうにあたっては僕もほんと、熱心だった。この間読み直してみたら「ベトコン的しつこさ」で僕が迫ったと書いて

あった。その前に松浦総三さんの本を作っていた。これもかなり文章に手を入れたから松浦さんはげげんな顔をした。鈴木均ちゃんに言ったそうですよ。「丸山という若造が、俺の原稿に手を入れた。ところが、読んでみたらそのほうが数段いい文章になっていたので、納得した」ということを均ちゃんが言ってます。

——この中でとくに愛着のある本はどれでしょう。

丸山 どれと言われると、その後の息の長さにおいては、『占領下の言論弾圧』、松浦総三でしょうね。

——このラインナップは、今でも本当にジャーナリズム史を研究する上で、基本的な重要な本がめじろ押しという感じですね。

丸山 そういわれても仕事は非常にやりにくかった。というのは、巖浩社長は金がないもんだから印税を払ってくれない（笑）。そういうことは評判になるからね。

——出版会では『マスコミ関係入社試験問題集』というのを何度か出しているんですけども、これはどういうものだったんでしょうか。

丸山 これは巖さんの発想です。現代ジャーナリズム出版会ができたとき、読書新聞では必要としないから新しく作る出版部の頭に据えておけば無難であろうとあって、巖さんを持ってきた。何もしないことを前提に人事された巖さんがここではやる気になった。やる気になったけども、問題意識というのがあまりある人ではありませんのでこういう本を作ることになります。

II. 日本ミニコミセンター代表として

5. 日本ミニコミセンターの設立

ミニコミセンター設立の背景と経緯

——それではいよいよミニコミの世界に入っていくわけですが、日本ミニコミセンターについてうかがいたいと思います。まず、センターを構想されたのはどういう経緯があったのでしょうか。丸山さんは『ミニコミ戦後史』²³⁾の中で、「1971年は、戦後ミニコミ史の上で大きな意味を持つ年であった」と書かれていて、3月には『朝日ジャーナル』の特集「ミニコミ'71——奔流する地下水」²⁴⁾の発行、5月には京阪神での初のミニコミ会議、丸山さんたち日本ミニコミセンターの発足、8月には長野県野尻湖畔での「まんがサマーキャンプ」の開催、名古屋学院

大学吉川勇一ゼミでのミニコミアンケートの実施、12月には池袋パルコでミニコミ展示・即売会とフリー・トーキングの実施といった一連の動きがあったと記されています。

丸山 少しさかのぼると、実はミニコミセンターが生まれてくるミニコミブームの背景というのは、まず60年安保で小林トミが『声なき声のたより』を60年の6月にもう出す。ここで、市民に呼びかけをしない労組、それから政党はもうほとんど魅力を失って、数だけを動員しても政治的目標は未達成だと。このミニコミの市民運動の社会でも、「声なき声の会」が出てきた60年安保あたりから、やはり日本の戦後体質が少しずつ変わり始めてきて、そこに市民というものの実像が少しずつ浮かび上がってくる。

65年に米軍の北爆が始まる。そこに小田実²⁵⁾という風来坊が出てきて、組織に頼ってはだめだ、数をいくらあれだけ集めたって、何も変わらないじゃないか、もっと普通の人たち1人1人が声を上げなくちゃいけないんだ、アメリカでは市民が動いてベトナム戦争反対の世論づくりをしているよと、そういうことをいい始める。物言わぬ民だった日本人が、物言う民に少しずつ変わっていった、社会の動きが揺れ始めて、そして、ピラ、チラシだったものが冊子に変わっていく。冊子の思考と、ピラ、チラシの思考では違う。ピラ、チラシは、知らせる、告知。冊子は思考、考える。自分自身の問題として考える。それがミニコミの根っ子になっていく。ベ平連では『ベ平連ニュース』を出して、これが一定の影響力を持ち、続いて『週刊アンポ』が出てくると。ここでわっと日本じゅうにミニコミというものがあふれかえるわけです。それが65年から75年の約10年間、そういう状態が、波はあるけれども持続したというふうに私は考える。

——丸山さんはご本の中で、ベ平連の最初のデモの準備会に参加されていたとお書きになられていたと思います²⁶⁾。

丸山 金子さんと一緒に「明日のジャーナリズムを考える会」で参加したんです。そのときに鶴見俊輔が、「みようじつ」のジャーナリズムを考える会と言ったもんだから、誰が読んだって「あす」のだよと（笑）。俊輔らしい発音をするものだという記憶がある。鶴見俊輔には、鈴木均のお別れの会に、わざわざ京都から来てもらった。

それはともかく、そうしたところへ、71年の

3月に『朝日ジャーナル』がミニコミ特集をやってくれた。ミニコミはマスコミと同格的価値があるんだ、ミニコミが流行るとことはマスコミの責任もあるんだということで、ミニコミ社会というものの価値を朝日新聞として認めるという宣言なんです、あの特集というのは。朝日はあの支局網を使って日本全国のミニコミの所在地を調べ上げた。われわれがやることなんてできこなかった。あれでまたミニコミのブームが加速して、新聞自身が、テレビ自身が、ミニコミブームだブームだといい始めた。こういうふうにして、パッと一つの図式ができる。朝日新聞社が系統的にミニコミに取り組む姿勢を見せたということが非常に時代的意味としては大きかった。それから朝日本紙には「標的」というコラムがあった。これはミニコミの動向、動静を伝えるために設定された欄です。

五味 あと一つ追加させてもらおうと、毎日新聞の夕刊で1970年かちょっと前から池田信一という人が「戦無派」という特集をやっていて、これが全国のミニコミをつくってる人たちを次々紹介するというのをやった。

——「戦無派」というと、戦争を知らない子どもたちという意味でしょうか。

丸山 そうです。池田信一というのは、毎日新聞では一番早く、朝日も含めてかもしれませんが、ミニコミに着目した人ですね。いずれにしても、奔流する地下水がいま吹き出ているんだという持ち上げ方というのは、堅い朝日として



読売新聞71年6月21日

は珍しいことであった。70年10月には五味さんの模索舎ができて、翌年5月にミニコミセンターができて、まだまだ住民運動にも勢いがあった。環境問題を中心に平和問題、基地問題、あらゆる分野で闘いが燃え盛ったその礎としてミニコミがどんどん出されたというのはその頃じゃないか。

五味 この頃新しいタイプのミニコミが出始めるわけね。70年までのミニコミとの決定的な違いってというのは、それまでは圧倒的にベトナム反戦運動とか安保の話とか基地の話とか、そういう政治色が非常に強かったんだけど、この頃出てきたミニコミというのは、そういう中から出てきているにもかかわらず、『ニューヴァーブ』にしても『月光仮面』にしても『COPÉ』にしても、『苦悩蒼生』、『OFF MEDIA』、『くそったれ!』——いまいったのは全部、僕は直接の知り合いでもあるんだけど——いずれもが文化的に読むに値する。つまり、いまでいったらサブカル元祖みたいな、当時はそういう言葉がないわけだけでも、政治色一本ではない、非常に文化的な内容を持ったミニコミがやっぱり70年のピークを過ぎて出てくる。だから、もしも丸山さんが71年論をいってるんだとすればね、僕は、71年ってのはそういう特徴を持ったミニコミの年だと思いますね。

丸山 ミニコミ特集に載った影山三郎さんが司会をやった座談会で『ゲバゲバパンチ』の奥野卓司がサブカルチャーという概念をもっと前へ出すべきだということを言ってますね。

それで『たいまつ』のむのたけじさんが、ミニコミの連中あんまり調子に乗っちゃいかんぞと言ったとか、あの中央公論までがミニコミ編集長集合の座談会をやったとか、やっているうちにフォークゲリラがやられ（弾圧され）、どこがやられ、いわゆるミニコミのブームの流れからいうと、そろそろ退潮気味のところへミニコミセンターが出ていく。ミニコミセンターがなぜ出ていったかといえば、結論的に言えば、ほかにやる者がなかった。その前の年に模索舎・シコシコが、レストランと資料の販売を一拳両得で稼ごうという形で始まっていた。

そのほかに、ミニコミの場合は、作っても読んでもらえなければしょうがないので、いかに流通の問題を改善していくか。模索舎の誕生というのも、まさにその流通問題と絡んでいる。流通問題に関しては、我々ミニコミセンターの方は郵便問題で徹底してやったと。

五味 そうですね。郵便問題とか第三種とかね。**丸山** 要するに、ミニコミつぶすにゃ刃物は要らぬ、郵便料金上げりゃいい。ミニコミセンターがスタートした71年の夏に郵便料金が値上げになっていて、料金値上げと同時に第三種郵便の制度を厳しいものに変えた。発行部数は1000部以上で、有料がそのうち8割で、月刊以上で、そうしないと第三種郵便物として認めない。そんなミニコミで守れるわけがない。それでみんなつぶれていくという、そういう背景があった。

そして、ミニコミセンターは一体何をやったのか。ミニコミを一つの社会的存在にクローズアップしていった、単なるマスコミの反語としてのミニコミではなくて、メディア、言論表現の自由の実践の場としてのミニコミというものを作ろうと呼びかけをしてきたつもりなんです。

——そういう状況の中で、「ミニコミセンター」を作ろう、と思い立ったのはどういう動機だったんでしょうか。

丸山 私の編集者としての師は、鈴木均である。人生の師は正木ひろしである。2人の師を持って出版界へ入りましたら、世はまさにマスコミばかり。マス、大きければいいという風潮。そうじゃないんだ、正木ひろしにいわせれば量じゃなくて質なんだと。今、ただミニコミがブームだからと喜んでいたら、必ずそのしっぺ返しがある。ミニコミとは何か、歴史も含めてきちっと我々は学ぶ必要があるという考え方に基づいて、小さなメディアというものが頭の中にもうインプットされてしまった。

そして、現代ジャーナリズム出版会に勤めていたとき、社長の巖浩さんは外見は豪放ですが、実際はそれほど気が大きくなく神経質でした。私の友人が訪ねてきて、いきなり私のデスクのそばで話などをしていると、「人の家にあいさつなしで入ってくるやつがあるか」とどなりつけたりします。また、将来への展望が感じられず、どこまでもついて行きたいと思うことができませんでした。

よし、正木ひろしの足跡を踏んで、田村紀雄（後出）の力でも借りて、ミニコミセンターをつくるかと腹に決め、1971年3月でジャーナリズム出版会をやめて、その年の5月にスタートしたと、こういうわけです。新橋5丁目の日金ビル²⁷⁾という建物の「6階」でした。それは6階建てのビルということになってるんだけど、

5階に上物を載せた6階建て(笑)。もちろんエレベーターなんかない、載せたんだから。隣に管理人さんのおじいさんが住んでるんですけど、雨降るとずっと水が押し寄せてくる。そういうビルでした。

それで、僕の失敗は、ミニコミセンターに「日本」をつけたことだ。というっかり、全国のミニコミの発行者の皆さん、ネットワークをつくろうという意味で、当時は「日本」ということばが今より抵抗なく、ずっと。それは失敗だったですね。「ミニコミセンター」で十分だったんだ。

設立同人とコンセプト

丸山 ミニコミセンターでは、5人の共同設立者がいる。

——その5人の名前を言っていただけますか。

丸山 ええ。田村紀雄²⁸⁾、高橋豊道、菊池勝宏、西脇竜宏それに僕。西脇君は自分で『週刊ミニコミ情報』というミニコミを発行していた。菊池勝宏は先ほど話しました²⁹⁾。日本エディタースクール昼間部の第1期生です。高橋豊道というのは、井下田猛がやっていた地域ローカル新聞『房総ジャーナル』を一緒にやっていた。井下田は12号ぐらいまでそれを出したはず。高橋はそれの下働きをやっていた。戦後、開拓団で千葉の習志野原かどこかの土地を払い下げてもらって、百姓に入った。それを国が買い上げてくれたので補償金が出て、家を建ててさらにアパートを作って千葉大生に貸し、遊んで暮らせる身分になった。井下田猛がその懐をねらって仲間に引き込んだ、という人もいます。

——じゃ、結構お年だったんでしょうか。

丸山 ええ。もう群を抜いて、年でした。5人の中で、たまたまそこにいたからというのが西脇と高橋。いずれにしても、ミニコミセンターというのは僕個人の志向が強く反映して、5人で立ち上げましたけれども、そのうちの2人、僕と田村紀雄さんはミニコミについてわかっていた。

田村さんとは鈴木均ちゃんの紹介で会いました。『思想の科学』で一緒だった鈴木均と田村の関係で、均ちゃんが「おれの弟子に丸山というのがいて、出版をやってるから、原稿を見せろ」と田村さんに言って、彼はローカル新聞についての原稿を書き上げて出版するところを探していた。原稿はぼろぼろになってましたから、早く原稿は上がったんだけど、出版社がなくて

困っていた。僕がジャーナリズム出版会に行った2〜3ヵ月後のことだったと思います。

——とすると66年ですね。『日本のローカル新聞』という本は68年9月に出ています。

丸山 田村紀雄は大阪の機関紙協会にいて、僕が会った年に東大の新聞研の助手になって、関西から上がってきた。原稿を見て、よし、これはいけると。ローカル新聞という領域は狭いけれども、こういう本がいまは必要なんだ。なぜなら、『たいまつ』のような立派なローカル新聞は出てこないけれども、努力をし、一生懸命苦労している地方のブロック紙・県紙以下の、地域の情報を一生懸命取り扱っているメディアがある。こういうところに芽がある。そう思って本を作りました。

田村さんには当初は助けてもらいました。彼から教えられたことはいっぱいあります。

——1971年5月、日本ミニコミセンター発足の際のあいさつ文は次のようになっています(次頁、資料)。

丸山 ミニコミというものに対する基本的理解は、当時も今も一般的には極めて薄いと思います。それに対して小さなメディアによる自主的な情報活動というものは、日本の民主主義を守っていく上で非常に大事なんだということを言いたかったんです。それは、小さいから価値があるとかないということではなくて、マスコミ依存、マスコミに書いてあることが本当だという誤った認識を改めないと、誤った情報を食わされることになりかねないということの警告でもあった。自分は小さいものの価値を積極的に認める社会を作っていきたい。そのことは『近きより』の例を通して具体的に知ることができる。『ミニコミ戦後史』で僕が戦前の小さなメディアについてこまごまと書いているのは、そういう下敷きをきちっと踏まえないといけないという思いからです。

——ここで謳われている目標のうち、収集はかなりされましたよね。分類・調査・研究、啓蒙、便宜供与という点でいうと、啓蒙はかなり『ミニコミセンターニュース』などでやられたと思うんですが、便宜供与という点と分類・調査・研究という点は？

丸山 その辺は一番弱いし、後で考えてみればそれは機能は別だ。別の個人ないし機関がやるべきことだろうと思う。すなわちアカデミズムの問題。我々は実務派である。それがそこでは一緒になってましたね。

——調査・研究という点に関しては、田村さんとの分業ということは想定されていたんですか。

丸山 しっていなかった。

——丸山さんからいただいたメモによりますと、センターをつくって取りあえずやろうと考えたこととして、6つ挙がっています。①アンケート調査による初の実態調査、②ミニコミの理念と役割の追求、③流通ルート、特に郵便料金制度の改善、④ミニコミ発行者のネットワークづくり、⑤発行者同士の経験の交流、⑥ミニコミつくって楽しく生きること。これはどういうふうに目標を設定していかれたんでしょうか。

丸山 結局、常に結果的にマスコミとの対比、これが大きな課題になっていた。マスコミというのはご存知のように中立、公正、客観、3項目が重要ですけど。公正である必要はあるが、中立である必要はミニコミには全くないわけです。そういう客観、主観報道こそがミニコミの売り物であるので、そういうマスコミではできないことをミニコミではできるんですよ。現にやっているんですから。どうぞこれがそうです。この関係をまず狙ったということですね。

——ネットワークと経験交流という目標については、実際には東京中心になったりしなかったでしょうか。

丸山 東京中心で、関西のことはわからない。『月光仮面』の村上知彦君³⁰⁾や、『ジ・アザー』の奥野卓司君³¹⁾たち、彼らが上京してきて寄ってくれるので、面識を深めるぐらいなものです。

——では、ミニコミの収集や分類という点に関連して、ミニコミセンターでの配架や閲覧についてはどういう方法をとられたのでしょうか。

丸山 結局、アイウエオ順でいくか、業種といったらいいのか環境問題とか、文芸ものとか、個人史とかいったミニコミを発行するグループの分野ですね、それでいくかということを考えました。一番わかりやすく引き出しやすいのはアイウエオ順なんだけど、ミニコミの性格がわからない。それから、アイウエオ順は、項目がそれほどたくさんないときには通用するけど、どんどん増えてくるとアイウエオ順は非常に混乱するので、まずその前に、地域運動なら地域をベースに活動しているものを、アイウエオ順で並べる。そういうふうになりました。これは住民図書館まで引き継がれています。

——ミニコミセンターを作って、最初にされた大きなお仕事はミニコミアンケートですね。

丸山 ミニコミの実態調査を、私はミニコミセンターのスタートラインに置いたんですけど

資料 あいさつ文

ようやく初夏の陽気となって参りましたが、みなさまにはますますご清栄のことと存じあげます。

このたび私たちは、日本ミニコミセンターをつくりました。町や村、あるいは都市で、若者や老人たちによってミニコミは今日も発行されております。その種類は実に多岐にわたっており、その数も枚挙にいとまがありません。その一つ一つが、あるものは地域に密着して新しい文化の創造をめざし、あるものは反戦・平和、公害反対の旗じるしの下に人間性の復権を叫び、あるいは激動する産業社会の渦中で、着実に活動の輪を拡げております。しかし、ミニコミを真のミニコミたらしめるにはどうしたらよいのか、と私たちは考えるのです。私たちは永い間、ミニコミの発行者、研究者、ジャーナリストとして、それぞれミニコミをわが内なるものとしてとらえてきました。ひるがえって、ミニコミ活動を実際に推進していくべきことを考えると、第三種郵便料の値上げ、印刷・制作コストの高騰などその活動条件はきわめてきびしい現実に直面しております。

当センターは、あらゆるミニコミ活動者の苦しみやよろこびをわがものとし、全国に散在するミニコミの情報センターとしての機能を果たしつ、一、ミニコミの収集、一、ミニコミの分類・調査・研究、一、ミニコミ活動の啓蒙、一、ミニコミ活動への便宜供与など、ミニコミに関するあらゆる活動を積極的に展開していきます。ミニコミによって、マスコミの目からこぼれ落ちた小さなコミュニケーションの有効性を回復し、新たなコミュニケーションの創造をめざす当センターに、多大のご協力とご理解を賜るようお願いいたします。

一九七一年五月

東京都港区新橋五—一七—二 日金ビル

電話 (03) 四三四—五三七〇

日本ミニコミセンター

菊池勝宏 田村紀雄 高橋豊道

西脇龍宏 丸山 尚

も、この場合、困ったのは、調査のベースになるデータがない。リストがない。アンケートの準備はその前年から進めたわけですけども、どこでどんなミニコミが出ているのか、データがつかめない。これがミニコミ総覧だなんてものは一つもないんですから。そこへ朝日ジャーナルが特集で活動内容と共にリストを公表してくれたので非常に助かった。それを参考に、僕らで把握しているものも合わせてアンケートを送りました。朝日では支局網まで動かして調査をしたという話ですが、朝日がやっても800種類ぐらいしか集められない。朝日は2回調査をやってますけど、その都度800前後。実際に現物を送ってもらって、タダで送ってもらおうというのは、そんなにたくさん送ってもらえませんが。

——アンケート調査のまとめの記事は『ミニコミセンターニュース』創刊号 (1971年9月) と第9号 (72年6月) から14号 (11月)、16号 (73年1月) に掲載されていますね。

丸山 僕らの方は朝日と比べれば貧弱な調査ですけど、ミニコミセンター第1の仕事としてミニコミの現状はこうだというものを、ミニコミ発行者と読者に示すことを目的にした。結果は、成果をあげたかどうかはわかりませんが。

ミニコミセンターニュース

——ミニコミセンターは開館から4ヵ月後の71年9月に『ミニコミセンターニュース』³²⁾を創刊します。これは月刊で発行されているのですが、なぜ月刊で出そうというふうにお考えになったか、また発行部数はどれくらいだったかについておうかがいしたいと思います。

丸山 なぜ月刊かというのは難しいけれど、月2回というのは半端だし、年4回というのも半端だし、月刊が一番座りやすい。それから『ベ平連ニュース』が月刊だった。それに三種郵便を取ろうと思ったら月刊でなきゃいけなかった。——でも毎月大変ですよ。

丸山 大変ですよ。それで部数ですが、1200~1300ぐらいだったんじゃないでしょうか。これは会員にまず送ります。それから資料を送ってくれる資料提供者に送ります。それからマスコミ関係。会員というのは『ミニコミセンターニュース』の定期購読者です。

——では大体このニュースも1200~1300部出してはけてしまいますか。

丸山 はけてしまいます。そんなに大量に余る

ということはないと思う。

——ニュースの記事は、センターのメンバーで分担していたんでしょうか。田村さんは連載を持っていたが³³⁾。

丸山 そうではなくて、ミニコミセンターニュース、原稿書くたって全部僕が書かなくちゃいけないんだ。菊池勝宏とか西脇がもうちょっとセンスを持てればそこは埋められたんですが、彼らは短いものは書けるけども、長いものを書くことができない。

——『ミニコミセンターニュース』には「常連」といえるようなよく登場するミニコミがいくつかあります。これらはどういうふうにして知り合ったんでしょうか。

丸山 これは、ミニコミアンケートの時にこっから発信したのを受けた連中が、早速自分が出しているものを送ってきてくれたというのが多いですね。佐藤洋の『COPÉ』なんてのは、四谷の飲み屋が実家だからしょっちゅう自分で来てました。あの男は、日大の芸術学部で写真を撮っていた。市民運動の写真を撮って、早くから、つやつやしたつやのある写真じゃなくて、ざらざらの、一見中平卓馬が撮った写真のような写真を撮っていた。佐藤君は印刷機を1台持っていましたね。

ミニコミセンターニュース創刊号

五味 いまいった佐藤元洋君が最初に世の中に知られるようになったのは、『こんにちは70年』という写真集で。69年か、70年に平凡社の太陽賞をとったんだね。だけど、それ以降は別にそういうのとは、商業作品とは全く無縁でもって、自分で『COPÉ』というミニコミを出し続けて。死ぬまで出していた。

——「死ぬまで」といわれましたが、若くして亡くなられたんですか。

五味 ええ。

丸山 それが佐藤元洋。山形の菅原秀は『ニューヴァープ』を出していた。野沢あぐむの『歌謡曲だよ人生は』などという手刷りのカラーのガリ版刷りのミニコミと覇を競うような、原稿を書く力のある男だった。こういう地方でミニコミを一生懸命つづけている、直接は会わないが間接的な関係にある連中にミニコミセンターの誌面を開放しようという考え方からミニコミの紹介や「ミニコミ案内」の欄を作りました。村上知彦の『週刊月光仮面』とか、田中延雄さんの『休火山・富士』も。『OFF MEDIA』を出していた川口裕弘は彫刻家だといっていましたね。少したってパルコ、池袋の西武と契約をして「カオス・ミニコミコーナー」というものを作った。

五味 だけど、ミニコミを売だけのコーナーではなくて、プリントセンターだったの。印刷所の取次みたいなの。自分のところでも刷るし、大きなものはどっかに回すと。そこにいくつかのミニコミも置くという。

丸山 そういことです。『OFF MEDIA』というのは、これ刑法175条かなんかに引っかかった。『くそったれ!』の中原里美君っていうのも、これもよくわからない男で、平凡出版ヘクレームつけに、僕も行きましたけど。彼は長谷川修児さん³⁴⁾を尊敬していましたね。

五味 これはね、『an・an』でミニコミ特集をやって³⁵⁾、各ミニコミに無断で紹介したり写真を載せたりしたということでミニコミ側から抗議があった、という話ですね。これが現物ですが、やっぱ当時はそういう時代だったよね。クレーム、マスコミに対してやっぱある種の対決っていうか。

——『くそったれ!』が一番持続的に抗議行動をしましたね。この特集には岩田薫さんの『苦悩蒼生』も出てきますね。それから『夕日ジャーナル』。『構造海賊版』というのもありますね。

五味 『だぶだぶ』³⁶⁾が出てるね。

丸山 うん、『だぶだぶ』。まあ若者たちは放ったってこういうことをやるんですよ。ミニコミセンターニュースでそれなりに調べた時点では、20店舗ぐらいがミニコミを扱っていたという記録は残ってますね。

——ところで丸山さんと五味さんはいつ・どんなふうにして出会われたのでしょうか。

五味 僕の記憶だと、70年の終わるか71年の初めに、田村さんが丸山さんをお連れになって、そのときが最初だったと思います。そのときは模索舎だけでなく「シコシコ」という、いまだったらコミュニティカフェに当たるものがあったので、そこでいろいろ雑談をしたという記憶があります。その後当然ミニコミセンターニュースはずっと読ませていただいてたし、ミニコミ会議などにも参加してるし。1回目のミニコミ市も。それぞれが弾圧を受けてから、いろいろ、より密接に情報交換をするようになったような気がした。

丸山 結局、ミニコミセンターにできることというのは、ミニコミセンターニュースに模索舎問題³⁷⁾について書いて連帯の意思を示すという程度のことしかできなかったわけです。当方は、いずれにしても人材不足で、僕を除いて、そういう折衝とか原稿づくりとかをまっとうに期待できる状況になかった。

言ってみれば、ミニコミセンターっていうのは、僕の私的な組織という感じが強い。

——センターが行なった最初の集まりが、発足の年の秋に横須賀市の霊川寺でやったミニコミ集会でしょうか。

丸山 ミニコミセンターを始めるにあたっては、もっと多くの人に意見を聞きたかった。そこで、対象は主にミニコミの発行者ですけど、ミニコミの読者にも希望があれば入ってもらって、泊まり込みで夜中までミニコミについて語り合った。人数は19名です。このお寺は設立スタッフの一人である菊池勝宏君が追浜の和菓子屋の次男坊で、地の利がある。土地勘を持っているので、一晩じっくり夜を徹して語り合えるような、そういうミニコミ集会を提案してきた。ただ、ミニコミについて素人もいたので、それは何かというと、私の弟が3人いるのですが、次の弟が新藤兼人の助監督をやったりした変わった男で、こういうのも紛れ込んでサクラになったというのが、このミニコミ集会についてのおおよそです。

——このとき参加された方々というのは、大体

東京近郊が多かったんでしょうか。

丸山 東京近郊からが多かったけど、地方からも1〜2人は来ていたと思いますね。もうちょっとたくさん集まってわーっとやれると思ったけれど。一つは地方からの人は東京へ行くんじゃないくて、東京からさらに湘南電車に乗って、横須賀線に乗って、三浦半島の突先まで行かなくちゃいけないというのは億劫だったかもしれませんね。

——このときに集まったミニコミの人たちとは、その後も関係が深まったって考えていいでしょうか。

丸山 とくにそれはないですね。四谷の佐藤元洋君が来たような気がしますね。

——『ミニコミセンターニュース』には、のちに丸山さんが「ミニコミ5名人」と命名するうちの1人、向井孝さんの情報もときどき載っていますね。第7号に「根上碎」というペンネームの人が郵便の値上げに対抗するために切手の上に糊を塗れという文章を書いているんですが³⁸⁾、これは向井さんですよ。

丸山 そうです。

五味 切手に糊を付けとくとどうなるかっていうと、あとで、水に浸すとスタンプが消えるから。

丸山 彼は、間違いなく全ての郵便物に、目で見、明らかに視認できるような、こんなに分厚く糊を(笑)。あるときに、横浜の郵政局から僕の自宅へ封書を一通持ってきて、これは明らかに糊が塗ってあるということがわかる、郵便法違反である、だからこの郵便物を預からせてくれといってきた。僕は冗談じゃない、これは私宛に来てる郵便じゃないか。あなた方に、糊を塗って消えてるかどうか、そんなことは私は関係ない。といって追っ払って。すぐに向井に電話したら、「行きましたか、すんまへん。承知でやってるんで、そちらでもそのように対処してくれてかまわない」(笑)。一枚の切手が最高で10回行き来して、最後はよれよれになったという記録を向井は持ってる。僕との電話ではそういった。

「裏技」と交鈴社の活動

——ミニコミセンター準備のために現代ジャーナリズム出版会を退社されたと丸山さんは言われましたが、ミニコミセンターは生業として成り立つ仕事として企画されたのでしょうか。

丸山 成り立つ仕事は「裏技」で食っていこう

と思った。そして、現にミニコミセンターのスタートと同時にカット集とか編集の技術書の発行を開始しております。僕が自信があったのは、ゴーストライターをやったり、中央公論の永倉あい子さんが校正の仕事を出してくれるとか、まあ、裏技で食っていけるだろうと。それも編集者の経験があったから。僕がミニコミセンターをつくったときに、460万円集めたかな。模索舎の500万円より少し欠けたがね。ほとんどが僕の家内が稼いで貯めた金を全部使った(笑)。それが切れて、ゴーストをやったり校正の下請をやったりと言いましたけれども、家賃を払ったり経費を払うと、3年半ぐらいで使い切っちゃったんですね。ですから、その背景というのは、なかなか人にはわからなくて誤解を与えたかもしれませんが、まあ、自分で自分の糊口をしのぎながら、ミニコミセンターをやったということになると思うんですね。

五味 丸山さん自身の出版社兼事務所は、飯田橋ですよ。

丸山 飯田橋。「交鈴社」という社内報とか企業広報とか編集実務書専門の出版社をやりました。だから僕は『企業広報のすべて』とか、『広報紙・社内報づくりの実務』とか、そういう実務書をいっぱい出している³⁹⁾。

五味 あれって、その交鈴社自体が取次に口座を持っている出版社だったんですか。

丸山 そうでなくて、僕は当時出版界で頭を悩ましていた流通問題、特に取次の邪悪な存在について、認めたくなかった。色々聞いていたので、そういう相手と取り引きするのがはばかれた。取次は通さずに本を売るなどできるのか、と人は言ったがね。流通手段を郵送に絞った出版社にした。

交鈴社の本は高い。それは郵送料が高いこともある。中味がいいという人は買ってくれと言って、『新編豆記事全集』といって、珍しい話とか広報誌や社内報に載せられる豆記事を1000本揃えてタイプ印刷にして、これを2万円で売った。それからカット集も出した⁴⁰⁾。当時、社内報や企業広報を対象にした本がなかった時代だから、対象は狭いけれども奥行きがあって、ある程度、売れたんです。また売れるように編集をした。たとえば農協組織でいえば、農協中央会あたりが指導して、各単位農協、県連あたりが広報雑誌をみんな出し始めたころ。そこへセミナーの講演に行って、テクニックを教えて、本を売ってくる。そういうことをやりながら、

片やミニコミを集めて、どうぞ見てくれと。ミニコミというのはこういうふうに面白いんだよ、やってみないかと。要するに、自由でいい。収集・公開・保存、この三つを、ミニコミの理念を生かしながら、楽しみながらつくっていく。そういう考え方で。ちなみに『新編豆記事全集』が売切れた頃、都立中央図書館で、三一書房の林順次の目に触れ、あんな面白い本をなぜ放っておくのか、といて『面白びっくり大全集』というタイトルで3冊に分けて再刊した⁴¹⁾。

いずれにしても、ミニコミセンターをただオープンすれば何とかなるだろうとは決して思っておりませんでした。その裏づけは実務書の出版、編集資料、校正の本とか、エディタースクールで出していた『校正必携』を著作権に触れない範囲でもじって売ったとか（笑）。それから潜在的に売れたのはカット集ですね。新聞や雑誌に使うカット集。編集の基本の『レイアウト技法』『文章の書き方・直し方』『校正実務』、そういうものを揃えたわけです。一番売れたのは社内報と行政広報誌のレイアウトの優秀例を1冊にまとめたもの。行政のものなどは飛ぶように売れて、すぐ品切れになりました。僕のは実例を挙げて、抽象論は排して具体論で。技術、実務というのはそういうものだと思っているものですから、本をまとめた。ところが、企業の社内報担当者も行政の広報担当者も、買うと、

異動するときに本を持っていかないで置いていくから、売れないんだあとは。本の方はうまくいかなかったので、今度はセミナーの講師として進出していくわけです。

日本経営協会主催の広報研修などはほかの講師では人が集まらない。丸山なら集まるというので、私のところに何本も集中するというセミナー荒らしをやった。そして知らんぷりをして住民図書館だ、ミニコミセンターだとやっていった。また、そうでもしなければ二足のわらじはとても履かれない。

——交鈴社の本ですが、交鈴社発行・理想出版社発売という本があります。『文章の書き方、直し方』⁴²⁾。この本を見ますと、交鈴社の発行人は丸山さんの奥さんのお名前になっていますね。

丸山 それ1冊だけだと思います。あれは窪田安弘君という、もともと理想社にいた男。彼はそこから独り立ちして理想出版社というのを作った。ところが編集してものを作る能力に欠ける。売る力はあるが、作る力がない。僕は本をつくる能力があるけど、売る能力がない。人に頭を下げて歩くことのできない人間だから。それで売れなくて困ってたら、窪田氏が任せてくれと。売れない本を任せてくれというのだから、神様の技でもあるのかと思ったら、カバーを変えて売ったんです。それを模索舎にまで持

表2 交鈴社出版物一覧

『新編豆記事全集』1972.07
日本ミニコミセンター編『実用カット集』1973
日本ミニコミセンター編『レイアウト、見出し実例集』1973
ETRグループ（丸山尚）『レイアウト実例集（広報版）』1973
ETRグループ（丸山尚）『レイアウト実例集（社内報版）』1974
ETRグループ（丸山尚）『文章の書き方、直し方：誰にもわかる原稿の書き方とリライトの方法』1974
ETRグループ（丸山尚）『校正実務：原稿整理と校正技術上達の手引き』1974.7
佐藤礼次郎『編集プラン大成』1975.3
丸山尚『企画立案の方法：読まれる編集プランはこうしてたてる』1976.06
丸山尚『社内報の実務と理論』1977.5
本多清『レイアウト技法：読まれる出版物の誌・紙面構成の秘訣』1978
丸山尚『住民とつくる広報紙：“参加時代”の広報活動をどうすすめるか』1979.10
本多清『私の編集術：上手な出版物づくり・95のポイント』1979.12
藤井能成『取材の実際：インタビューからアンケート取材までの手順』1980.5
酒井泰之（丸山尚筆名）『実例・ビジネスの文章術：社内文書、ビジネス・レターの書き方』1980.8

（書籍以外）

『編集必携』

スクリーントーン、地紋、飾り罫、帯カット

『カット通信』（毎月200点のカットが届く、B5判10頁の無綴じのカットの通信販売）1977.4

ち込んで売ったと、こういうわけです。模索舎も困ってしまう。

五味 いえいえ、全然困りません(笑)。何となく記憶があるんだけど、そういうことなのか。そうすると、理想出版社って、マスコミ何とかシリーズという6～7冊のシリーズ、何かなかったっけ。

丸山 あります。

——「マスコミシリーズ」。鈴木均さんの『出版界』という本とか、いくつか出ているようです。

丸山 それは窪田が、誰も手を出さないでたまっているという原稿を集めて歩いて出したんでしょう。たしか清水英夫さんのもの、その手で出したはずだ⁴³⁾。

——このシリーズで、『出版の原点：ミニコミ論』という出版予告が丸山さんのお名前を出ているんですが…。

丸山 それは窪田が勝手に書いたんでしょうね。僕は知りません。

——本としては出なかった。

丸山 はい。

6. ミニコミ市とその弾圧

仲井富氏との出会い

——それでは、1972年10月の「ミニコミ市」についてうかがいたいと思うんですが、そのためにはまずこれを発案した仲井富さん⁴⁴⁾との出会いからお話したいかと思います。

丸山 仲井富さんという人は、岡山県出身で、岡山出身の社会党代議士、江田三郎を慕って上京して、政党政派的には社会党江田派にいました。基地問題では50年代からの砂川闘争を筆頭に、60年代前半には森永ミルクヒ素事件など、住民運動・市民運動が起こってきました。社会党が革新政党である以上はそういう住民の動きに対して無関心・無知であってはいけないというので、仲井富は好奇心の強い男ですから、「俺を全国の公害問題の現場へ視察にやってくれ」といって、全国を回りました。そのうちに党からリストラされて、彼は社会党を辞めます。辞めるけれど、住民運動の闘士たちとつくったコネクションが残ってますので、これを使ってなんとかやろうということを考えた。仲井富という人は、表には出てこない。裏で画策をする。フィクサーという、職業だか何だか知らないが、まさにフィクサーにふさわしい人だった。

そして、僕のことをなぜ知ったかという、
「新聞で知った」と言ってます。僕はその前の郵便問題の集会で会った気もするんだが。それで僕を訪ねてきた。もちろん電話があって訪ねてきたんだろうと思います。僕の方から行ったんではなくて、向こうから接近してきた。

その頃、仲井さんはかなりの資料は持っていた。自分の足で全国の公害の現地を歩くんですから、先方に資料があれば、どうぞ差し上げますよといってもらってくる。そういうものですね。系統的に集めたものではない。それがやがて住民図書館に結びつくんですが、先の話です。それはともかく、ミニコミの場合は、流通問題、それに保存・保管の問題が非常に大きな問題だということは、ミニコミを3日やってみると、すぐわかってくる。

ミニコミ市はミニコミセンターができた翌年の72年の10月にあるんですが、その71年の暮れ頃からミニコミ市がやれたらいいねという話があった。だからかなり早くから話としては出ていたんです。僕はミニコミ市については、普段管理されている歩行者天国という空間をミニコミ側が努力して解放させて、そこで自由なコミュニケーションを成立させる、それがミニコミ市だというふうに考えていた。仲井富は、そういう僕の考え方に乗って、実施は僕に大幅にゆだねた。

——そうしますと、仲井さんたちが出していた『環境破壊』の1972年3月号に丸山さんの論文「ミニコミの概況」⁴⁵⁾が載っているのも、2人はすでに出会っているわけですから不思議なことではありませんね。

丸山 僕はこの文章を忘れてました。

——この文章は『ミニコミセンターニュース』



ミニコミ市への参加呼びかけ

などで丸山さんが書かれているミニコミ論を圧縮したような内容になっています。その後に丸山さんが書かれたことも筋が通っています。
丸山 じゃあ僕が書いたものであることは間違いないですね。

ミニコミ市の様子

——ミニコミ市のアイデアは早かったとおっしゃいましたが、実際の準備期間はニュースに告知されてから大体2ヵ月ぐらいで…。

丸山 はい、2ヵ月ぐらいですね。

——これに応答してきた方々の反響はどうだったのでしょうか。

丸山 反響は非常によかったですね。その割には、出店が170タイトルぐらいでしたか。ミニコミを送ってきたところもあるし、地方から知り合いのミニコミを預かってきたというところもあって、タイトルで200近く。大阪や三重、愛知とかからも来て店を出した。もうちょっと来るかなと思ったけど。だけど、それだけの売り手が新宿の東口から伊勢丹通りへずらっと並んだというのは、非常に壮観なんですね。

その前の日ですよ。NHKの朝のワイドショー「スタジオ102」で「あした、新宿でお会いしましょう」と宣伝させてもらったんだ。テレビはとても効果が大きかった。

——当日印象深かったことってどんなことがありますか。

丸山 知り合いがずいぶん寄ってきましたね。ミニコミと何の関係もない昔の友達や何かが。ああ、こういうことをきっかけに人と人のつながりというもの、生きているし続くんだなと思いましたね。それと、誰もがこういうミニコミ市のようなものに興味関心というものがあったんだなという。石川弘義も見に来てます。この時、「コンシュートピア創造群」という広告制作会社の連中が「ミニコミ市」と大きく書いた横断幕をつくってきてくれて、大いに景気づけになった。

——このミニコミ市の日に五味さんは出店されたんですか。

五味 僕はビラ配り。模索舎はミニコミ市に大賛成しますというビラと、弾圧のときのやつと2回ビラまいてる。

丸山 サンドル履きで。

五味 だって、(模索舎は) 本当に歩いて5分ぐらいのとこだから(笑)。ちなみに、実際にミニコミ市をやっていたのは紀伊國屋の前から

伊勢丹の角っこ、角っこって交差点のほうではなくて、紀伊國屋側の角っこのへんまででしたね。だから100メートルぐらいかな。

丸山 そうですね。五味ちゃんはビニールのサンダルぺたぺた履いて、ガリ版で刷った「我々は新宿を解放した」というビラを(笑)、我々はミニコミ市第1回目成功だということで、それをやったわけです。

——模索舎事件で逮捕された後ですね。

丸山 うん、出てきてから。そのときには、日本に民衆の広場をつくった。警察の管理のもとに、許可をとらなきゃ使えないようなものは警察の庭なんだ、我々の広場は自由なんだ、ミニ



ミニコミ市の様子①



ミニコミ市の様子②コンシュートピア創造群による横断幕



ミニコミ市のあと掃除をする丸山氏

コミというのはあくまでも自由の追求なんだ、人間的自由の追求なんだというようなところでは一致しましたね。前田文弘という、川崎の「おらぁ漁師だからよ」という男。仲井富ルート的人物ですが、ラルフ・ネーダーが何を血迷ったか、前田文弘に日本の企業のどこかの株式を持っていたのを100株くれて、ネーダーと前田文弘が親交を結ぶようになって、鼻が高かった。その前田文弘が大漁旗を持って、新宿の伊勢丹通りにぶっ立ってる。そういうにぎやかな、大変喜ばしい状況を演出した。

五味 旗っていえば、水俣の「怨」っていう黒旗もなかった？

丸山 ああ、いた。いろんなのがそこへ来たんですよ。そして、写真にもあるかもしれませんが、僕がスピーカーでアピールをして、無事終わった。

——翌日スタッフと共に総括会議を開いたって丸山さん書かれてるんですけど、当日参加された方で打ち上げはあったんですか。

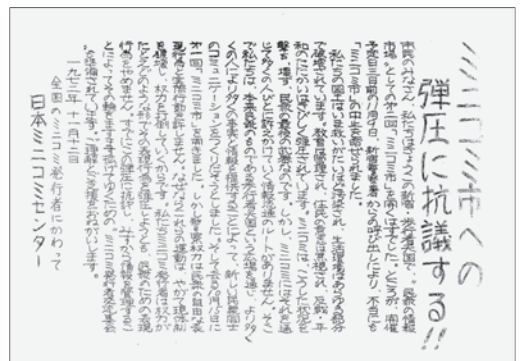
丸山 それは、僕が前田文弘に捕まっちゃった。で、新宿の西口へ連れていかれて、当然1杯ということになる。そうしたら文弘は、その日売り上げた資料、公害反対千人委員会のこんな小さなパンフレットを売ってジャリ銭いっぱい入った袋をドンと僕の前に置いて、これはカンパだ。その日売り上げたものを全部ミニコミセンターに寄付して、文弘は僕に腹の太さを見せて、一杯やって別れたから、ほかの連中と打ち上げをする余裕はないわけ。前田文弘というのはそういう強面の男で、僕みたいないい加減な、のらりくらりと適当に合わせることができる人間でないとなかなか付き合うことができない。一応文弘もミニコミセンターの会員になった。そのときに会費も払ったと思います。

それで、11月に第2回をやるということ、ミニコミセンターニュースを通してインフォメーションをやって準備していたんですが、3日前の朝方電話がかかってきて、「新宿警察の公安の調査係だが、君のところで3日後にミニコミ市やるって宣伝してるようだが、それは本当かね」と。本当だと。「あそこは許可なきやできないこと知ってるかね」。僕はそんなもの知らないと答えた。歩行者天国で車をストップしてるんだから、そこで自由に何に使おうと道路はみんなのものだからやりますよと。「いや、そうはいかないんだ」と。もし強行したらそれは道交法違反だから、ガチャンだから。ともか

くここでいい合ってもしょうがないから、出頭してきてくれないかという話でしたよ。

だから、そんなこといったって、道路は都民のものだから。「人の邪魔にはならない。汚したら始末をする。各グループとも箒を持ってこい」と書いてあるじゃないか。現に皆きちんと掃いて、ミニコミ市のあと街が汚れたというクレームは新宿商店街からここへ1本も来てませんよと。誰の迷惑もかかってませんよ。道交法は、迷惑になるものを置いちゃいけないと書いてあるけど、我々は迷惑にならないように歩道と車道の段差に腰を下ろして、そして客引きをせずに黙って説明をして売ったり、交換したり、話し合ったりして、都民のものに解放したんだ。違法性はないと。いや、法令上あるから禁止だ。と。まあこういう話です。

当日はズラッと制・私服が歩道に向いて列をなして、一人たりともミニコミ持ったやつをスペースの中に入れないという対応を取っている。私服もごまんという。それにはみんな、びっくりしましたよ。何が始まるんだと。それでも実施しようとして、検挙だ、検挙だって追い回されるやつとか。しかし、抵抗したところで、



ビラ「ミニコミ市弾圧に抗議する!!」



美濃郡都知事への公開質問状

所詮実現は不可能であることは、様相を目にすればもう明かだ。

あとでこれは、花森安治が毎日新聞に何もしていないものをなんで閉め出すんだ、誰が迷惑を被るというのか。こういうことが横行する、そういうことは民主主義の崩壊につながる、と最も的確に指摘していました。いろんな人が論評しましたが、やっぱり花森安治が一番いいこと言うなと僕は感心しました。僕がいま言ったよりもっと立派なことを書いてましたけどね。

五味 あの頃は、歩行者天国ってものすごい盛んだっただから、パラソルとか、出店とかいろいろあった。ホットドッグなんか売ってるのよね。だから、売るのは駄目だってのはおかしいのよ。

丸山 そして、ホコ天を目指してやってくる人も結構いたんですよ。まだ、あれ、美濃部が歩行者天国を実施して何ヵ月かしか経ってない頃です。

——それで、美濃部都知事に公開質問状を出すわけですね。

丸山 あれは市川房枝を通して美濃部に渡してもらう予定だった。ところが市川は「警察がダメと言うならダメでしょ」とトボけたことを言ってる。そこで私が出しにいった。実質的な処理はおそらく秘書をしていた安江良介がやったんでしょう。安江は明日のジャーナリズムを考える会のメンバーだったので私は彼とよく話をしていましたが、岩波書店の社員を一時やめて都庁にいた。僕はこの時は特別の陳情もせず、会いもしなかった。

——美濃部知事は歩行者天国は道路ではなく広場だという回答をしたのではなかったでしょうか。

丸山 しかしわれわれに警察とよく話し合えというんですよ。警察は方針を変えないといっていて、これでは話にならない。美濃部では、あの程度でしょう。

——けっきょくミニコミ市は1回で終わったということでしょうか。

丸山 そういうことです。

ミニコミ会議

——ミニコミ市弾圧の2週間後、11月27日に「ミニコミ・自主出版物交流集会」が市ヶ谷の私学会館で開かれ、40名以上が集まったと『ミニコミセンターニュース』第15号（1972年12月）には書かれています。そこで、参加者から岩田薫・中沢敦夫・横山悌二・石塚雅人・田中修・

川口祐弘・清水ゆり子・宮下孝介・内山栄治・仲井富とセンターから3名が「世話人」に選ばれた、と。この10数人の世話人会から、さらにミニコミ会議を作るということで、若手の川口さんと岩田さんが世話役になりますね（73年1月）。

丸山 世話人会は作ったけど、このメンバーがそのまま、その後もいろんな協議に参加したとはとても言えないですね。ミニコミ会議はミニコミ市が駄目になったので、連絡会議のようなものがやっぱり必要であるというんで作ることになった。中でも、「ミニコミの流通に関わる者は誰かいらないか」といったときに、『COPÉ』の佐藤さんや、川口裕弘や、岩田薫君も⁴⁶⁾ そういって、我々の戦略としては、模索舎ほど大規模にはいかないけど、ちょっとしたミニコミが手に入るスペースを都内に何ヵ所か作りたいねという話が出たろうという推測はできる。

五味 実際にその3人は、みんなミニコミを置く場所を作ったでしょう。

丸山 作ったわけ。だから、これもミニコミ市の後遺症。そういうのもおかしいけど、残った影響の1つです。ただし、ここでミニコミ市に再度立ち上がる力をなくしたことによって、ミニコミセンターの弱体化が始まったということでしょう。これを超える企画力と実行力を、ミニコミセンターは持たなかったと。閉鎖の方向に向かわざるを得なかった。五味さんの模索舎のような持続力を発揮できなかった。

それで、ミニコミ市は日本ミニコミセンターではなくて、ミニコミ発行者同士のミニコミ会議のようなものに運営を移すことも考えた。ミニコミ市をもう一度やりたいという思いを持った若いミニコミ発行者もいなかったわけではないので、こういう線をつないでいったらできやしないかと思った。もう運営を君らに任せる。僕は退くから、君たちの意思で決定してくれと言った。そうしたら、ミニコミ会議にも大して人が集まらなくて、とても方向づけなどはできる状況にない。もちろんサジェッションはするし、労力も能力も経験も提供するといったら、困ったのはその若い連中。「よし、やってやろう」という人間は、強いて言えば岩田薫君はいたんでしょうけど、彼は自分で「苦悩舎」というミニコミ・書物の販売店を持ってしまった。いろいろなミニコミを置くような店に卸して、まさに模索舎の方法をそっくり取り入れた垂流のやり方をした。

五味 苦悩舎の舎という字も模索舎の舎。だから、呼びかけ文も全部パクリなわけ。出してた雑誌は『苦悩蒼生』。

丸山 僕と五味さんと、中野のどこかへ彼を呼んで論じたことがある。ただ、考えてみれば高校を卒業して大学拒否宣言というのを新聞の投書欄でして、少し話題になったんだが、まだ子供なわけですね。店の方はうまくいかなくなって、青梅の方で空き家か何かを借りてミニコミの図書館を始めた。ライターになって、それから軽井沢にどういつながりがあったのか、開発に反対する町会議員に当選した。

五味 それから彼は地方環境議員連盟というのを作った。

——丸山さんはここで若い人たちに任せるんですけど、若い人たちに任せたらば、動かなかったと。もう1つ、丸山さんは若い人たちが出しているいくつかのミニコミについて、割と厳しい論評をされています。若い人たちのミニコミはすごく自己消費的で、社会に結びついていかない、物事をつくっていく力にならないと。この2つの問題は関連していると考えていいでしょうか。

丸山 関連すると思いますね。ミニコミというのは変革を実行するメディア。ただ日常的に継続するだけではなくて、変わるということが重要。市民運動をやるときに序列主義で成立してきた人間関係を、上下関係ではなくて、同列に、横に並べるようになる。これをやるのが正しいかどうかは本人が決めればいいことであって、人がいちいち、誰がどうだこうだという必要がない。ミニコミもそういうものです。読者と同列に情報を提供するもの、与えるもの、いただくもの。小さいからミニコミではない。相手の必要な、自分で伝えるに値する意見や情報を持っているもの同士がそれを交換する。交し合う。

僕のジャーナリズムの師、鈴木均は『投げる』というミニコミを出していた。人間の意見や情報は、投げ合いによって太る。相手に投げる。相手もこちらへ投げる。投げ合うことによって充実してくるんです。こういう投げ合い作用。こういう仲間を持ってミニコミを出していくのか、そういう変革の絆をどうつくり出していくのか。僕の人生の師である正木ひろしという人は、『近きより』というミニコミを、戦中の、あの苛烈な言論弾圧の中で出し通した。むのたけじ⁴⁷⁾は8月15日、昭和20年に朝日新聞の記者を辞めるという辞表を出して、郷里へ帰った。

苦力^{ケーリー}として、中国へ呼ばれると思ったからだ。2年雌伏して中国から呼び出しが来ないので『たいまつ』を出した。むのたけじこそが、ミニコミ精神の体現者である。市民の意思をきちっと持ち合わせて、それを言論を通してアピールすることのできる人が本来ミニコミのつくり手であってほしい。

それに比べると、当時、学生、学生上がり、10代から20代にかけての若者たちのいい加減さは、むのたけじや正木ひろしや鈴木均を通して見ると、あまりにも甘いじゃないかと言わざるを得なかったというのが答えになるかと思います。

——ミニコミ会議は結局、なんとなく自然消滅みたいな形だったんでしょうか。

丸山 そういことです(笑)。呼びかけようにも誰に何を持って呼びかけてたかわかんないほど、細っちゃったと。

五味 だから、ミニコミセンターの後半というのはセンターよりもミニコミ会議の運営委員会みたいなことをやっていたんだね。

丸山 そうです。ミニコミセンターは、最後は連合体をとっていくと。ミニコミセンターの指揮命令系統でなくて、ミニコミ発行者の自主的な組織としてミニコミ発行者会議というもので、ようやくと無理して形にして終わり。それで、はっきり言えば、僕は大変失礼だが放棄したと。若者にも展望はなかった。こんな連中とはやっていけないと。そういう時代の流れになったんです。それには抗しがたい。

五味 でもね、ミニコミ会議の有志でもって、ミニコミ同人誌フェアっていうのを始めたのがいるんだよ。これはコミケの源流になってる。四谷公会堂とか大田区の産業会館とか。そういうところで最初はやってた。一番最初に仕掛けたやつは、コミックでもない文芸同人誌系のやつ。だから、もともとはミニコミ同人誌フェアの「同人誌」は文芸同人誌だった。でもそれがいつの間にかコミック同人誌に変わるわけ。

——それが幕張メッセを借りるほど大きくなったと。

五味 50万人、一番あったときは集まってくるわけだからね。でも自分たちで売っている発想においては原点は同じなんです。もちろん全部が全部そうじゃなくて最初から商売でっていうのもあったけれども、一つの源流は明らかにミニコミ会議だった。

7. ミニコミセンターの閉鎖

閉鎖の理由

——ミニコミセンター閉鎖の半年ちょっと前にセンターの移転をしていますけれども、これはどういうことだったのでしょうか。

丸山 前にもお話ししましたように、新橋の5丁目の6階建てのビルの屋上に上物を乗せた「7階」にセンターはあったんですが、雨が降ると水が押し寄せてくるわけです。これはもうどうしようもないわいっていうんで移ったということです。飯田橋の朝日ビル（東京都千代田区飯田橋4丁目4番8号）。センターを閉鎖したあとには僕の事務所になります。

——すでに少しお話がありました、ミニコミセンター活動停止の理由についてうかがえますでしょうか。

丸山 この活動停止は、まずは必然であったということを含めて考えますね。模索舎は出版物を販売して、その利ざやで食うという、一般的な日本の出版界のしきたりを守ってる。ミニコミセンターは、買わせるんじゃなくて見せてそのまま返す。入場料は取ったかもしれませんが、100円ぐらいのもんでしょう。そんなもの10人來たって1000円にしかならない。要するに、財政面への配慮が足りなかった。ただし、私個人としては、社内報をネタに原稿や講演や講座の講師を務める道があったから、自分一人で食うということはそれほど心配はしなかった。この裏技がなかったらおそらくこのミニコミセンターというのは始めていなかったろうと思います。しかし、現実には自分一人、一家族が食うだけの収入では駄目なんで、ビルを一角借りてセンターを運営するには、月にそれなりの経費がかかる。この部分が出てこない。ミニコミセンターをやるために集めたお金は460万円。これを使い切ってしまった。人件費もかかりますし、家賃その他ですね。これが終われば早晚行き詰まることは当然です。

それから、最後はミニコミ会議のような連合体に運営を移すといったんだが、リーダーになれる人がなくなっていくようになってしまった。結局全て僕一人で樹立したもんだから。丸山センターで終わったわけですね。

ですから、ミニコミセンターを閉鎖すること自体は、僕には心理的にはそれほど圧迫感 wasn't. 自分で食う方便は持っているという自負があったから。

——センターの財政上の問題だとおっしゃいましたが、センターを設立した5人の仲間からは、その後の財政的支援というのは？

丸山 それはない。僕は真剣に財政面、運営面、企画面で彼らを頼れなかった。

——この頃すでに仲井富さんとはミニコミ市その他で知り合いであったと思うんですが、センターを閉鎖するときに仲井さんは動かなかったですか。

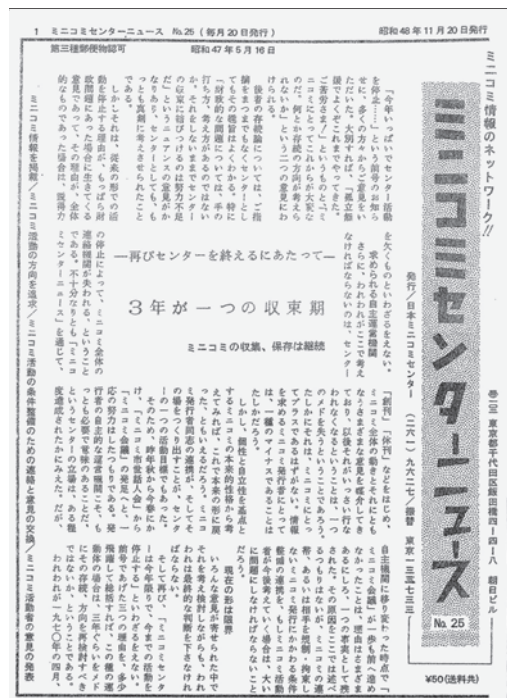
丸山 まだその頃は、仲井さんとセンターのつきあいはミニコミ市一つを通じてでしかなかったといっていると思います。だからとくに動くというようなことはなかった。

——その頃はまだ住民図書館につながるような構想を仲井さんも持っていなかった。

丸山 なかったと思います。

——センターの「最終アピール」が『ミニコミセンターニュース』の最終号に掲げられています⁴⁸⁾。ここでは「センターは当然閉鎖しません」と書かれ、ミニコミの収集、保管は継続するというふうに言われてるんですが、この段階では、どういうイメージでそのあとのことを考えられていたのでしょうか。

丸山 まあ、せつかく送ってもらっているものをこちらからお断りするというのは、失礼だと



センター閉館を告げるニュース

いう考えが一つあったでしょうね。やっぱり、送ってもらえるものならば送って、どこかでそれを見れる場をつくっていけば、送られてさえいれば、新しい事務所に移っても本棚の2本や3本はそれに充てることは可能ですから。そういうスタイルで、希望があれば継続することを続けていこうという考え方だったと思います。ただ、僕としては3年間で十分だろうと。充足感があったわけじゃないけれども、まあやるべきことはやったという気持ちでした。一度ミニコミに関与してみたかった。正木さんや、むのたけじさんの、ミニコミに対する志のようなものを、少しは理解できたかな。それが自分の人生にどのぐらい役に立つか、それはこれからの心がけ次第だと、いうぐらいに思ってたでしょうね⁴⁹⁾。

資料の委譲と坂口順一氏のこと

丸山 ミニコミセンターの最後の幕引きの時点で、ほとんど明らかになっていないのは、『タクシージャーナル』の坂口順一さん⁵⁰⁾との関係です。

——はい。

丸山 実はミニコミセンターを閉じるまでに集めた資料は、全て坂口順一氏のところに保管されて、今も活用されていない。

五味 活動を中止したあともしばらくはミニコミを事務所に置いてあったわけ？

丸山 置いてあったんです。それで、出版の方に切り替えていこう、それには、本ができれば在庫品を置くスペースも必要なんで大きな機械工具用の棚を新橋で買った。ミニコミセンターを閉鎖して必要ない資料を置いとくと、出版活動用の棚を置くのとでは違うので、どっか預かってくれるところはないだろうかと言ったら、坂口氏がうちに空いてるところがあるから引き取ってもいいと。僕はあなたが預かってくれるならば資料を委ねてもいいというようなことを言った記憶があります。それほどもうミニコミには手を出さない、この失敗には、僕も反省があった。

坂口氏は自分がミニコミセンターのあとを継ぐ。そのために自宅のガレージかなんか、ちょっとした建物みたいなものがあるから、とりあえずそこに入れておくんだと。

五味 僕ね、1回現場見に行ってるけど、確かプレハブを自分の庭かなんかに建てて、そこにとにかく詰め込んであるのは見た。整理されて

たかどうかはわからない。

丸山 あの人はタクシーの運転手ですけど、古い石油をろ過して、絵を描く油彩絵具を溶く油にする特許を持っていた。だから普通のタクシーの運ちゃんとはちょっと違う。そういう人なんです。そして油を作る作業場があるので、そこに大きな棚を入れる予定だと。僕もそこを見に行ったらカレーライスをごちそうになりました。嫁入り先を見つけに行ったら、全く知らない人ではない坂口さんに委ねるならばという気持ちは、たぶんあったでしょう。

——1974年12月10日の朝日新聞の記事に「昨年十二月末で対外活動を停止した日本ミニコミセンター（代表丸山尚氏）で保存していた資料がこのほど「タクシージャーナル」の坂口順一氏＝〔引用者注：住所省略〕＝に移されたが、坂口さんはこの資料を分類、整理中で、近く目録をつくり刊行する予定だ」とあります。とすると、坂口さんにミニコミを委譲したのは74年の秋から暮ということになりましょうか。

丸山 そうだと思います。

——この朝日の記事にはとても反響があったようで、坂口さんは75年1月に出た『タクシージャーナル』第44号のなかで、この1月に丸山さんと会って今後のことを相談する予定ですって書いてあるんですけど、会われましたか。

丸山 いや、会ってません。なぜあんなことを言ったのかは、僕にはわからない。

五味 センターを閉じてから住民図書館までは2年か3年間がありますよね。

丸山 その間、もっぱら僕は編集者としてのメディアの製作技術について話して回って、それなりに飯を食ってたという時期になります。たまたま人様並みに書く能力があったのか、ゴーストライターをやったり漫画のストーリーをつくったりしながら自立して、講演、講座、著作、学校の教師でやっていこうというところへ、住民図書館の話がきたということになるんですが、その間2年半あるわけです。

2年半の間に坂口氏のところに継続して送られてくるミニコミもそんなに多くはなかったがあった。僕は、ミニコミの価値としては定期的に送ってもらうことが大事なんだと思ってたけど、坂口氏はそれをやらない。ただ古い、当時集まったものを持っている。目録にするとはいっていましたが。

それで、住民図書館を作るときにミニコミセンターで集めた資料は坂口さんのところにある

んだと思ったら、仲井富はあの調子で、「じゃあ丸山さん、俺、その人に会ってみるよ」と会ってきた。そして丸山さん、あれは駄目だと。坂口さんを一刀両断で斬った。「丸山はミニコミセンターを閉じるにあたって、資料の措置に困惑をしておった。したがって俺に任せたんだ。任せたということは、私は一旦手にしたミニコミを手放すつもりはない。自分は自分でミニコミセンターの後を継ぐ形で、公開をするつもりである」という主旨のことをいって、戻さない。僕もその前に折衝はしているんだから、すべてを仲井富に委ねたわけじゃなくて、僕がまず、また再開することになったので、戻してもらえまいかと思ったら、いや、俺はもう目録づくり始めてるし駄目だと。それから坂口さんの方でもミニコミ資料室をやるとか、目録を作るといふ宣伝が行き渡ってるわけ。彼は彼でやる気だったんだと思う。そうしなければあれほど資料に固執はしないと思う。

——住民図書館ができてからも『タクシージャーナル』は送られてきていますね。立教大学共生社会研究センターの旧住民図書館資料にも何十冊が所蔵されています。

丸山 毎号きちんと来るという定期的な送付の仕方じゃなくて、何冊か一括して来たような記憶はあります。でもその頃は直接のやりとりはもうありませんでした。

——立教大にある『タクシージャーナル』を読みますと、79年段階で目録ができたということでミニコミのタイトル一覧が載っていました⁵¹⁾。300種類ぐらいのミニコミのタイトルが載っています。

五味 僕それ初めて見た。全部ガリ切りでやってるね。

丸山 彼はガリ版の学校まで行ってタクシージャーナルも手書きでやったんですからね。

——人類学者の重信幸彦さんという方が坂口さんにずっと取材されていて、1990年には共著で『タクシードライバーの言い分』というブックレット、2004年には『たったひとりのメディアが走った』という単行本を出されています⁵²⁾。それによりますと、『タクシージャーナル』は2003年6月に第335号で終刊宣言を出すまで続きました。その間坂口さんは2000年に脳梗塞で倒れられています。それで、2001年に重信さんにミニコミセンター資料は移管されたということです⁵³⁾。

丸山 よかった。あれだけが心残りだったんだ。

じゃあミニコミはまだあるんですね。

——はい。重信さんに直接確認したところ、いま残っているのは小型の段ボール6箱分、約2000点だということです。ただ、もともとあったミニコミセンターのミニコミのうち市民・住民運動関係以外のもので、自分のところにはそれだけが来たと坂口さんが言われていたそうです。

丸山 それは何かの間違いでしょう。坂口さんには一部だけじゃなくて全部預けたはずですよ。

Ⅲ. 住民図書館館長になる

——住民図書館史・前期

8. 住民図書館の誕生

——大久保・バプテスト会館時代

仲井富氏の誘いと設立の準備

——住民図書館が生まれるきっかけは仲井富さんの発案ということでしょうか。

丸山 はい。

——仲井さんが『住民図書館25年のあゆみ』に書かれた文章によりますと、75年の9月に大久保のバプテスト会館（新宿区西大久保2-350）がただで使えることになって、いろんな市民団体を入れていこうということになったと書かれています。ちょっと読みますと、「75年の9月、日本消費者連盟創立委員の1人だった岩田友和さん（故人）からの電話があった。「新宿区西大久保にバプテスト会館というのがある。その三階のフロアー約120坪が空いたので公害研も一緒に借りないか」という話だ。（中略）自主講座の松岡信夫さんもただちに賛成して、自主講座の翻訳グループが一角を占めることになった。伝えきいて、旧ベ平連の福富節男さんらのアジア政治犯情報センターも入居を申し込んできた。結局のところ大小10グループくらいが事務所として使うことになった。そしてここに事務所をかまえた各グループの連絡会議を常設し、これを「協働社」とよぶことにした。（…）もうひとつ、ここにあるもっとも広いスペースを「共同資料センター」としてつくっていこうということになった」と⁵⁴⁾。そのときに坂口さんとの交渉に時間がかかったと述べられています。

丸山 はい。坂口さんと仲井さんのやりとりについてはすでにお話ししました。

五味 確か、当初の住民図書館って、ミニコミ

表 3 日本ミニコミセンター略年表

1971.03.26	朝日ジャーナル「特集 ミニコミ'71——奔流する地下水」
1971.05	日本ミニコミセンター開設 (港区新橋5-17-2 日金ビル)
1971.06	ミニコミアンケート実施
1971.09	「ミニコミセンターニュース」創刊 (9.20)
1971.10	第1回ミニコミ集会 (10.2-3、横須賀市霊川寺) ニュース第2号 (10.20)
1971.11	ニュース第3号 (11.20)
1971.12	パルコ、ミニコミ即売会 (12.15-24) ニュース第4号 (12.20)
1972.01	ニュース第5号 (1.20)
1972.02	ニュース第6号 (2.20)
1972.03	丸山氏「ミニコミの概況」を『環境破壊』第24号に発表
1972.04	ニュース第7号 (4.20)
1972.05	ニュース第8号 (5.20)、1周年、「事業部」を構想
1972.06	ニュース第9号 (6.20)
1972.07	ニュース第10号 (7.20) 模索舎『四畳半襖の下張』事件で五味正彦氏逮捕 (7.28)
1972.08	ニュース第11号 (8.20) 五味正彦氏ら起訴 (8.18)
1972.09	ニュース第12号 (9.20)、ミニコミ市呼びかけ
1972.10	郵便問題を考えるミニコミの会第1回会合 (10.10) 第1回ミニコミ市 (10.15)、280のミニコミが参加 ニュース第13号 (10.20)
1972.11	新宿警察署、丸山氏を呼び出してミニコミ市中止を命令 第2回ミニコミ市中止 (11.12)、「ミニコミ市への弾圧に抗議する!!」ビラ発行 ニュース第14号 (11.20)、「ミニコミ連合」呼びかけ 第1回ミニコミ発行者交流集会 (11.27、私学会館 [市ヶ谷])、40名参加、「世話人会」結成 (岩田薫、中沢敦夫、横山悌二、石塚雅人、田中修、川口裕弘、清水ゆり子、宮下孝介、内山英治、仲井富、センターから3名)
1972.12	第1回「世話人会」(12.7) 13名参加 ニュース第15号 (12.20)、ミニコミ市中止の反響 都知事宛「公開質問状」(12.22)
1973.01	第2回「世話人会」(1.13)、「ミニコミ会議」への発展解消方針決定 (世話役: 川口裕弘 [OFF MEDIA]、岩田薫 [苦悩蒼生]) ニュース第16号 (1.20) 1973.02 美濃部知事の回答 (2.9) 「ミニコミ会議」代表者会議 (2.10) アンアン「ミニコミ特集」に対する抗議 (2.15) ニュース第17号 (2.20)、都知事回答
1973.03	カオスミニコミコーナー (池袋西武・川口裕弘) 開設 (3.2) ニュース第18号 (3.20)、民衆の広場づくり構想 模索舎第1回公判 (3.23)
1973.04	ミニコミセンター移転 (千代田区飯田橋4-4-8 朝日ビル)
1973.05	ニュース第19号 (5.20)
1973.06	ニュース第20号 (6.20)、デザイン・印刷方式変更、平凡出版不買問題
1973.07	ニュース第21号 (7.20)
1973.08	ニュース第22号 (8.20)
1973.09	ニュース第23号 (9.20)
1973.10	ニュース第24号 (10.20)、センター活動停止を告知
1973.11	ニュース第25号 (11.20)
1973.12	ニュース第26号 (12.20)、三年間の軌跡、最終アピール ミニコミセンター休止
1974.11 ?	「タクシージャーナル」坂口順一氏にセンター所蔵のミニコミを委託

センターと3者の合体みたいな呼びかけだったんじゃない？

丸山 ミニコミセンターと『環境破壊』を出していた公害問題研究会と住民情報資料センター。——とはいっても、公害問題研究会と住民情報資料センターは両方とも仲井さんと渡辺文学さんがやっているわけですから実体は2つですよ。人間でいえば仲井富さんと渡辺文学さん、それに丸山さん。

丸山 3団体の名前で住民図書館を立ち上げましたが、実質的には仲井さんと文学さんは一体ですから、2者ということになりますね。

——ちょうどこの準備期間に郵便料金値上げ問題をめぐって「ミニコミ大共闘」というのを作っていますね。1975年11月17日に、バプテスト会館で「郵便料金値上げに反対する全国集会」を開いています。呼びかけは日本消費者連盟、住民資料情報センター、婦人民主クラブ、自主講座実行委員会、日本ミニコミセンター、公害問題研究会。この集会で「郵便料金値上げに反対するミニコミ大共闘」を結成した⁵⁵⁾。この呼びかけ団体を見ると、住民図書館設立に関わる団体といってもいいですね。

丸山 そうです。郵便料金が値上げになったり、利用条件がきつくなる。たとえばミニコミで第三種をとるのに、1000部以上発行してそのうちの8割は有料でなきゃいかんなんて条件を出される。大企業には割引をして、ミニコミつぶしをやる。これは許しがたいと同時に、僕の生業は自分で本を書いて、自分でつくって、自分で売るといものだから仕事と直結している問題でもある。民主的な料金設定というものは、理念としてのミニコミが健全に社会に機能していく条件でもある。

——そのときの「ミニコミ大共闘」の呼び名で集まったいろんな団体は、この限りだったんでしょうか。

丸山 結局私の方で呼びかけなかったのも、その限りになった。

五味 僕の理解では、ミニコミ会議っていうとどっちかっていうと文化的で、なおかつ若者が多いわけ。郵便料金に関しては、婦民（婦人民主クラブ）なんかも加わってるんだよね。だからちょっと違う。大人が多い。

——その頃にはもう住民図書館を作ろうという呼びかけがあったわけですね。

丸山 この話が急速に進んだのは、いまこのバプテストの3階を使うと、安くて、当時で4

万かそこで済むと。いずれにしても、場所を早く確保するために呼びかけ人を立ち上げようと、賛同者を集め始めていた。仲井さんが僕に声をかけてきたとき、「どうだ」というから大変いい話じゃないですかといった。いろんな人たちがズラッと名前を並べて、確か松下竜一の名前もすでに入っていたと思います。それで責任者は誰がやるんですかといったら、「あなたがやるんだ」、丸山さんがやらなきゃこの話は没になると。

——「丸山さん、あなただ」っていわれたときに、引き受けるべきだとすぐに決断されましたか。

丸山 いやいや。それは悩みましたよ。まず家族が賛成しない。その前に、私は3年間ミニコミセンターをやって、ああいうフリーの法人組織がいかに関営が難しいかということは身に染みてわかっている。特に財源がきちっと明示されないような活動は、俺はもう、苦勞の経験があるから引き受けるわけにはいかないと。当然僕はそういう主張をする。そうしたら、カネに関しては一切心配はかけない、カネに関しては俺たちの、そこが腕なんだと。俺たちはそういうことを得意としてるんだから、心配なくていいといった。革新自治体が大きな流れとしてあちこちに誕生して、今まで自民政権でできなかったことが地域で実現していくんだ、それには地方からの情報が必要だと、仲井富のことだからそのぐらいのことは言ったでしょう。あなたはただ、館長をやればいいと。僕はまた、それで済むんならと…。こういういきさつで、館長を引き受けることになってしまいました。

五味 当時バプテスト会館っていろんな市民団体が入ってたよね。

丸山 1階にはあの八百屋、大地の会のステーションを、あそこに小型トラックを入れて契約消費者に野菜を配って歩いてた。2階はバプテスト派教会の事務所。3階が丸々空いていた。バプテストの3階というのは本来だっ広いところにあとで区切りを入れて使っている形だった。ここに仲井富の公害問題研究会も入った。ほかの住民運動をやってるグループの連中が、5坪か6坪なら住民図書館分の家賃も周りの3階の住民みんなで負担してくれるからということだった——最後は住民図書館も請われて家賃支払いを義務づけられるのですが。

——住民図書館の設立に当たって、設立委員会

というものがいくつかの資料に載っていたんですが——日消連、婦人民主クラブ、自主講座、公害問題研究会など20団体があったというんですが、これ、どのくらい実体があったんでしょうか。

丸山 ほとんどなかったですね。やはり住民図書館の設立は、仲井富の住民運動の共同資料室の必要性という認識から起こってくる。住民運動が下火になっていく。ほとんどが裁判闘争やって勝っていくわけですから。そうすると住民運動なんてのは、いい形で収束したらもう二度とこんなものに関わりたくないということになる。その前に、まず人間関係がごちゃごちゃに壊れてますからね。だから、問題は残された資料をどうするか。裁判やれば裁判資料というのは膨大で、弁護士事務所はそんなものを保管してくれる義務を持ってるわけじゃない。戻ってくるわけです。全国の公害問題を聞いている人たちもおしなべて資料を抱えて困っていた。そこで共同資料室を作ろうというのが仲井さんの発想でした。仲井さんは社会党時代からいろんな市民運動や住民運動に人脈を持っていますから、そういう人たちに呼びかけて、まず呼びかけ人を集めるわけです。これが大体仲井人脈。

——丸山さんが書かれた「「住民図書館」開設のごあいさつとお願い」という文章⁵⁶⁾には、「今年もあとわずかとなりました」とあって、「私たちは、かねてより、「住民図書館」の構想を推進して参りました。大方の準備も終了したのでここに「ごあいさつとお願い」を申しあげます」と書かれています。これは75年暮れの文章だと考えることができますが、そうすると9月から動き出して、年内にはカンパを呼びかけ始めておられたということですか。

丸山 はい。そして2月にもう朝日が、僕が館長になるということを「ひと」欄で流しちゃいました⁵⁷⁾。それで運営規定を作ったり、カンパの要請をしたり。

——ミニコミセンターのミニコミが戻ってこなかったとすると、ミニコミはどういうふうにして集めたんでしょうか。

丸山 それは仲井さんのところにあったミニコミと、それから住民図書館を始めるのでよろしくというあいさつ状にミニコミを送ってほしいという依頼状を付けたので、それで送ってくれたものと。約240にはなったと思います。

——開館の一月前に、丸山さんは「「住民図書館」とミニコミの役割り」という、住民図書館

の理念をコンパクトにまとめた文章を『公明新聞』に書かれています (1976年3月4日)。その後丸山さんが住民図書館について語られるときの基本的なことは、もうここに全部書いてあるという感じです。まず住民図書館は市民運動、住民運動の共同資料室であり、第二に分野ごとに分類してコーナーを作りたいということ、第三に東京にセンターとして作るのではなくて、全国を横断しながら共同資料センターづくりをしたいという3つのことが述べられています。先ほど「共同資料室」というのは仲井富さんのことばだといわれましたが、こういう理念というのはどのようにして練り上げていかれたんでしょうか。

丸山 資料というのは集めるのに熱心だけでも、使う段になるとモルグ化してしまう。モルグというのは、図書館用語で死に体ということになるんですが、住民運動も活用者が非常に少ないですね。われわれは住民図書館を作るときに、この経験を次の経験につないでいく、とくにアジアの国々に日本が公害輸出をするような振る舞いがもしあるとすれば、それはチェックしなけりゃいけないというような発想を、強く持っていた。

——ここにまとめられた考え方は、丸山さん単独のお考えなんですか。合作的な部分っていうのはあるんでしょうか。

丸山 話し合い、討論においては合作的要素が



ひと「丸山尚」(朝日新聞76年2月28日)



公明新聞76年3月4日

あるけれども、原稿に変わっていく過程では、僕の個人的な思考というものが中心になってると思いますね。公明党の諸君は非常に住民図書館やミニコミについて熱心で、僕の『ミニコミ戦後史』なんか『公明新聞』に連載させてもらったのをまとめたものですから。その後も、1年に2回か3回は必ず学芸欄にスペースを提供してくれました。

開館

——開館は1976年の4月3日ですね。丸山さんは住民図書館の開館の2年後に『総合ジャーナリズム研究』に書かれた論文の中で、「私としてはミニコミセンターを住民図書館に発展解消した気持ちであった」と書かれています⁵⁸⁾。

丸山 それは、その後も今も変わらない考え方でしょうね。僕の中ではミニコミセンターと住民図書館は人格が違うけれども、それほど大きな隔たりはないという感じでおります。

——その点に関連してひとつおうかがいしたいのは、住民図書館が開館したあとも、かなり長きに渡って丸山さんは、「住民図書館館長 丸山尚」の名前で文章を書かれるときと、「日本ミニコミセンター代表 丸山尚」で文章を書かれるときと、2つの肩書きを使っておられたと思うんですが、これはミニコミセンターが対外的な活動は停止しても丸山さんはセンターをずっと続けているという意味なんでしょうか。

丸山 そういう意識ですね。

——2つの肩書きの使い分けというものはあったのでしょうか。

丸山 1つは、ミニコミセンターの方が仕事がしやすい例が中にはあった。住民図書館は住民運動の資料センターだということを知っている人たちは、そういう人物を国家公務員、地方公務員を研修する研修会や講演の講師に呼ぶことはいかがなものか、「住民」というのはどういう意味だということになる。それよりも日本ミニコミセンターのほうが安定感があって、そういう理念というものをいちいち払拭する動きをしなくとも済むということ。それから、かつてのミニコミセンターの活動を覚えていて、ミニコミセンターの丸山としての私にコンタクトをとってくる人が、辞めてもいたわけです。この2つが理由ですね。1つは仕事のしやすさ。2つはミニコミセンターの時代にコミュニケーションがあった人との継続的関係を残すため。これは、ずっと最後までそうでした。それから、

いわゆる「評論家」という肩書きも使っております。使っていないのは「ミニコミ研究者」という肩書きで、それは僕は僭越ですから一度も使っておりません。

——メディア側で勝手に「ミニコミ研究者」と書いてしまうことは？

丸山 もちろんあります。

——それでいよいよ住民図書館がオープンになるわけですが、開館のパーティーはどのような様子だったのでしょうか。

丸山 住民図書館を設立すると決定した時点で、1口1万円になるカンパを送ってくれた人たちに集まってもらいました。ご報告とこれからの進路を考えてもらう、それからお祝い、3つの意味を持ってオープニングパーティーをしました。地方からも含めて、50人ぐらいの人が集まってくれました。場所はバプテスト会館の、この住民図書館が資料を配置するという予定の部屋を使ったわけです。

——「住民図書館」設立と開館のつどいの案内には「バプテスト会館三階市民ホール」と書かれていますね⁵⁹⁾。当日は何人かの方がアピールやあいさつをされたのでしょうか。

丸山 30人ぐらい。次から次へと。

——住民図書館が入っていたバプテスト会館3階の区切りを描いた配置図とか写真などはないのでしょうか。

丸山 それがないんです。公害研の隣に住民図書館専用の部屋をつくるというって大工を呼んだんです。そしたら、入り口にぶら下げる「住民図書館」っていう看板を大工がつくってきて、製作料として15～16万請求してきた。みんな怒って、払わねえといたら大工はその看板持って帰っちゃった(笑)。その写真だけは残っていると思います。

——開館1周年の集いで『住民運動・市民運動総合資料目録』を発行されていますね。

丸山 あれは手抜き仕事で、公害研が以前に住民運動の名簿をつくった。これにくっつけてミニコミのリストをつくったわけです。確か800円で売ったと思います。800円に送料200円で、1000円。

五味 最初に公害研が出したのは覚えてるんだけど、その改訂版に当たるわけ？

丸山 そう、そこにミニコミを入れた。ミニコミを入れて、「資料」と称して、資料目録というものにした。

——じゃあこれには丸山さん自身はあんまり関

わっておられない。

丸山 いや。半分ぐらい。最終的には僕がチェックする形になったと思いますけども。いずれにしても、もとは公害研のやったアンケート調査。そして、郵送料入れて1000円で買えるというもので、1周年の集いの際に案内をしたということです。ただ、1周年といっても目標がないわけですよ、この頃の活動は。責任を持って運営する体制もない。ここで役割を持った人間は仲井さんしかいない。

組織上の整備は1年たっても行われず、相変わらず仲井さんの1人がんばりでね。その仲井さんのくせというのは、「つくるけど、あとは人まかせ」なんだ。そのことは自分でも言ってます。住民図書館が閉館する際、『住民図書館25年の歩み』の出版記念パーティーとかねて「さよならパーティー」をやった際のスピーチで、「僕はつくるけど自分で育てず人にまかせる悪いくせがあるんだ、すみません」とはっきり言ってます。「住民ひろば」も、「住民情報資料センター」もつくるんだけど長続きしない。住民図書館のときもその意志を示す行動が伴ってこない。だから僕などは心細くなっちゃうんだ。

でも、仲井さんは仲井さんで、がんばってはいたんだ。だって状況は悪くなっているがつぶれずに維持されてるんだもの。それなりの責任は果たしているわけだ。だがそのスタイルが違う。でも、当時の革新政党と言われる中でも社会党などは、イメージだけでなく現実にもいい加減だったよ。政治の世界では公約などは破るためにあるんだと言わんばかりの、責任感の薄い世界だもの。ともかく社会党と言うと、“いいかげん”というイメージがつかまとう。僕は、社会党には世話になったよ。いい人もいた。『社会新報』に長い間、連載させてもらったし、座談会にも出た。弁護士の中島通子さんと党大会に呼ばれ、市民の目から見て忌憚なく批評を書いてくれとホテルに缶詰めにされ、朝5時締め切りの原稿を書かされたこともある。

いい人はいいんだが、全体がどうもいい加減だったんだ。『月刊社会党』という雑誌があり、知り合いの男が編集をしていた。原稿を書けと言うから「社会党は稿料をくれないだろう」と言うのと、「そんなことはない、必ず出す」と言うんで書いたら案の定、稿料をくれない。「もう少し待ってくれ」「来月払う」と言っている間に時は過ぎちゃった。ちゃんと予算制でやっ

ているだろうに、どうしてこんなことがおこるのか、いかにも社会党らしかった。

社会党は労働組合との関係の中で、まとまったカネをもらったり、派閥単位で行動したり、よくわからない。そんな中に仲井さんがいたのだから、計画性より偶然性の方が多い日常をすごしていたんだと思うよ。しかしこうした雰囲気の中で、住民図書館の仕事をするのは、苦しかった。私はあちこちにミニコミ送付を依頼し、少しでも多くして整理することにつとめました。

——開館して1年半ちょっと経った77年12月に住民図書館の会報『ぷりずむ』が創刊されています。これはどなたの発案だったんでしょうか。

丸山 これは住民図書館がスタートした時点からの私の悲願です。

——じゃあ、これは丸山さんのイニシアチブで？

丸山 そうです。これは、仲井さんが言い出すということは、ちょっと考えられない。『ぷりずむ』のタイトルは、当時スタッフだった沢石栄子さんの発案です。

——何人ぐらいで作ってたんでしょうか。

丸山 これは作るほどのページ数がない。だから、沢石さんと僕で作ったようなものでしょう。そのうちにページ数も増えますけどね。アルバイトに来てくれる学生諸君が折ったり、宛名書いたり、出したり、いろいろしてくれました。そして、ここにいろんなニュースが入ってくるようになって、一つのスタイルができていくということになります。

——1978年4月の2周年の集いでは、参加者の名簿が残っていますね。ここには仲井富さんの関係か、土井たか子、秦豊などの国会議員、柿沢弘治までいますが、それとともに、まだ議員になっていなかった菅直人なども名前が出ています。

丸山 柿沢は間違えたんでしょう(笑)。菅君は住民図書館の普通の勉強会にも来てました。それから、会費をきちっと、遅れることなくずっと払い続けた何人かの人がいますが、菅さんもその一人。

——いい会員だったんですね。

丸山 加藤宣幸とか、貴島正道とかいう人たちは社会党の江田派で、富さんの人脈で来ているんだね。浪江慶さん⁶⁰⁾は僕の側から、金子勝昭も名前が消してあるけど、来る予定でいたんでしょうね。健友館の坂本遵というのは渡辺文学さんの個人的なつながりでしょう。安井吉典が

開会あいさつをしたことも僕は覚えてますよ。ただこうなると、これは住民図書館の2周年というよりも、それぞれの人たちの人脈の大会みたいなものなんですよ。中身は図書館発足2周年でなくたって、こういうメンバーになるんだ。各派閥というか系列の大会なんですよ、これ。

——78年8月という早い段階で東京都社会教育部から助成金を受けていますね⁶¹⁾。これはどなたが担当されたんでしょうか。

丸山 これは僕が担当した。東京都が各区の図書館の職員担当の研修をやって、講師を僕がやった。講演が終わって応接室にいたら奥野定通館長がやってきて、「丸山さん、住民図書館大変ですね」、「大変なんてもんじゃありませんよ」という話をしていたら、「都の助成受けたらどうですか」、「都の助成受けるったって、館長、あんたからお金、今ここでもらうんですか」と言ったら、職員をすぐ呼んで、今回の助成締切日はいつ？ 明日だと。それであわてて手続きをして、ファイルが必要だとかいって50万円ぐらい申請したら、くれたのは10万円。僕は半分の25万はくれるかと思っけど、でも奥野さんって美濃部の抜擢人事の1人ですよ。ありがたかったです。

初期の運営体制

——初期住民図書館の運営体制についておうかがいしたいんですが、最初、副館長は松岡信夫さんだったんですか。

丸山 うん。同じ階にいたから。

五味 あの頃の松岡信夫さんは、市民エネルギー研究所を作ってる頃だね。市民エネ研。

丸山 あと、常駐しているから渡辺文学さんが来館者に対応してくれたりしていた。松岡さんには、隣の部屋ということもあるけれども大変世話になってます。僕はいずれにしても、最初は土曜日に1回来ればいいということだった。なぜなら、僕の役割なんてないんだから、何も要するに、ミニコミを集めて見せる、それだけで、組織的な会員制度をとっているわけでもない。会員もいないんだから、知らせる必要もないわけです。あんたは何もしなくていいんだというんで、1年も過ぎちゃったんです。だけど、全然発展というものがない。ただし、資料は増えた。

——『住民図書館25年のあゆみ』の中で、丸山さんが各時期のスタッフの名前を紹介しておら

れます。76年からは山下俊洋さん、酒井伸一郎さん、西郷泰之さん、沢石栄子さん、岡部一明さん、78年からは松井英樹さん、片柳義春さんというお名前がありますが、簡単に結構でするのでどんな方々だったかお話しただけですか。

丸山 学生諸君が多かったです。山下俊洋君、これは中央大学ではなかったかと思います。

酒井伸一郎君は品川区の公務員、職員です。これは、年齢は結構いってますが、土曜の午後ほとんど来てくれて、手伝うんですけど、公務員としてしつけられているもんだから、「切手を貼ってくれ」というとミシン目にしたがつて1枚ずつ切り始めるから、それは駄目だ、10枚1列で折り目を付けてピッピッピッてやればすぐ10枚貼れる。君のは10枚いく間に1枚いかない(笑)。西郷泰之君は、これは間違いなく中央大学の学生で、有楽町にある全国社会教育協議会、全社協の職員になって出世した。沢石栄子さんは普通の主婦で、何年間か手伝ってくれ



大久保時代の住民図書館、右端は仲井富氏
(毎日新聞76年4月13日)

ぶりずむ第7号 (80年1月)

んですから。

——これはもし出てたら、すごいシリーズですね。

丸山 そうですよ。だから、あの人たち、僕も含めてだけど、間違っただけは言っていないんです。ただ、実行力が伴わない。

——バプテスト時代の一番最後に維持会員制度というのを導入していますが、これはどういうものだったのでしょうか。

丸山 それも非常に便宜的です。中には、その程度の金を出せる余裕のある人がいるんじゃないかという程度の動機で、組織をつくればなんとかあるという安易な構想がそこに述べられただけの話で、現実にはそんなものに対応する人はほとんどいなかったわけです。それで貧乏になっていった。

——あとでだんだん整ってくる運営の仕組みとは、まだこの頃は全然違う？

丸山 これは窮余の一策です。カネの心配をしなくていいと言っても、カネがなければ何もできない。革新自治体も下り坂となり、各地で革新自治体の長が落選すれば、『環境破壊』の購読も打ち切られる。最初の約束だから、なんて言っていられる状況ではなくなった、ということです。

これまで運営委員会も会員制もなかったのは、それですめばそれでよかった。しかし、そうはいかなくなった。運営委員会を作らなかったのは、仲井や渡辺文学が自分たちの存在感が薄れるから、というのはうがちすぎでしょう。

9. 平河町時代

市民運動全国センター構想と住民図書館

——1980年9月に住民図書館は平河町の市民運動全国センター（千代田区平河町1-7-3）に移転します。この経緯は。

丸山 この発端は須田春海⁶⁴⁾の登場です。須田の父親は、評論家の須田禎一です。東京都知事だった美濃部亮吉さんが知事を引退したあと、参議院議員に出そうという話が出てきた。美濃部というタマをぶつければ当選は間違いない。票は必ず取れる。これは都政調査会にいたことのある須田春海じゃないと、なかなか出てこない発想です。しかし、美濃部自身は自分はもう務めを終えたんだからといって出ようとしない。そこで、消費者運動の人たちなどが美濃部に陳情に行って納得させた。実際に当選しましたけ

ど、議員になると歳費というものが月々入ってくる。それに文書通信費が当時60万円出た。美濃部は自分を推挙した団体に還元して有効に使ってもらえばいいという。文書・交通・通信費は市民運動へ。じゃあ、このお金で家の1軒も借りて、ということになった。それが市民運動全国センターということになるわけです。平河天満宮の前の2階建てしもた屋を1軒借りて、「市民運動全国センター準備会」という名前のグループをつくって、須田春海が印刷屋を始めた。

五味 あれ、生活社とかなんとかという名前じゃなかった？

丸山 その事業団体、印刷会社が生活社。この時、私が作った交鈴社という株式会社を、須田にプレゼントした。登記の変更だけで済んだので、会社を設立する経費の半額以下で済んだ。須田春海は、その後自治労とタイアップして「アースデイ」を日本でやるようになる。アースデイのビラ、チラシ類を大量に作って自治労の運動にし、経費は自治労から出る、そういう関係です。

美濃部にお金を出させて一軒借りる、市民運動の全国センター。須田さんがそう出るのなら、俺らも一緒に美濃部に陳情に行ったんだから、平河天満宮の2階建てしもた屋へ行ってもいいじゃないかと文学さんと須田が話し合っ、計3団体が無料で家屋を使うということになった。

——そのとき住民図書館も一緒に移るとのことになったんですか。

丸山 その頃バプテスト会館も月に4万と安い家賃だけでも払っていた。平河天満宮へ移転すれば、ただになる。そして、その台所つきの2階の畳の部屋、すなわち今まで住居だった部屋を住民図書館として使わせてもらうということになった。それで全国センター発足と同時に平河町へ移ったと、こういうことです。

平河町時代の住民図書館

——平河町時代の住民図書館はどんな感じだったのでしょうか。

丸山 その一軒家は1階が須田さんたちの印刷屋と事務所で、2階が広い畳敷きの部屋だった。ここは権利の関係が非常にあいまいで、棚にミニコミが収めてあって、畳敷きにあぐらをかいて座る方式の机で資料を見るようになっていたけども、下では印刷機がばたばた言ってるし、

2階では会議をガンガンやっている、という具合で。ついにおとなしいミニコミ利用者からもクレームがつくわけ。ミニコミを見るところがなくて立って見てる場合もある。

——平河町時代は80年の9月から84年の3月と約3年半、バプテスト時代とほぼ同じ長さになります。この頃の運営とスタッフの状況についてうかがいたと思います。丸山さんは木庭貴和さん、山本和彦さん、近藤準さんが『ぷりずむ』担当として、それから渡辺美智子さん、中嶋康さんがおられたと書かれています⁶⁵⁾。

丸山 木庭君や山本君や近藤君は日大の新聞学科で、ゼミ仲間なんです。

五味 同じ学年かどうか覚えてないけど、もう一人、日大の新聞学科に阿部裕行というのがいた。

丸山 阿部君は新聞協会に入って、市長になった。阿部君も仲間ではないけども、大いに知り合い。新聞学科だからね。それが新聞協会に行きつてフリーになって、いま多摩市の市長です。

五味 ずっと多摩でも住民運動やってみたい。

丸山 阿部君はやっぱり一番しっかりしてて、木庭君たちは近藤君がゼミ長で、無責任じゃないんだけど、『ぷりずむ』の編集を依頼しても作業がなかなか進まないんだ。急ぐということをしなから発行が大幅に遅れる。だから阿部君がそれを知って、「無責任な連中だ」と言って怒ってたことがあった。

——渡辺さんはどういう方だったんでしょう。

丸山 渡辺さんは、杉並に住んでおられまして。旦那さんを亡くして、息子さんが東大から早稲田を出て東京都庁に入職しておられた。うちにいてもしょうがないから社会的な活動に少しでも関与したいという動機で手伝ってくださった方です。いいとこの奥さんだったので、ゆったりと仕事をされる。だけど留守番役や資料整理を長くやっていただきました。当時住民図書館開館日は一日おき、週3日ぐらい。僕は出なくていいといわれたけど、土曜日には仕事をほぼばらかして住民図書館の館業務に当たっていました。でもそれほど力は割けなかったもので、このアルバイトスタッフの皆さんには大変感謝しております。中嶋康君というのは、図書館学の資格を持っていて、それで住民図書館に「こういう図書館もあるのか」といってみえて、ちょっと手伝ってくれた。

——この頃、月2回スタッフ会議をやっていると丸山さんが書いているんですが⁶⁶⁾、大体そん

なペースでやっていたんでしょうか。

丸山 それはちょっと多い。そういう時代もあったのかもしれませんが、館業務としては月1回打ち合わせのチャンスがあれば、ほぼよかったような気がしています。

——入館者数は、平河町に移転した初年度が156名、2年目が132名。その後、88名、44名とかなり厳しい状況です⁶⁷⁾。

丸山 これはひどいですね。ただし振り返ってみれば、市民運動全国センターの2階をお借りしてやりましたが、ほとんど外に呼びかけた活動はしていませんね。そういう時代だから、年44名というのはちょっとひどすぎますけれども、実質的にこの時点で機能、役割を終えているということもいえますね。

——1982年4月に一般会員制というのを導入していますが、これは経営の安定のためということでしょうか。

丸山 それまでは維持会員制度しかなかった。ところが、入ってくると僕は思っていた仲井ルートからの金はほとんど入らない。それで会員制を敷くしか収入の道はない。このままやっているといくんなら会員制を制度化して、予算を確保していくしかない。そうじゃなきゃ、このままだ

平河町時代の住民図書館

う閉館にすると。どっちにするかといって、会員制を採用したということになるんですね。

——82年の10月に、社団法人化構想というのがありましたが、同じくこれも運営の安定のために提案されたものですか。

丸山 というより、それは実に僕の思いつきでハッターです。実際に公益法人を設立するときには、出資金を相当額、最低2〜3千万積まないと申請ができない。実現するはずはないけど、景気づけに社団法人化としてみた。まあハッターと思ってください。

——もう一つ、「副館長問題」がありましたね。林文也さん、次が知念政光さん、相次いで就任してはすぐ辞めるというのは？

丸山 これは僕の人を見る目のなさで、恥じると同時にいかに人的な不足があって困り抜いていたかということでもあります。とくに知念は、長年、東京都の最後は品川区の図書館で定年退職になったそうですが、長年公共図書館の司書をやって、図書あるいは図書館については超ベテランであると自分で売り込みに来て。

——売り込みにきたんですか。

丸山 市民運動全国センターへ彼が来たのは、住民図書館のためにここを訪ねてきたわけではないけれど、既成の日本図書館協会をこてんぱんに批判して「あれでは駄目だ」といって、自分の意見の正しさを主張してた。僕は、図書館については全然素人でわかりませんでしたけど、そういう知念さんの口舌に、こういう人に補佐してもらえればうまくいくんじゃないかと、つい目がくらんでしまった。こういうベテランがついていて、聞けば勤めもしていないようで、週3日の開館をフォローしてもらえばいいと。ところが副館長になったらすぐ来なくなった。

林文也さんは、環境問題のグループ中心に、東京の空気をもっときれいにしろ、と東京都を訴えたNO₂訴訟の原告団の1人で、この日公判のあと、みんなで寄ったんです。医者や山本理平なども一緒です。林さんは見たところは非常に立派でいうこともまともなんだ。聞いたら無職だった。副館長にすればミニコミの整理をやってくれるだろうということで副館長の人事を発令してしまった。その頃は運営委員会があるわけでもなく、仲井富なんかに相談もせずに、僕が独断で副館長の辞令を出した。副館長に任命された日は来たけど、それから来なくなって(笑)。

——これお2人とも揃ってそうだったんですね。

丸山 2人ともそうなんだよ。来なくなっちゃった。だからそもそも、林さんも知念さんも副館長になれるようなタマじゃなかったものを、見当違いで2人に迷惑をかけたと言わなきゃならない(笑)。

——平河町時代には入館者は少なくなっていたが、対外的なイベントをやるようになりました。「80年代の広場」(81年6月)とそれが名前を変えたミニコミ公開講座(82年4月から9月まで5回)、そして「フリーブック・ミニコミフェスティバル」(82年11月2-3日)ですね。

丸山 「80年代の広場」は僕が「今なぜミニコミか」という話をして、フリーの会議形式で中身をつくろうとしたけれど、やっぱり弱かった。何とかミニコミ発行者同士で連絡を取り合うようなことをやらないと、という焦りもあってこの催しにつながり、どうもポイントがない集まりをぐだぐだやってもしょうがないから、経験者を呼んで話を聞くという形を取ったかどうか、というふうに移行していったんだろうと思いますね。それが公開講座だと思います。市民運動全国センターの2階は昼の部屋で、30人ぐらいなら折りたたみ机を並べて対面で会議ができるようになった。前田俊彦を呼んだときは『瓢鰻亭通信』なんて読んだものは誰もいないけど、どぶろくをじいさんがつくり始めて、どぶろく裁判が始まる頃は、前田俊彦を知らないものはないぐらい。三里塚へ移って、「三里塚営」というどぶろくを造ってた。酸っぱくて誰も飲めないものを、じいさん一人でピチャピチャ飲んでた(笑)。

——フリーブック・ミニコミフェスティバルは五味さんも深く関わっておられるということで、どんな形で企画されて、どんな具合だったのかについてお話いただけますか。

五味 72年にミニコミ市が弾圧されたでしょ。だから、何かのきっかけにミニコミ市的なものをやりたいと。僕の運動するときのルールみたいなものがあって、必ず新しい要素が2つぐらい入って一緒にやれるという前提を考えるわけ。つまり、新しい要素だとか新しい組み合わせが2つ。そのときには住民図書館とか模索舎も含めて、これが、長く続く市民運動系が1つの流れとするじゃない。もう1つ、中小出版社との運動的な集まりが広がっていて、それから図書館人との運動も広がっているから、図書館人と、それから出版社の連中とが、2つの新しい要素。プラスももとの市民運動系。市民運動の中に

は、たとえばピースボートとか、そういうのも入ってくるわけ。そういう2つの要素があったんで、僕はたぶんこれをやったんだと思いますね。

——確かにそうですね。図書館とNR出版協同組合・流対協が入って。

五味 これの中心だったのは、出版社の方は新泉社の小汀良久さんと、第三書館の北川明、それから『技術と人間』の高橋昇さん。出版関係者ではこの3人が中心中の中心。図書館関係は、これもいくつかの勢力があるんですよ。きっかけは、出版の方も図書館の方も、コンピュータ管理の問題。当時はそれに反対するという、そういう出版人と図書館人の集まりがあった。もともと本屋とか出版社と図書館というのは、広くいうと同じ業界だけど、実はそれまでは全く接点がなかったんですね。最初に図書館関係の雑誌を出版したせきた書房ってところの関田稔さん。もともとは、この人はせりか書房にいた人。

——せきた書房からは『季刊としょかん批評』を出していましたね。

五味 そのあとそれが、出版社も変わって『ず・ぼん』というのに変わった(ポット出版)。だけど、編集の中心メンバーはずっと同じ。たとえば、その中に堀渡という国分寺の図書館長とか、それから立川の図書館で労働組合の中心だった斎藤誠一とかね。大体はみんなその職員労組ね、自治労の中心活動家でもあった。それから、あとは関西の図書館人も合流してるんですよ。室伏っていうどこかの大学の図書館。それからあと、追手門大学の図書館員は5~6人まとまって活動しました。そういう出会いがあったんで、こういう企画をした。やっぱりつくり手が売するというね、ミニコミ市の原則みたいなものがあるじゃないですか。それを復活させたいと思ってたんで、狙ってはいたんですよ。ずっと。

——じゃあこれはかなり五味さん中心にやった企画ってことですね。

丸山 そうです。あれは盛況でしたね、フェスティバルは。僕はジャーナ専(日本ジャーナリスト専門学校)で教えていて、授業として学生を連れて奉仕園まで行って。関田氏がざっと説明してくれたのかな。

運営委員会の創設——自立への第一歩

——平河町時代の終わり、1983年11月19日に

「住民図書館の集い」が開かれています。これはどういう経緯で開かれたのでしょうか。

丸山 ともかく、初期の頃は動くにも動きようがない。組織もなければ金もなければ、はっきり言って人もいない。この「住民図書館の集い」がなければ、僕は館長をやめたかもしれない。何もかもうまくいかない。思い通りにいかない。そこで仲井富や渡辺文学でなく、ミニコミを出している人や、その他活動している人や、僕の友人たちの考えも聞いてみたいと思って、20人ほどの人に集まってもらった。そうしたら、みな口をそろえてやれというんだ。及ばずながらできるだけことはやるから、がんばれと言って、早速10万ずつ出すという人が現れた。そしてこれが、本気でやるきっかけになった。そのための運営委員もここで決まった。運営委員会方式で、いよいよ自立を目指していくということになる。

——このときの参加者の名簿を見ますと、多摩社会教育会館市民活動資料コーナーの山家利子さんとか、のちに運営委員会代表になる平川千宏さんも参加されていたりとか、その後の重要な関わりを持つ方々がこの辺で登場してこられる。

丸山 そうなんです。ここに平川さんや須田春海が出たりしてるのは、市民運動全国センターでこの会議をやったわけで。加藤典洋は、カナダから帰ってきてすぐに、お礼の意味もあって出たの(この点は後出)。あとは、ほとんど僕の個人的な関係でした。田村裕君とか森川方達君、それから門奈直樹さん、これは僕の友人連中をここにに入れて数を増した。木村聖哉もそうですね。宮崎省吾もきた。

——このとき運営委員になった方について教えていただきたいんですが、運営委員会代表の浪江虔さんはすでに何度かお話に出ましたね。

丸山 浪江先生は南多摩農村図書館を町田市鶴川に設立して、農民に本を読んでもらう運動を戦前からおやりになっていて、学ばなきゃいけない人だと僕は思っていました。僕とは自治体の広報誌づくりのセミナーの講師として一緒に出講したりして、住民図書館をつくる前から知ってた。それで、名前もある人だから、住民図書館に一肌脱いでもらえないかといって、運営委員の代表をしてもらおう形になった。浪江さんは住民図書館を非常にシビアに見ていて、「丸山君、住民図書館もこのへんがそろそろ潮時でないか」と忠告してくれたことは一回ならず。

再三とは言わないが、「こういうことは報われないんで、君もこういうことであたら人生を埋もれさせても」。そういう忠告、アドバイスはしてくれたけど、最後まで離れずに見てくれた恩人です。葬式にも行きました。

——山本理平さんという方はどういう方でしょうか。

丸山 彼はお医者さんで、環境権訴訟の、林さんと同じ原告だった。呑川の環境を守る会。手書きのミニコミも2ページか4ページの小さなのを時々出していた。飯田正剛さんは弁護士です。この頃はまだ修習中だったのかな。嫌煙権の人で、会議があると宮崎省吾がわざとぶかーっと吸う。すると必ず飯田正剛が、「宮崎さん、タバコをやめてもらえますか」この掛け合いはつとに有名です。飯田さんはいまや日弁連でも中堅の人権派の弁護士です。宮崎省吾と中村紀⁶⁸⁾は仲井さんの関係ですね。そして仲井富本人と渡辺文学。立教大学の門奈直樹さんは古くからの友人です。酒井伸一郎君は、毎年10万円のカンパを住民図書館にしてくれました。東京都の職員です。

駒沢重光さんは中央大学の理学部を出た保健技師なんです。それが東京へ単身で出てきて、長野でちょっとした住民運動に関わったという経験をもってボランティアに来るようになり、やがて運営委員になるんです。渡辺美智子と中嶋康はさっきお話ししました。これで全員ですね。

——それで、平河町からまた移転することになるわけですが、どういう理由があったんでしょうか。

丸山 ここでは、最初ただだったんですが、家賃を払う必要が生じたわけです。他から比べれば安くとも、払わなくちゃいけない。そこで会員強化を考えるわけですが、それでも赤貧洗うがごとしで蓄積にならない。消費にだけつながって消耗していくというところで、先ほどの会議が開かれた。そしてお金の問題だけでなく、スペースの問題。住民図書館のミニコミが並んでいる部屋は同時に会議室でもあるわけ。で、いつも会議をやっている。いつの間にか住民図書館の入館者が座る場所なんてなくなっちゃっている。「これは駄目だな」となって、まず自立のためのおカネを1人10万円で募ることに決めました。そして目黒へ移転したんです。

10. 目黒・調布時代

目黒への移転

——その目黒時代ですが、1984年3月から86年9月までの3年半、所在地は目黒区三田2-7-10、セントラル目黒というマンションの1階ですね。ここはどんなふうに紹介が来たんでしょうか。

丸山 これは、仲井富が片岡勝に、住民図書館が移れるいい場所はないかと相談した。

五味 片岡は菅直人の選挙の前に、菅と片岡ともう1人、3人が中心になって市川房枝の選挙を担った。その3人のうちの2人が菅と片岡。片岡はそのあと、第三世界ショップとプレス・オールタナティブという会社を、あとでWWFという女性の起業基金だったかな。それを全部目黒でやる。今でもそこはありますよ。

丸山 彼はマンションを持って、2階に一居住区をぶち抜いて住んでいる。もとは三菱だか三井の銀行の労組の書記長をやって辞めてる。で第三世界ショップといって、アジアの貧しい国々の市民がつくったバッグその他を日本へ持ってくる、そういう貿易業務みたいなものをやっていた。何か会議があると、必ず片岡のところの青年が来てシートを広げてこういうものを売るんです。主催者に断りもせず。それをやりながら、銀行マンだから中小企業への融資事業みたいなものを始めた。

住民図書館が借りた1階の部屋の隣に第三世界ショップがあって、住民図書館が借りた部屋は建設時は倉庫として作られていたスペースです。それが2つに間仕切りしてありまして、住民図書館の方はトイレがない。トイレに行くには彼らの事務所を通して奥へ行かないといけなし、そのトイレがまた汚い。それとうるさい。目黒であれだけのスペースがあれば10万という家賃は安いかもしれません。でも倉庫として使うんらいけども、図書館として使うには非常に不適切で、そういう物件を仲井富が決めてきた。平河町のときもそうでしたが、目黒へ行ったのも仲井富さんの思惑で「決めてきたから」と。平河町のときは特定のスペースを持たなかった。そこから出て自立すべきだ、自前で金を払っても移った方がいいということになっていたところへ、仲井さんがその物件を持ってきた。こういういきさつです。

モントリオール大のミニコミ収集に協力

——この時期の大きな話題といえますと、カナダのモントリオール大学でのミニコミ収集に協力して日本からミニコミを送ったという事業がありましたね。

丸山 田中角栄が総理大臣のときにカナダを訪問して、そこで文化交流の道がついて、日本とカナダで図書館員を交換するという事業がありました。国会図書館からの初代派遣員は安積暁、2代目は安江明夫、美濃部都知事の特別秘書を務め、岩波書店に戻った安江良介の弟です。そして3代目は、現在文艺評論家の加藤典洋。モントリオール大学のミニコミの有料送付事業は、安江が赴任時に具体化し、加藤のときに実施されたようです。

モントリオール大学には東アジア研究所というのがあって、日本のミニコミが欲しいから協力してほしいと、まず加藤から手紙が来ました。これはまだ平河町のときです (79年10月)。日本の基本的なミニコミをカナダに収納しておきたい。モントリオールというのは、イギリス系のカナダ人が多い他の州と違ってフランスの移民の町で、マイノリティになるわけ。マイノリティというテーマで見たときに、日本のミニコミはそれに適合するというんで、ある程度の予算をつけて、手に入るものを手に入れてカナダに送る事業・運動を、加藤が任期満了までやっている。

安江・加藤の2代にわたって、日本で向こうから指名してきたミニコミを住民図書館で集めて、平河天満宮の2階の座敷に持ち上げて、段ボールに詰めて、小型車を頼んで税関まで持って行った。約40種類の自主出版物・ミニコミが段ボール何個分も行ってるんです。だけど国会図書館から行った司書が向こうでやってるんだから、国会図書館の仕事なんですよ、本来は。自分のところから派遣した司書が依頼してきているんだから、国会図書館に言えば組織がパッと動いて、パッと集めて、パッと送って何も問題はない。僕みたいなのが請求書をつけて送ってもらって、集めて、精算をして、なんていうのはそりゃあもう無茶なんだ。文学さんあたりが見かねて助けてくれたからやれたけども。そういう隠れた努力、誠意というものはなかなか記録には載らないものですけどね。それがかうじて3ヵ月経って船便で着いて、それがモントリオール大学の東アジア図書館の一角を占めることになったというのが、おおざっぱな経緯

です。

——ミニコミを送って、向こうからその後、やりとりってありましたでしょうか。

丸山 ない。その後どうなってるか。というのは、いま言ったように日本からは交換制で次々と代わるから、1年赴任してすぐまた代わる。継続的に一つの活動を踏襲していくというシステムになっていない。それから、5年計画が1年でポシャって、モントリオール大学の金は1万ドルしかなかった。僕らが最後に送ったのが81年ぐらいかな。あれだけ膨大な日本の住民図書館にもない資料が、創刊号から欠号がないのが全部行ってるわけ。途中で企画がポシャってしまったようなところへ行行った資料は、今どうなってんだろう。それが日本に戻れば、これは大きな資産になるんだけど。

そういえば、このとき集まってきたミニコミを置くところがないんで、タクシージャーナルの坂口にも預かってもらったんだ。ケースによっては坂口のところへ直接送ってもらったのも



毎日新聞81年2月3日

あると思うね。その方が合理的ですから。細かいことは僕も忘れちゃったけど。

運営体制の整備

——移転して1年後に、「60年代研究会」と「ミニコミ研究会」をやりますという案内が『ぷりずむ』に出ています。60年代研究会は、大串夏身・中村順・五味正彦・田中幾太郎・山本幸史の5人がメンバーだとしてあります⁶⁹⁾。

五味 あんまり記憶にない(笑)。

——これはじゃあ、動かなかったって考えてよろしいでしょうか。

丸山 何かアクションを起こしていないと後退するばかりだから、景気をつけなきゃということだったんでしょうね。

——目黒時代の館内平面図が『ぷりずむ』に載っています⁷⁰⁾。スペース的にはゆったりしてますね。

丸山 スペースはあったんです。だけど、使い勝手が悪くて、トイレがついてないのがもう致命的だったですね。

——1985年の11月に、生活クラブ世田谷センターで「ネジ釘一本引っこ抜け」というシンポジウムをやっていますね。

丸山 ええ。それは山本和彦君が、「ネジ釘一本」のキャッチフレーズを出して、それでやりたいと。よし、わかった、いいじゃないかと。これも活力づけです。そこには宮崎省吾も出ていなかったかな。

——ええ、出てらっしゃいます。

丸山 宮崎省吾という人は、住民図書館の局面局面に出て、総合的判断のもとに思い切った提案をしてくれる、非常に貴重な人材です。それから平川千宏さんの発言には、いつも含蓄があるいい提案をしてくれる。この2人がいなかったら、僕は支えられなかったという思いでいる人たちです。

——パネリストは松岡信夫さん、吉川勇一さん、竹内直一さん、奥井登美子さん、宮崎さん。記録は『月刊自治研』と『ぷりずむ』に載っていますが⁷¹⁾、60年代、70年代の運動の総括をしたいという目的が一つ掲げられていまして、これが松岡さんや吉川さんや竹内さんの話の中にはっきり出ていて面白かったです。住民図書館らしいシンポジウムだと思います。

丸山 ともかく、シンポジウム、研究会というのを、次から次へ、やりたくてやるんじゃなく

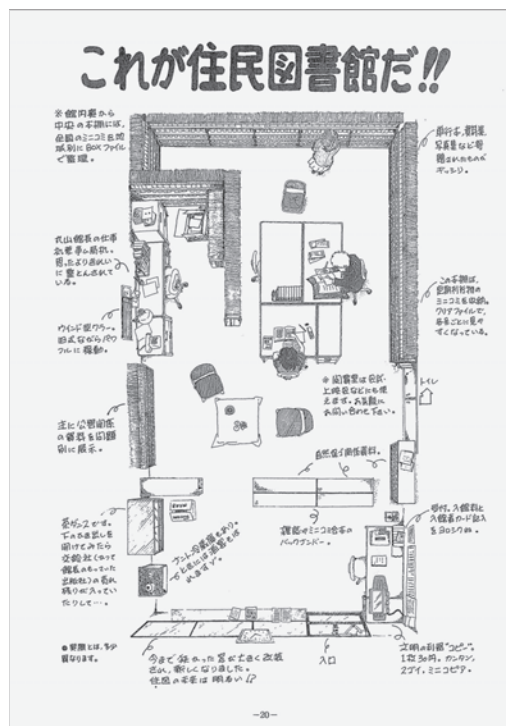
で発信していなければ認められなくなる、そういう焦りが常にとりついていた。だから、形はあるけれども中身が薄い。住民図書館があるんなら、それにふさわしい活動をしなきゃいけない。それには、ミニコミを作ったら送ってもらうと同時に、ミニコミをつくる側の内発性をいかに引き出すか。それでシンポジウムだ、研究会だっていうのを次から次に企画してきたという住民図書館の歴史につながる。

——このとき会場を生活クラブから借りていますが、この時期の生活クラブとはかなりいろいろな関わりがありますね。これは元は仲井さんのつながりでしょうか？

丸山 生活クラブは、やっぱり富さんだな。

——生活クラブの岩根邦雄さん⁷²⁾は社会党の江田派だったですね。1986年4月に「民衆学会」という構想を丸山さんがお出しになれるのも⁷³⁾、これは先ほどの活力づけということと関わるんでしょうか。

丸山 直接の動機は、学会という組織と並列的位置に立つことによって、社会的地位を確立すること。2つ目は、大衆が書く日常的なメディアを通して市民のジャーナリズムを確立するために学び合うこと。3つ目は財政です。ただ、



目黒時代の住民図書館(ぷりずむ第17号)

学会を作るには、学会の中に相当優れたオルガナイザーがいて、中心になってやってもらわなくちゃいけない。僕は、立教大学の門奈さんや、その他とは話し合いをしていたけれど、プロの学会にすでに属してる連中はそう簡単にこういう話には乗らなかったですね。要するに、かなりむずかしいと自分でも思った。でも、毎日新聞は大きくスペースを取って、僕の民衆学会論を宣伝してくれた⁷⁴⁾。

——目黒時代については、『ミニコミ総目録』の解説部分⁷⁵⁾で、丸山さんが「住民図書館に最も多くの人が訪れた時期だ」というふうにおっしゃってましたが、お客さんは多かったんでしょうか。

丸山 多かったですね。ボランティアの交通費も払ったと思います。やっぱり目黒は都心に近いし、山手線の駅から徒歩で行ける。それもこれも、財政基盤を持たずに放擲すればいいものを、頑張り続けて何か打ち出すから、やめるにやめられない。かろうじて運営委員会も発足しているし、ボランティアとして参加してくれる人もだんだん増えてきて。

——この頃、『ぷりずむ』の誌面を見ていきますと、スタッフの、ボランティアの方のお名前が何人か出ています。初めて出てくる人たちとして西岡敏郎さん、石川桂さん、木幡静子さん、佐藤照子さん、橘裕子さん、西村忠雄さん、大城圭太さん、藤井昭裕さんという方の名前があるんですが。

丸山 西岡君はボランティアで入ってきた早稲田の教育学部の学生。石川桂さんは、高田馬場の戸山団地に住んでいた。耳の聞こえない一人住まいで、東京都のいろんな生活上の補佐を受けていた人で、僕のミニコミ講座に出たのがきっかけで住民図書館を知ったと言って訪ねてきて、若い人たちと一緒に手伝いをしてくれた人です。木幡さんと佐藤照子さんは、2人でペアで新聞を見て住民図書館を知って、お手伝いすることはありませんかと。この木幡・佐藤コンビは、いつも2人で来てくれて、てきぱきと仕事を進めてくれました。橘裕子さんという人は、次の西村忠雄さんと同じであまり記憶がありません。大城君は風来坊の印象で、何で住民図書館に関心を持ってくれたかよくわかりません。藤井昭裕君は早稲田の学生で、その後毎日新聞の記者になりました。それから、有給スタッフ候補だった田中夏子さんというのは、慶応を出て銀行に3～4年勤めて、一念発起して、

また勉強がしたくなって、大学院へ入ったんです。その後どこかの大学の先生になりましたね。——都留文科大学ですね。

丸山 非常に努力をして大学院をお出になりましたね。

著作をまとめる

——この頃は、住民図書館の活動と並んでご著書を集約的に出された時期だと思います。『ミニコミ戦後史』『ミニコミ』の同時代史』はミニコミ論。これと併せてニューメディア論もたくさん書かれていた。『ニューメディアの幻想』も出されていますね⁷⁶⁾。

丸山 ちょうどミニコミ界全体に脂が乗ってきた頃ですね。それから方向はニューメディア一点に向かって進行して、ニューメディアでなきゃメディアでない式のメディア認識が多くて。ニューメディアが行きすぎて、旧来メディアのよさを失う、そういうことのないようにという気持ちを持って、このテーマに当たった記憶がありますね。だけど、ニューメディア批判はすでに時代遅れであったことは、その後判明しますね。僕が一人で孤軍奮闘で、ニューメディアは旧メディアといかに同居するか、その特性を補てんしあうかという問題提起は受け入れられる余地もなく、ニューメディア一辺倒で世の中がジャーッと進行して現在に至ってる。手づく



ミニコミ戦後史

り、手書きをどう回復するか。日本人は反（アンチ）を提起する者に冷たい。アカデミズムの世界でとくに顕著です。それは技術の問題でなくて考え方の、思想の問題としていま問われているということだと思います。

——3冊の本は1985年に出されています。1年に3冊はとても大変だったんじゃないですか。

丸山 ええ。3冊同時に発売するっていうのは大変な労力ですけど、この頃は若かったから、このぐらいのことは平気でやった。『ミニコミ戦後史』は公明新聞に連載したものをまとめた本です。『「ミニコミ」の同時代史』は社会新報の連載をまとめ直した。

——『ニューメディアの幻想』は書き下ろしですか。

丸山 それは書き下ろしです。

——それから10年ちょっと経って、『ローカル・ネットワークの時代：ミニコミと地域と市民運動』を日外アソシエーツから出されています（1997年）。あれは書き下ろしでしょうか。

丸山 あれは、女性の担当者がやってきて、「書き下ろしてほしい」というんで、何本かはどこかへ発表したものもあるかもしれませんが、基本的には書き下ろしです。だから、あれはちょっと中途半端な中身になってますが、担当編集者の企画案にもとづいているもんですから、僕の自由にはならなかった。

——ミニコミに関して言うと、いまの2冊以外に『ミニコミ総目録』もあります。

丸山 『総目録』は、前半部を書いた論文が僕の考え方を大体敷衍しているものです。あれはもっと簡単なものを版元の担当者の山本幸史は考えていたんですが、かなり本格的な論文になったので「これは申し訳ない」と言って、僕に10万円出してくれた。助かった。

——そうですね。丸山さんのミニコミに関する定義や分類が全部述べられた総合的な論文だったと思います。ところで沢山お出しになられた本の中で、丸山さんが一番愛着のある本というところになりますでしょうか。

丸山 『ミニコミ戦後史』ですね。これは僕のライフワークだと思ってます。

ミニコミ五名人と「一筆主義」

丸山 ミニコミセンター、住民図書館を通して、送られてきたミニコミはまず僕が封を切るようになっていた。中身を出す感触。何が入ってて、現金が入ってるのか、一筆が入ってるのか、そ

れがあるから。だから、沢西事務局長なんか、僕が忙しくてそれができないと、仕事は山のようにあるんだけど、手を出せない。僕が見てないから。そうやって、五味さんの温かいことばによれば、「日本中のミニコミの、何千という種類のミニコミを手にしてきたのは、この2人以外にたぶんいないであろう」といって、僕も入れてくれている。もう1人は五味さん自身。

五味 本当にそうだと思うんだね。その送られてきたものに最初に触れるというのは、資料としてではなくて。

丸山 うん。住民図書館や模索舎へ来たミニコミの封は誰が切ってもいいけど、一番先に見るのは俺だぞといっって、その優先権は五味さんも僕も誰にも譲らずにきた。日本のミニコミ状況はどうなっているかをつかむには、それが一番いいって思っって。人に見られちゃうと、感覚が狂っちゃう。だから、封を切るだけにしてくれ、中身を出さないでくれと。

僕は裏技で飯を食っていたもんだから、住民図書館にいたって一銭にもならないわけで外へしょっちゅう出る。そういうときには資料がたまっちゃって。みんないららしてるんだけど、それはわかってるけども、開けさせなかった。だから、湯瀬秀行君がデータベースをつくるときに（後出）、新聞記者のインタビューを受けて、「いや、私のはただ館長の頭の中にあるものをデータで入力しているだけで」と話していた。新聞記者は意味があんまりよくわからなかったらしいけど、湯瀬君のいわんとしてることは、僕にはああ、なるほど、そういう受け止め方してくれていたのかという気がしましたね。

それで、送ってきた郵便物については、そのうちにゆっくり連絡をするつもりで、郵便物に関しては一筆返事を書いて、一筆書きで処理していた。これを「一筆書きの習慣」と呼んでるんですが、僕が「ミニコミ5人衆」「ミニコミ5名人」と呼ぶ安岡英二・鈴木幸子の夫婦、向井孝、砂田明、岩田健三郎、それに松下竜一はみんな一筆主義なんですよ。この前埼玉大の谷中照枝さんからビニール袋一つ送ってもらったんです。住民図書館の資料を埼玉大に移管したんですが（後出）、いままで資料に挟まったり、隅っこへいつたりしていたものを捨てずにストックしておいていただいた。最後に私に送ってくださったら、砂田明さんの一筆書きが出てきた。そのうちに松下さんののが出てきた。同じ袋からですよ。向井孝のが出てきた。鈴木幸子さ

んと安岡カップルのがそろって出てきちゃった。それでもって、何かの因縁を感じています。いや、びっくりしました。

調布時代

——86年9月に住民図書館は調布に移転します(調布市下石原2-5-1 生涯学習開発財団内)。しかしわずか1年で再移転します。この経過についてうかがいたと思います。

丸山 お話ししました通り、目黒のときはトイレがなく、片岡さんが政治に興味を持っていたりいろいろやりだした頃から人の出入りも甚だしい。隣は図書館なんです、ミニコミをじっくり読み込んでなんてわけにはいかない。何とかしてくれと片岡に再三申し込んだけど埒が明かない。そのうちに片岡のほうが腹を立てて、敷金も礼金も全部返すから出てってくれと。

——向こうで腹を立てたんですか。

丸山 腹を立てるように、こっちも文句をつけたわけです。さあ今度はどこへ行くといっても行き先がない。そこへまた仲井富が例の触角で、岡本健次郎という、これは労働組合関係ではあるんですが、もともとは講談社にいた。その岡本ルートを富さんは頼ったんです。僕が「片岡さんから出てってくれといわれてる」といって巻き込むもんだから、富さんは窮余の一策で。

昔、大阪選出の松田竹千代という代議士がいた。その娘が松田妙子という。これがまたやり手で、生涯学習開発財団というのを持っていた。松田竹千代というのは建築族だったもんだから、建築関係の財団を他にも持ってる。こちらは大々的にやってたんですが、生涯学習財団は休眠財団であった。調布に土地を持っていて、その真ん中に、ちょっと洋館風の建物があつた。ここが空いてるから使えと岡本がいった。

ところが、財団理事長の松田の方は住民図書館について何にも理解していない。というより、理解しないように岡本がもっていった。どさくさに紛れさせて、実績をつくったらこっちのもんだから、「はい、はい、その通りにやります」という返事で統一してくれと。なかなか岡本健次郎は戦略家なんだ。われわれのいる目の前で理事長に面罵されても、えへらえへら笑って腹を立てるということをしない。彼はそうやって実績をつくってきたんだと思う。そういう事情を知らずにこっちが移ったってわけです。

だけど、中心地からは遠いし、辺ぴなところであるし、利用者が極端に減ってしまった。た

だでさえ年に400人を越したことのない住民図書館の利用者が、極端に減ってしまった。上京したついでに住民図書館に寄ってみたいと思っている人、地方の人たちはいっぱいいたわけです。実際に訪ねてくる人は、その何分の1かであるわけですが、新潟から来た、山形から来た、九州から来た。そういう人は、とてもじゃないが調布ではだめだ。それで、全運営委員に集まってもらって財団事務所へ理事長に面会に行った。それが終わって、外へ出て即座に浪江運営委員代表が「丸山さん、こりゃだめだ。やめよう」。ミニコミのことを何にもわかってない。ミニコミなんて、あんなものを置いといたって価値ないんだから捨ててしまえという。それじゃ、何のためにここを借りるのかわからない。そういうとんでもない話で、目黒を追い立てられ、調布では対応に窮した。

——少し遡りますが、ちょうど目黒から調布に移る頃に、丸山さんが「ここで潰すのもいいのでは」という文章を『環境破壊』に発表されていて、載ったのが86年の9月ですね。丸山さんは「もう駄目だ。ここで潰してもいいのでは」という趣旨のことを何年かに1度発言されていたと思うんですけど、大々的に言われたのは、これが初めてなんじゃないでしょうか。

丸山 活動休止は常に考えていて、状況は活動中止をせざるを得ない状況であった。しかし、館長を引き受けたんだからそれなりにやらざるを得ないという、前向きというか積極的というか、具体案を持って再建していく大事なものが、最初の8年ぐらいいは、ついに持てなかったんですね。

場所の移転の具体例を一つ一つ挙げていっても、とにかく誰と誰とくっつけば何とかなるかもしれないという仲井さんの考え方で動いていく。何とかなることもあるけど、ならないことの方が当然多いわけで、そうなるとやっぱりモラルの、意欲の面からいったら発揮のしようがない。だから、公害研の一角で誕生しバプテストにいたときは、渡辺文学さんという公害問題研究会の事務局長が気を利かせて住民図書館の来館者にも対応してくれて、四六時中そこに日曜以外はいてくれたからいいんですが、平河町へ移った頃は、須田さんと渡辺さんや仲井さんは別ですから。生みの親ではありませんから、対応が全然違ってくるわけです。

——この、もう駄目だとか潰してもいいんじゃないかというのは、事実としてそうだというの

と、その一方で関係者に発破をかけているという意味もあるんでしょうか。

丸山 もちろんそうです。

——あとで丸山さんが、住民図書館の終わり頃に、潰すんだったら80年頃に潰しておけばよかったということをお書きになられてるんですが⁷⁷⁾、これは平河町に移る頃ですか、要するにその後はもう後戻りできる地点を越えてしまって、全面的に自分が引き受けざるを得なくなった、こういう意味でしょうか。

丸山 そうですね。

——調布に移ったときに、当時スタッフだった木庭さんが、住民図書館は財団へ吸収されちゃうんだという危惧を表明していましたが、この時期は、最初の大きな危機の一つだったのではと思うんですが。

丸山 ついに尾花枯らして、無料だからといって失礼だけでも、調布くんだりまで落ちていった。しかも金を持たずに落ちていったとなれば、財団に取り込まれることになるのと異口同音だという木庭君の判断は、ある意味で真っ当だったかもしれない。そこをまた二枚腰か三枚腰かわからんが、また世田谷へ生き延びた(笑)というところに、僕の運の不思議さがあるんで。そこに飯島春子という特異な考え方をする人の登場になるわけ。

IV. 住民図書館の自立と苦闘

——住民図書館史・後期

11. 世田谷時代

運営の自立に賭ける

——世田谷移転に関しては、ここでキーパーソンとなる宮崎省吾さんにおいでいただいて話をうかがうことにしました。調布から世田谷の玉川(世田谷区玉川1-2-3)に移転していくプロセスでは、姫路獨協大に移すという案もあった。この世田谷案がどう出てきて、移転はどう決まったのか。このあたりの経過についてまず話をうかがえますでしょうか。

宮崎 私はそれほど住民図書館の運営自体にタッチしていたわけではないんですよ。住民図書館っていうのは公害研の一部分だというのが私の、あるいは仲井さんのスタンスだったわけですね。集まってくる資料を、どこかにちゃんと保存しときますよというふうな、そういうセクションが建前上ほしかつたっていうのかな。そ

ういうのがあって、それで、住民図書館っていう名前で館長を丸山さんに引き受けてもらうということですね。

財政的な負担は全然いらない、館長としての仕事に専念してくれっていうのは、中身としては、要するに丸山さんの名前を使って館長に据えとくと、あとは何もやってくれるなっていうのが実態なんだというふうに私は思ってるんですね。だから私は住民図書館の呼びかけ人か何かに最初から動員されて行ったわけですけども、それは私は「仲井一派」の人間として付き合っていたっていうのが実態なんで(笑)。そういう意味では、住民図書館そのものの運営に主体的に突っ込んで云々というふうな感じは、基本的になかったといっているんですよ。

ところが丸山さんすると、館長をとにかく引き受けたからには何かちゃんとやらなきゃならねえなっていう変なこと考えちゃったもんだから、すべてがおかしく(笑)なってくるんですね。ということなんです。それで、たぶん私だけじゃなくて、丸山さんはいろんな住民図書館の関係者、つまり木庭さんとかその他の人間に対して、とにかく愚痴をこぼすのが好きだったね。

たとえば、セントラル目黒のときなんかは、私も何回か行きましたけどあれは本当にひどいところだったんですよ。それで、片岡氏についての愚痴を散々こぼすわけですよ。

要するに丸山さんとすれば、住民図書館は住民図書館としてちゃんとしたものにしていきたいという意思があるなっていうのは、その頃からはっきりわかってきて。それで、そのために、それをどう実現したらいいかっていうとこまではっきり考えてたかどうかかわかんないけど。とにかく何とかしなきゃならねえんじゃないかっていう感じがしてきたことは、確かですね。

それで、私、世田谷時代だったかいつ頃だかちょっと覚えてないけれども、住民図書館の会員の中で、住民図書館っていうのは「丸山図書館」だという言い方を、よくするようになったんですけどね。だから、住民図書館をどうするかっていうよりは、その住民図書館の実態を丸山図書館にしていくことに、これまたキザに言えば一肌脱ごうかっていう、そんな感じになってきたことは確かなんです。

結局その丸山さんと仲井富さんとの関係の核になってるのは何かっていうと、それは、一つは財政問題なんですけども、場所の選定を完全

に仲井さんに握られていたということなんです。だから、仲井さんの立場からいうと、場所の問題とか金の問題とかっていうのは、図書館の運営とは関係ない。関係ないって言っちゃおかしいんだけど、それは丸山さんの仕事じゃなくていいんだと。だけど、住民図書館を運営していく場合に丸山さんが館長としてやっていかなきゃならないことの中には当然場所の問題もあれば、スペースの問題、大きさの問題もあれば、柵の問題もあり、人事の問題もあり、その他、全部館長っていうのが面倒を見なきゃなんないわけだから。ところが、そういう発想自体が仲井さんの方にはなくて。実際問題としては、たとえば場所一つにしても、じゃ、次はここにめつけたから、ここに移ろう、移れ、というふうな形にしかならないわけですよ。だから、松田なんとかさん、生涯学習開発財団の建物に移るっていうときも、とにかくもうなんというか、有無をいわせない感じなわけですよ。

で調布がだめだっていうことになると、じゃあ、今度は姫路獨協大学にと。これは西田英郎さんの話なんです。そのときにどういうわけか知らないけど、世田谷の飯島さんのところの話が出てきて、たぶん丸山さんは住民図書館のロケーションとか場所について、あるいは設置場所について、自分なりの選択肢を初めて持ったと思うんですね。たまたまそれ、獨協大学の話と時期が同じくして出てきたから、本当にある意味ではよかったんだと思うんだけど。

じゃあ、そこで調布以後の住民図書館をどこにするかっていうふうな問題になったときに、獨協大か飯島邸かというふうなことになってきたわけですよ。そこで、これはもうしょうがないと思って、私はだから、どういう見通しがあったかどうかっていうのは私も全然わかんなかったけども、とにかく獨協大の線を切って、飯島さんの方にとにかく決めきっちゃわなきゃどうにもならんじゃないかっていうふうな感じがして、仲井富氏と喧嘩して、獨協大の話を潰したっていうか。私がやったのはそれだけなんです。

あと、飯島さんの問題は、これはまたこれでいろいろあって。私は、中身はよく知らないんだけど、そう、うまい話ではなかったとは思っただよ (笑)。でも、仲井さんに全面的に依拠するんじゃなくて、とにかく独自の財政なり独自の人事なりというのを、ここで作ったわけですね。これはよくやったと思うけど、本当に。

場所、財政、人事の全分野が一応丸山館長のもとで統一的に運営されるようになった、初めてのケースだといっていると思うんですね。

——飯島さんの件は渡辺文学さんが持ってきたというお話ですけど、どういういきさつがあったんでしょうか。

丸山 これは「住民図書館が場所に困っていると聞いたけどどうなの」と飯島さんが文学さんに聞いたと。文学さんが「いや、困ってんじゃないですか」といったら、「私が住民図書館を建ててやろうかと思ってる」。こういうことで始まったんですね。新しく建物を建てるからそこをただで使っていいと。すばらしい話ですが、世の中そううまく話があるわけじゃない (後出)。

スタッフの充実と運営の安定

——世田谷時代は1987年9月から93年6月の6年近く続きます。この時期は運営委員がたくさんいて、編集委員会、企画委員会、資料委員会があって、委員長とスタッフがいるという感じになっていました。

丸山 一番人材的には恵まれていた。

——企画委員会は宮崎さんが委員長。資料委員会は国会図書館の方々が入っている。



世田谷住民図書館 (ぶりすむ第26号)

丸山 ええ、沢西義博さん、平川千宏さん、阿部治さんなんかも。

——スタッフでは湯瀬秀行さんや北野雅士さん
も入ってこられます。それと、野村和幸さん。

丸山 湯瀬君が、ちょうどこの頃コミュニティや地域について関心があって、卒業論文もそれに類するものを書いて、そのつながりで、住民図書館へ来るようになった。そこを捕えられて、目録を作るために引き抜かれた。彼は卒業後、日経の子会社に就職した。その後、それを辞めてミニコミ総目録の専従になって。ただ、目録の専従だけでは生活できるほど金が入らないので、週3回国会図書館へアルバイトに行っていた。これは平川さんに頼んで探してもらって。野村君は僕のジャナ専での教え子です。北新宿時代に専従をやってもらった。

——宮崎さんは最初、企画委員長としてミニコミ・トークインを担当されましたが（後出）、トークインが終了したあと、委員長を交代されますね。

宮崎 もう辞める、俺はもう嫌だよと。丸山さんからは、再三再四とは言わないが（笑）、その企画委員長を続けてくれって話があったんだけど、それはもう、すぐ却下させてもらって。——次の企画委員長になられた光田憲雄さんはどういう方だったんでしょうか。

丸山 これは東洋文庫の経理を担当していた。山口県出身で、山口県民であることを大変誇りとしていた。いま大道芸研究会の会長で、『大道芸通信』というミニコミを出してる。がまの油売りを得意とする変わった男で、押し出しはごついんですけど、中身は妙に弱くて、へなへなとしちゃって。役をやってもらうわけにはとてもいけない。そういう人物です。

——『ぷりずむ』の編集は、須磨勇夫さんがやって、そのあと三浦健さんに代わって、三浦さんはかなり長くやられますね。

丸山　そうです。須磨さんのときも実質的には三浦君が仕切って。須磨さんという人は、写植屋さんに勤めて、そちらが面白くなって、住民図書館へは一切来なくなった。

——じゃあ、編集はその三浦さんがかなり長いんですね。7～8年は担当していた。

丸山　そうです。三浦君は大田区役所の職員で、東洋大学の夜間部を出た。須磨君はその同級生です。三浦君は卒業論文を、池子の弾薬庫の問題で書いた。そのときに住民図書館へ資料を漁りに来てからのつながりですから、ずいぶん長

420

——飯島春子さんも委員会には入っていませんが、一般委員の形で運営委員会に入ってます。

丸山 それ、入れておかないと、また面倒だから入れておいたと。本人はオーナーぐらいのつもりでいたから。

ミニヨミ・トークイン

——イベントについていえば、この玉川時代に、「ミニコミ・トークイン」を2回やっています。それからミニコミ発行者会議をけっこう頻繁に、4回ほどやっていました。第1回のトークイン（国立オリンピック記念青少年総合センター、1988年10月8-9日）は宮崎さんが提案されたということですね。

宮崎 トークインは、私もこれはかなり熱入れてやったんですね。要するに、仲井さんなしでも丸山図書館として独立し、ちゃんとやっていけるんだっていうことを、とにかく内外に示さなきゃなと思った。それは特に丸山さんが一生懸命やってくれたんでうまくいった。で、もうこれで俺の役割は終わりだということで、委員長をやめたと、こういうことです。

丸山 このときは目録の作成などもスケジュー

[illegible]

全国三二コミ会議（仮称）の案内（ぷりずむ第27号）

ルに上がってきていたし、会員の数もそれなりにあった時代で、住民図書館としてはいわば充実期にあって、ただ、外部に対する発信力が低いのではないかと。会員が一定の枠内にとどまるのもそういうことだから、もう少し対外的な活動を重視したらどうかという意見が出て、それはたぶん、宮崎さんが提案した意見だろうと思います。したがって、このトークイン、最初はトークインとはいわなかったんです。ミニコミ・シンポジウムとかいってたんですが、トークインがいいと。それも宮崎さん。第1回のトークインに関しては宮崎さんの意向が基本的に生かされて、松下さんと呼んで、分科会をいくつものに分けてやった。

——企画の内容はどのようにして決めたんでしょうか。

宮崎 私ね、ほとんど覚えがないですね。あのとき松下竜一を呼んだんだけど、企画の原案なり構成なり、それから松下竜一を呼んだらというふうな話も、たぶん丸山さんから出たんじゃないかという気がするけどなあ。ただ、玉川から松下竜一のところに電話して講師の話決めたんだよね。それ、丸山さんもそのとき一緒にいたと思うんだけど。あれ、もしかしたら電話したのは私かも知れないなっていう気はするけど。

丸山 松下竜一を呼べば、ある程度の観客動員は見込めた。彼はそういう存在。現に住民図書館のスタッフになる渡辺美智子さんなどは、『草の根通信』の東京在住の読者として来てました。ほかにも何人もいたと思うんです。

宮崎 だから企画は、やっぱ丸山さん本人のアイデアじゃなかったかなって気がするけどね。

丸山 宮崎さんには年に1回ぐらい大きなイベントを打っていかないと、集客力が発揮できないという持論があったんです。ただ、それまでの状況は、とてもそんな全国的な大きなイベントを組んで、宣伝をしてというものではなかった。松下さんのときは講演だけだと300人ぐらいは来てましたから、このシンポジウムと講演を皮切りにしっかりイベントも組める体制ができた。

宮崎 それ1泊でやったんだよね。

丸山 日本青年奉仕協会で泊まった。代々木のオリンピック記念センター。そこの宿泊所が使えますから、交流会まで松下さんはずっと出た。——そのときの参加者は230人だったと『ぶりずむ』には載っていました⁷⁸⁾。住民図書館がや

ったイベントの中でも最大動員の一つですね。

宮崎 そう。だからあれは230人ってのはたぶんちゃんとアテンドした人間で、通過した人数は300人。あれJYVAっていったか (Japan Youth Volunteers Association)。

丸山 あそこは斉藤という人がいて、彼に頼んで手配してもらった。

宮崎 手際はよかったですよ。私、事前にちゃんと準備してるように見えないからね、こんなんじゃちゃんとできんのかなと思ってハラハラしてて、いろいろ突っついて聞くんだけど、「いや、そりゃ大丈夫ですよ。慣れてますから」って言ってね。会場の案内とか、看板だとか、ほんと手際よかった。

丸山 あれが一つのきっかけになって、スタイルが定着していった。毎年は無理なので、編集者会議を挟む形をとって。だから、シンポジウム関係で出演をお願いした人たちを合わせると、相当な人数になる。最後は山岡さんが、そちらの責任者。でもやっぱり人を集めるということ、は、難しいな。

——ミニコミ発行者会議は、それに比べて非常にアットホームな集まりだったですね。

丸山 そうですね。

——その頃、住民図書館をどうするかということで、たとえば「がんばれ住民図書館、もりもりパーティー」(1989年11月25日、日本教育会館)とか、「住民図書館の今後を考えるネットワーク」(1991年9月6日、品川区総合区民会館きゅりあん)とか、それから「市民活動情報マネジメント研究会」というのをやって、住民図書館の運営をどうしていくかみたいな話し合いがいろいろ行われていたと思うんですが、これはどういう人たちが企画したり運営したりしてたんですか。

丸山 さあ。そこまでは記憶にあんまりないけれど。ともかく、何らかの形でこちら側からアプローチ、発信していくという姿勢を見せないと、人はこちらを向いてくれない。なんか目立つことをやるのが、住民図書館にとっては大事。やらないということは、ないに等しくなる。

宮崎 逆に言うよね。要するにうまくいってないから、なんかこういう企画をやってくということなんでしょう。だからこの世田谷時代っていうのを考えてみるとね、要するにさっき申し上げたように丸山さんがほぼ全権を掌握して、飯島さんとの関係が、最初のうちはハネムーン時代ですから、最初の1年ぐらいは、なんと

かうまくいったような感じがするんだけど。しかし飯島さんとのハネムーン時代が終わって、喧嘩状態になって、追い出されるようになってくると、やっぱりその全権掌握したはいいいけど、それに伴ういろんな問題を、全部丸山さんが処理しなきゃなんなくなってきた。その間には、そういう、だからいろんな、要するに外に発信すれば、いろんなことが苦し紛れっていうか、そういうことをやってて。

結局そういう状態になれば、たとえば仲井さんなんか言わせりゃ、「ざまあみやがれ」ってやつだろ。俺が手引いて場所やなんかを面倒見なかったらどうなるのか。そんな感じに思ったんじゃないのと思うけどね。

——その次の年、90年に北海道十勝で2回目のトークインが行われます（北海道池田町「まきばの家」「社会福祉センター」、1990年8月25-26日）。このときは、地元の十勝の人たちのミニコミのネットワークに準備を依頼したという感じでしょう。

丸山 山根裕。彼は北海道電力の労働組合の書記かなんかで、地域でミニコミ活動をやっていて、労働組合に顔の利く人だったんです。東京へ来るときは、いろんなミニコミを集めてきては住民図書館に入れてくれていたんで、僕も何回か会っていた。何もトークインは東京でだけやらなくたっていいので、ただ、その地方にそれだけの組織力がないと、受け皿になってくれるしっかりした組織力を持ったグループがないとそこへ行けない。そのへんはどうかと山根さんに聞いたら、なんとかなるだろうと。じゃあ、夏、みんなレジャーに行くんだから、その金で北海道まで行って、ミニコミ・トークインに出てくりゃあ一挙両得じゃないかというんで行ったんですけど、どうも十勝は遠すぎましたね。——このときは、議論としてはミニコミ発行者の間の交流みたいなことが中心でした。

丸山 そうです。ただ、それは従来の枠組みだから、そこにミニコミの読者というものを強調し、入れたらどうかと、トークインの性格づけが途中でそのように変わります。

——3回目のトークインはけっこう間があいて、3年後の93年まで3年ほど飛びます。これはやっぱり、飯島邸時代の終わり3年が非常に活動が沈滞してたっていうふうに考えていいでしょう。

丸山 はい、そう思いますね。

ミニコミ総目録

——世田谷時代の大きな仕事として、『ミニコミ総目録』の作成があります。

丸山 総目録はトヨタ財団の助力でできたということです。僕がトヨタ財団の市民活動支援委員会の委員を委嘱されてやっていた。その関係でプログラムオフィサーの山岡義典さんや渡辺元さんと知り合って。住民図書館も助成したらどうかという話が出た。大丈夫かという、それは申請してみないとわからないというので申請した。途中でトヨタの人間が入って、いろいろアドバイスしてくれるようになって、これは脈がある、助成する気だなということがわかって本格化した。むしろトヨタ財団も成果の上がるいい組織に助成をしたいという願望を持っていた。

最初はミニコミの現況はどうかという調査活動に250万か320万ぐらいかかった。今度は調査の結果をコンピュータに入力しなきゃならない。普通は年ごとに申請し直しても連続助成はないんだけど、住民図書館は最初から2年連続で、それをやるには人手が必要だっていうんで、しかもコンピュータを自由に操ることのできる人。そこで湯瀬君がたくさんの参考書を読んで、毎日打ち込んでいったわけです。住民図書館からは、助成金から10万払って、あとの足らざるところをアルバイトで埋めた。そして、無事完成させたあと、彼は助成財団に入っているもそこに勤めている。

——そうすると、最初、調査で1年。それから目録作成が2年目というわけですね。

丸山 3年目で出版。それまでもいろいろなチェック項目があって大変だった。だからあれは、半分は湯瀬君という異能な人間が作った。あとの半分は住民図書館が作ったといってもいいぐらい湯瀬君の功績は大きい。彼は日経の子会社へ入社していて。先方の部長さんに湯瀬君をこっちへくれないかと、僕が頼みに行ったときに、いや、あれは幹部候補生だから手放せないと。最後はそれなりに遇してくれるんなら、と了承してもらったが、遇すも遇さないも、こっちはゼニがない（笑）。トヨタからの助成金がもらえたのは僥倖なんだけど、あれも結局、助成金を人件費に使うということは、普通は許可しないんですね。それを、湯瀬君の給与の半額を助成金から出したり。いってみれば、こちらの窮状をうまく救済してもらう形でデータベースもやれた。いろんな人の、いろんな力をい

ふりすむ40号掲載の飯島春子氏の手紙

と、最初はそれはずだった。そのうち、丸山さんもただじゃ気分悪いから、3万にしろくから、月々出しなさいと。その次には、この辺はだいぶ家賃が高くなったようだから、あと2万足して5万円出しなさい。家賃は必ず現金で持ってきてください。振込みは駄目だと。僕は地方で講演頼まれて、その日払いに行けないと、うちへ電話がかかってくる。家賃を払え。遅れるんなら遅れると言いなさい。

また、「館長さんへ」という張り紙がしてある。これは安夫さんだ。「来る青年たち（スタッフ）は1日1人にしてくれ」と。うるさくていけない。2階の湯瀬君が使った部屋の床がたわんできてから、荷物は一切置かないでくれ。じゃあどこへ置くのって。いや、注文が多いし、参った。

——『ぶりずむ』には、飯島さんのお手紙が載っていて、丸山さんがとりあえず10年という約束になっていると書いたのに対し、「私は10年等お約束した事はありません。お引きうけするからには、永久に・たとえ丸山さんが居なくなっても、私が死んでもこの図書館は玉川の地に永久に保存をしたいと考えています」とありました。その一方で、「丸山さんも私の片うでとなってこの運動、ピースパラダイス運動を推進して下さるなら、私に協力して下さる人のすべてに私は幸福をもたらしたいと思います」と、宗教的なこともいわれています⁷⁹⁾。結局出ることになった経過というのは、向こうから言い出してきたんでしょうか。やっぱり丸山さんの方で、もうこれは駄目だっていうふうにお考えになったんでしょうか。

丸山 まず、向こうの意思表示ですね。例の茶室と称する、仏像が飾ってある畳敷きの部屋は、飯島さんのお客さんを接待する場所としてつくったんですが、実質的には書棚しかない部屋に、閲覧スペースがないんだから、その和室で読みたいミニコミを持ち込んで読むしかない。そういう使われ方をさせてもらってたわけ。黙認されてたわけです。それが、あるときに木材で封印をされた。口で「使うな」とは私には言わずに封印をされた。飯島さんの意志がかなりそういう方向へ変わってきていることは推測せざるを得ない。人間ってのは嫌になりゃあ嫌になりますからね。呼んで失敗したと思えば、なるべく早く消えてもらいたい。これはもう、長居するところではないというふうにこちらもなっていくわけですね。家賃も決して高いわけではな

いが、若い連中が嫌な思いをそれぞれしていることがわかっていて、なお居座るわけにはいかない。また次の移転を考えざるを得なかった。

12. 北新宿時代

謎の人物の登場と新宿移転

——それで今度は都心、北新宿へ移るわけですが、ここに新たな謎の人物が現われてくるわけですね。

丸山 はい。「中津泰道」という男が現われてくるわけです。中津にはしかし、すっかり騙されましたね。中津は自分に任せれば、住民図書館も利益を出せるようにすると、こういうんだ。住民図書館は収益企業じゃないんだから、そんなうまくいくはずがない。ところが、中津がいうだけでなく安孫子誠人という『マスコミ市民』を育ててきた篤実な先輩が、それに口を合わせてそういう。中津は経営のプロなんだから任せなさい。あなた、こんな苦勞してやる必要ないんだ。あちこち毎日講演に行って遊んできなさい。住民図書館はますます発展するように運営するから心配いらないと。そうして中津が入り込んできた。運営委員会に参加するようになり、中津の事務所で運営委員会を開いている内にだまされたと思って一度任せてみるかと思うようになり、実権が中津に移った。もちろん私は遊ばなかったし、運営委員会も変わらなかったが、運営委員会を経営委員会に変えられた。事務局スタッフだった青年からは、その日入金した郵便振替まですべて中津のところへ持って行くようになった。それで全部金を抜かれたことがわかった。こうしてお金は中津に集められたが、家賃も払っていない、『ぶりずむ』の印刷代も払っていない、ということがわかる。宮崎さんから200万円、新貨物線の共同購入会が一応目標達成したというんで、辞めるときに積み立ててあったお金を住民図書館に寄付してくれた。それまできれいさっぱり中津に抜かれちゃった。一応、欠損金は私が個人としてあとで埋めた。志を持って社会的活動をしているわれわれを卑劣な行為でおとしめるなど、人間の行為ではない。

——世田谷からテナント料の高い新宿へ出るというのは、これは中津氏が現われて、経営はうまくいくからテナント料の高いところでも大丈夫、という含みもあるんでしょうか。家賃が高いながらも、この北新宿時代（新宿区北新宿4-

31-2 ST北新宿ビル401)は1993年6月から2000年12月までと7年半、住民図書館史上最も長い立地点ということになります。

丸山 北新宿でいわゆる近代的ビルに高い家賃を払って入ったのは、それは中津がすでに関与していて、中津が移ったらどうかという推挙をして僕が了承したというのが実態です。

中津という男は、日本の戦争責任資料センターのメンバーだと語り、八王子かどこかでコンビニエンスストアの経営をしていると言っていた。自分はオーナーだけど、マニュアルさえ作ればコンビニ経営なんてのは自然に動いていくんだと。こういう経営哲学を彼は持っているんだと。それで我孫子が、丸山さんたちがやるやり方では収益なんか上げられないと、中津にやらせれば大もうけできる、楽をしてもうかる。カネが入る。それには一切任せなきゃ駄目だという論法で来たわけです。苦勞して運営している者ほど、その話に惹かれます。そして我々は運営委員会にも彼を5回も6回も呼んで。向こうへこちらの運営委員が行って、運営委員会をやったこともあるんです。

——向こうっていうのは『マスコミ市民』の事務所？

丸山 マスコミ市民。ましてこっちには五味さんのような猛者がいるので、怪しい背景があればすぐに匂いでわかるだろうと僕は思ってたんだけど。さすがの五味も見抜けなかった。中津はあるセクトの人間だということがあとでわかるんですが。また、出版活動をしていた女性グループもやられた、どこもやられたと、被害者が他にも現れた。だがどこも恥だからしゃべらない。

——この北新宿時代というのは、中津体制に始まり、その後片づけに追われている感じですね。スタッフについても、それまではずっと『ぶりずむ』で運営委員が交代するごとに報告されてたんですが、北新宿に移った直後に経営委員会というものがいきなり登場します。

丸山 これは中津が運営委員会を経営委員会にしろといった。

——しかし誰が委員なのかメンバーもわからないし、そのあと中津氏が行方不明になったあともう1回運営委員会を立て直すまでは、運営体制についての情報は何にも載ってないんですね。

丸山 はい。それは中津という人間がインチャキ性、欺瞞性を持った存在であったということの表れだと受け取っていただいていい。

——それ以前に浪江さんから平川さんに運営委員会の代表が交代しますが、この平川さんの立場も棚上げになっちゃうような感じですか。

丸山 そうです。中津が一切を任せろというから。その代わりパラダイスをつくってやると。地獄の底をパラダイスといった。

——『ぶりずむ』の編集はさすがに中津氏はやらなかったでしょうから、これはずっと三浦さんがやってらっしゃったんですか。

丸山 はい。

——その「パラダイス」によると、経営委員会がすべての責任を負う形になっています。一応他にも専門委員会というのは設定はされていますが、実質経営委員会に全部権限を集中してしまうということですね。経営委員会は中津氏が代表すると⁸⁰⁾。

丸山 それが中津の発想なんです。うるさいものは全部切り捨ててしまえと。しかし、僕は運営委員会を経営委員会に名称変更するということまでは妥協したけれども、この委員会の解体、少数独裁に入ることは頑として拒否をしたわけです。しかし、中津が入ってくるようになると、それまで維持してきた運営委員会の機能は弱まってしまったわけです。すべて中津がやる。中津を通してやるということになった。

——一時会員をどんどん増やすということで、大量の会員が加入した時期があったと思いますが、見てみると中津姓の一族郎党(?)が一度に7～8人入ったことがありました。実在の人物かどうかわかりませんが。

丸山 それはダミーです。名前は増えたが入ったかどうかは不明です。

——実際に彼がお金を引っ張ってきたりっていうことはなかったわけですか。

丸山 ない。全然ない。持って逃げただけだ。いったいどこに隠れてしまったのか、それから中津を見た者はいません。

中津泰道の失踪と事後処理

丸山 で、そのうち中津は全く姿を見せなくなった。支払う家賃も中津がかすめていった。それから、『ぶりずむ』の印刷代を3号分未払い。僕はそのときにはもう経理にはタッチしていなかった。あとになって、浜松の東海電子印刷というところの印刷代金も払っていないことがわかった。だけど東海電子印刷は、僕ではなく中津から代金を取ろうとしている。ところが中津が払うわけもないし、結局最後は僕が払った。同

じょうなことは当時いくつもの運動団体で起こっていたようだけど、僕の知っているところ以外にも必ずあると思います。

しかし、中津もさることながら、僕は主犯として安孫子誠人をむしろ責めたいくらいなんです。僕は中津という男は知らなかった。そんなに有能なら早く名前を知ってるはずなんだけど、安孫子から紹介されるまでは知らなかった。安孫子が中津はプロだからとまあ任せろ、任せた以上は口を挟むなど。しかもそれを中津自身が言うのではなくて。僕の親しかった安孫子という人間がそう言うんだから。

中津を事務所へ訪ねて詰問に行ったときに、中津はいなくて安孫子がいて、僕は大声で怒鳴りつけたんです。「あなた、僕との信頼関係をこういう形でぶっ壊すというのは、何か恨みでもあるのか」そうしたら、「声を落としてくれ。女の子を昨日採用したばかりだから、これじゃあすぐ退職されちゃう」「退職しようとなんだらうと、なぜ、僕をこういうペテンにかけたか理由を言え」と。そのときに、北新宿のビルの所有者の代理人の人も一緒に行った。被害者だから。二人で行って、ガンガンと言うべきことを言って、持ち逃げされたカネの返済は安孫子が代わりにするという文書を取り付けたが、「ないものは払えない」と一銭も返さない。

吉川勇一が『マスコミ市民』がセクトに乗っ取られたそうだといった。そのとき僕の頭の中は電気が走った。それから、全部僕は了解できなかった。そして、その翌日すぐに、こういうときには誰に相談すればいいかと考えて、宮崎省吾を呼び出して、「セクトにやられた」といった。そしたら省吾は立派だった。「いや、そういう党派の件はどうでもいい。いいことをしたのか悪いことしたのか、何々だからというレッテルで差別することはない」と。中津が何派であろうと、それは関与の外であって、中津が何をやったか。犯罪的な行為をルール違反をどうやったかが問題だから、その追及は必要だと。それで僕もセクトの手法に負けたという単純な考え方はすまい、と考えるようになったのは宮崎さんのアドバイスだった。

——五味さんは中津問題の頃っていかがだったですか。

五味 中津は、住民図書館とは別ルートでも、僕のところ——「ほんコミ」——にやっぱり怪しい話を持ってきてた。で、住民図書館に顔出したらば彼がいたんで、これはやばいと思って

足が遠のいたの。それ以上のことは覚えていない。あと相当いろんなところで悪口を聞き出したんでね。そうだったんだなあと思いましたね。

20周年記念募金と運営体制の再建

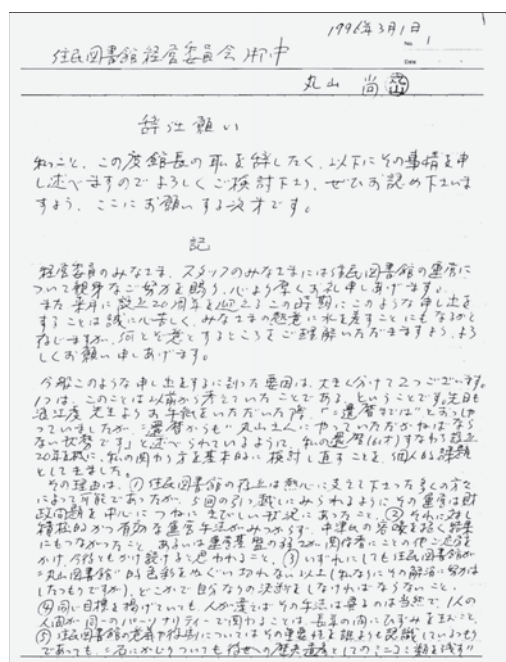
——そして中津問題がクローズアップされたあと、丸山さんは辞任願を出しておられます。辞任の理由は直接にはやっぱり中津問題ということでしょうか。

丸山 中津問題で責任を取る。また、取らなきゃ誰が責任を取るのかという問題が残る。ただでは済まない。当然、私が辞任を申し出るべき事柄であるというふうに考えたんですね。

——しかしそれは、『ぶりずむ』の説明によると一蹴された（笑）。『ぶりずむ』の見出しによると、「丸山館長辞意表明、却下」と書いています⁸¹⁾。

丸山 問題にされなかった。議題にされないで却下されてしまったので、責任を問う声には接することができなかった。しかし、僕も恥じて、とてもではないがやっていたいけるはずがないと思って、これで肩の荷が下りるという思いはしたんですね。

——改めて運営体制を立て直す必要が出てきたと思うんですが、ここで経営委員会の委員になるのは、丸山さん、宮崎さん、平川さん、沢西



丸山館長の「辞任願」

さん、山岡さん、三浦さんと、小さい委員会になりますね⁸²⁾。中津泰道は退任したとあります。その後、経営委員会は名前を元に戻して運営委員会となり(1996年4月)、そのときに20周年記念募金が提起されます。これは経済的な穴が大きかったということでしょうか。

丸山 うーん。それと住民図書館を20年からあとやるのかやらないのか。お金を集めるということはやるということの意思表示になる。20周年を期に旗を巻くということであれば、大口の資金募集をしても意味がないけど、やるということは20年を無事越すことを願いながら活動していくということの意思表示になるのではないかという思いが運営委員会にはあったんですね。——このときは発起人が清水英夫さん、栗原彬さん、浪江慶さん、丸山さんと吉川勇一さんとなっています。

丸山 ここでは思いきり、従来の住民図書館の内輪だけではなくて、外にあって、住民図書館の活動を支持する人、たとえば、栗原彬などは、そういううちに入ると思います。これは住民図書館と大変関係の深かった、どこかでかなりのつながりを持った人たちの名簿というふうに考えていいと思います。20周年募金は平川さんが尽力されました。

——20周年記念募金は1年ほどの活動期間で614万円集まりました。

丸山 1年はそれで食える額が集まった。これは思い切った提案で、20周年以降もやるという意思の結集が、ここで図られたということですよ。

——目標額3000万というのはかなり大きかったですが、614万っていうのは、見込みとしては丸山さんの的には多かったですか、少なかったですか。

丸山 多かったです。結局、それまでの住民図書館の営為、営みがこの程度に評価はされたんだという実感を生んだ。

——それで活動は安定したと考えていいでしょうか。

丸山 はい。最後に沢西さんが事務局長で来てくれてからは事務局体制が整いまして、ボランティアも比較的良好な人たちが3人ほど来てくれて、沢西さんとのコンビでいろいろ業務をおこなってくれて大変楽だったんです。

——沢西さんの事務局長就任が96年の8月ですね。

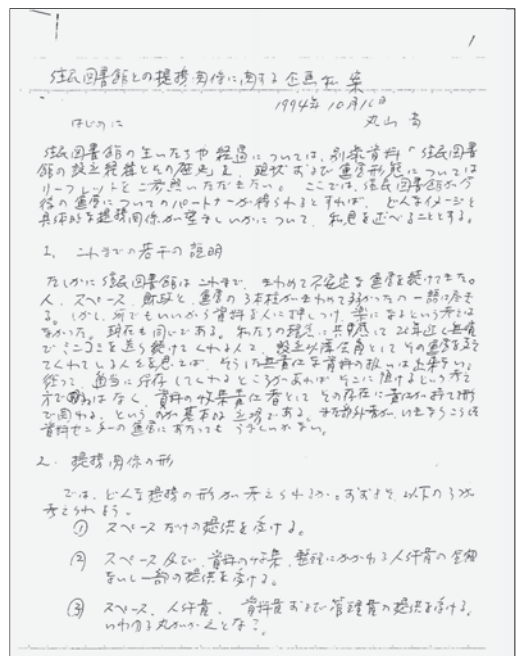
丸山 沢西さんの存在は大きかった。ああいう

ところは専任で主体的に面倒を見る気のある人がやればうまくいくということの一つの表れ。それまで専任者というのはついに確保できなかった。とくに市民運動全国センターにいた頃の副館長問題、みっともない辞令を発したりしたことを考え、それから、中津問題で味噌をつけた。これも考えると、顔が赤らむ思いですね。——いまおっしゃったボランティアの3人というのは、山崎求博さん、大曾根雅子さん、矢澤直子さん。

丸山 そうです。矢澤と大曾根は最後は運営委員になってます。山崎求博は、これはミニコミ・トークインに参加者としてやってきて公務員をやってるけれど、辞めた方がいいかどうかと尋ねた。それをきっかけに住民図書館を訪ねてくるようになった、一風変わった男です。まあいろんな人のいろんな形の助力によって、25年間やりおおせたということですね。

大学との非公式折衝

丸山 20周年記念募金の頃から住民図書館はいいいつまでやるつもりか、疲弊しないうちに先行きを考えたほうがいいという考え方がぐっと出てきた。それには、僕は昔から大学がそれにふさわしい、本来大学がこういうことをやるべきことなんだ。まず大学機関がこういう資



丸山氏による大学との提携私案

料収集及び研究という業務をしなければこの資料は生きないんで、そのためには大学という機関が努力をして受け入れるべきだと考えた。

それで当時立教大学にいた栗原さんや門奈さん、それに高島通敏らに意向を伝えた。また和光大学のロバート・リケットさんを通じて可能性がないかどうかの打診をしてもらった。これは運営委員会とは何の関係もなしに、僕の個人的立場からそういう行動をした。

——94年の10月に丸山さんが、「住民図書館との提携関係に関する企画試案」、つまり大学に移す可能性を検討するメモを作られています、この段階では和光だけじゃなくて立教にも打診してたということになりますか。

丸山 打診はね。その意味では、打診程度は早稲田の鹿野政直さんあたりにもそれとなく可能性について打診をしてみた。和光・立教・早稲田にそういうことを。ところが、まだまだ煮詰めるにはいろいろ問題がありすぎた。

——和光では三橋修さんが乗り気で、一応企画室という学長直属の官房みたいなところでは合意に達したらしいんですけど、図書館の方が管轄が違うということでペンディングになったまま執行部が交代して流れちゃったようです。丸山さんのお手元にもそのときの資料がありますね。和光では一応内部で検討したということだと思んですけど、ほかの立教や早稲田に比べると内部検討が一番進んだ感じでしょうか。

丸山 一番進んだケースでしょうね。僕が要望したのは和光の世田谷区の校地。

——小学校のあるところですね。

丸山 世田谷区松原かどこか、そこの建物がいいという意向をこちら側は示したわけです。そうしたら、計画のその校地は何かの施設の対象になっているので、それは駄目だということでした。

——大学に持ち込まれても、大学では勝手にその小学校の校地の利用について決められないということで、少し時間が余分に過ぎちゃったみたいですね。これはあくまで都内でという丸山さんの基本路線に関わるんでしょうか。鶴川まで持っていくと、川崎市になってしまう。

丸山 結局、場所によって利用者の数はかなり影響されていると見るのが、私の当時からの見方なんです。調布などに持っていったら、行ってみたいという人の半分は実行できないだろう。やはり足の便の良さは人を呼ぶ場合の大きな条件になる。

館の活動

——運営体制立て直し以後のイベントについてうかがいます。ミニコミ・トークインは第4回からミニコミ発行者会議と兼ねてやるようになっていくんですけど、ちょうど第4回は95年の秋ということで、阪神大震災がテーマになっていました（神楽坂エミール、1995年11月）。

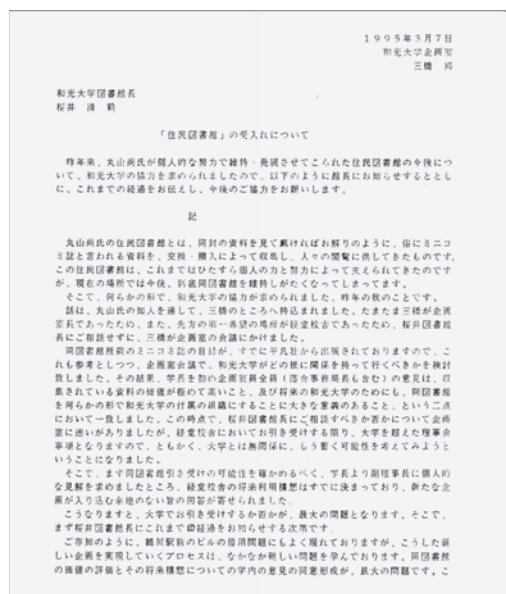
丸山 これは成功しました。

——阪神大震災のミニコミリストを作ったりとか、活動的にも盛り上がってましたね。

丸山 何かああいうことがあれば、阪神大震災について書いた記事があればそれだけコピーをとって、別枠で閲覧できるようにしたり、NHKラジオが北陸方面に地震があったと放送したことを隠して、それが対応の遅れにつながったということから書き始めたドキュメンタリーを僕が書いて『ぶりずむ』に載せたりもした⁸³⁾。このトークインのときも、僕の基調報告がそれに基づいて行われた。

——このときのパネリストはピースボートの梅田隆司さんと、大阪ボランティア協会の早瀬昇さん、社会学者の森反章夫さんと、参加者は39名です。翌96年には、20周年記念パーティと兼ねて第5回のトークインを同じ会場でやりましたね（1996年11月）。品川のきゅりあんでした。

丸山 このときは宮崎省吾さんの講演と、それからミニコミ発行者の田上正子さん、落合宏さ



「住民図書館」の受け入れについて

ん、竹島茂さん、庄村有治さんがパネリストでした。司会は私がやっています。メンバーはいいんですけどね、参加人数は30名から40名の間でしょう。竹島さんなんかは、『筑波の友』といういいミニコミをお出しになっていた。庄村君も『お好み書き』は非常に面白い。記念パーティにはかなりたくさんの方に来ていただきました。このとき僕と文春の金子勝昭さんが司会をやりました。——第6回のトークインはオリンピック記念青少年センターで参加者30名(1997年11月)。このときは山岡義典さんの講演なんですけども、山岡さんは、いつ頃からどんなきっかけで住民図書館に関わるようになったんでしょうか。

丸山 きっかけは湯瀬君でしょう。トヨタ財団です。山岡さんはトヨタ財団のプログラムオフィサーを長年やられて、辞めて法政大学の教授になりました。湯瀬君は、ミニコミ総目録を終えて助成財団に就職を得たときに、山岡さんもフリーになられたんですね。そして、トヨタ財団に籍を置いていると住民図書館の運営委員というのはちょっと難くなるだろうと僕は判断したんですけど、トヨタを辞めれば、大いにこっちを手伝ってもらえる。それだけの経験を持った人だからというんで、湯瀬君から「山岡さんを入れたらどうか」という提案がたぶんあって、「じゃあ、君のほうから頼んでみてくれ」と。そしたら、二つ返事で、「わかりました」と。そして、最後まで運営委員を務めていた。

——この第6回目のゲストといいますと、山家利子さんが初登場。群馬の関充明さん、ペンネームは「乱鬼龍」さんですね。翌年の第7回は、また同じオリンピック記念青少年センターで(1998年11月)、「ミニコミ編集術」というテーマで、講演は加藤哲夫さんですね。

丸山 加藤哲夫さんは、この間亡くなられた。大変有能な方で、もともと宝石屋やってたんですけど、アイデアマンということにもなっていたんです。「ミニコミ編集術。奥の手がある」というから、頼んだら、奥の手全然出てこない(笑)。あれには、まいっちゃって。

——このときは60人ですから、結構人数多かったですね、参加者は。

丸山 そうですね。60人来ましたか。

五味 加藤君自体がメーリングリストを持っていたから、結構本人自体が動員力があんのよ。

丸山 そうだ。東京で加藤さんが「やる」と言え

ば、動員できるなにかの数があつたんです。——第8回は、「ミニコミの可能性を探る」というテーマで、今回もオリンピック記念青少年センターですね(1999年11月)。『わいふ』の田中喜美子さんが講演で、ほんコミ社の佐藤達也さんも出られてます。奥地圭子さんもパネリストですね。

丸山 ああ、東京シュレーの。奥地さんという人は、住民図書館との接触は大変遅い。私も奥地さんの東京シュレーについてはいろいろ報道がなされて、奥地さんも住民図書館のことはしょっちゅう読んで。だけど、2人で会ったことはなくて、そう彼女と話し合っていたら、あの人は、今まで住民図書館の活動に関与しなかったことを恥じて、悔いて、「悪かった」という。不思議なおわびをされるような、そういう誠意のある人だった。この人なら、子どもの通学問題でああいう動き方をせざるを得なかったことがわかるなど。それから、会員としての役割はきちっと果たしてもらった、記憶に残る女の人の一人ですね。

——第9回、最後のトークインになりますけども、これが電子メディアをテーマにした会議で、「NPO・FUSION長池」の岡村隆さん。それから、バリアフリーシアター・ジャパンの高島琴美さん。それから、日の出の森のトラスト運動事務局・橋本真一さん、藤前干潟を守る会の辻淳夫さん、というラインナップでした(東京ボランティア・市民活動センター、2000年11月)。

丸山 そうですね。辻さんに来てもらったのが最後になりましたね。

——『ぶりずむ』には参加人数の報告がなかったんですけど、大体30人ぐらい？

丸山 と思いますね。辻さんに初めてお会いしたことはよく覚えてます。辻さんは活動歴の長い人でしたからね。あれは学校の先生でもおやりになってたんでしょうかね。大変静かな人です。

13. ミニコミを教える——教師として

日本ジャーナリスト専門学校と目白短大

——ここで少し住民図書館からは離れるんですが、丸山さんは日本ジャーナリスト専門学校や目白短大、あとは和光大でも教えておられましたが、学生に教える中で、ミニコミについての授業というのをやられてましたよね。

丸山 ええ。ミニコミをやりましたね。それ

から「ジャーナリズムとメディア」、「出版文化論」など。

——この教える立場からのミニコミというのは、どういう議論をされてたんでしょうか。

丸山 ミニコミの授業といっても、「ミニコミとは何ぞや」をやったって、ほとんどわからないんで。マスコミとの比較において、メディアの主体性とか、自主性というものを教えたということが多いと思いますね。要するに、ジャーナリズムというものは何であるか。日本では、大きいものに価値があるという概念が一般的のようだけれども、そんなことないんだよ。100人いたら100の意見があっていいし、イギリスなんて国は地域のローカル新聞が、それこそロンドンだけで300ぐらいある。そこには、300の違いが表れている。日本のように全国に4つか5つしかないなどという、しかも、それが読売新聞なんぞは、1000万部などと数を誇ってる馬鹿らしさ。ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストは、20万〜30万部。読売の1000万。朝日の800万。こんな馬鹿みたいな部数を誇るんじゃなくて、恥じなきゃいけない。そういう日本のマスコミ情報というものを、君たちはしっかりと見なきゃいけないと。その一つとして、ミニコミというメディアの存在があるんだ。これは1人でもできる。2人でもできる。1人の意見がいくつもの意見と重なって、新しい論調をつくっていく。そういう手助けを、情報分配するのはジャーナリズムというものであって。マスコミ大、ミニコミ小——こういう量的区分けを、マスコミ的に発想することはやめたほうがいいといって、個別の主張を個別の方法で出していくミニコミを見せて、このミニコミはどこに価値があるか。実践的に、実体的に教えたということですね。1人でもメディアを出せば、ジャーナリズムにもなるんだ、ミニコミでも人に情報を伝えればジャーナリズムだと教えました。

——学生の反応は、時代ごとの違いというのはありましたか。

丸山 ええ。あとへいくほど、だめになった(笑)。——だめというのは、どういう点がだめなんんでしょうか。

丸山 問題意識が低い。だから、ジャナ専には、頭はいいけれど勉強が嫌いで大学に行けない者、すぐく優秀な学生が1割から2割。こいつらには、ジャナ専の馬鹿講師ではとても太刀打ちできない。だから、授業をやる時には、そうい

う学生に合わせて授業をやるか、落ちこぼれて大学へ行けなかった8割の学生をベースにするか、非常に考えるわけです。やるんなら2割ぐらいの学生が食いつくようなテーマを与えて、がっちりとした授業をやる。あとは寝かせておく。逆に板書を中心に、普通のどうしようもない、入ってもどうしようもないような連中に、板書を中心に時間を持たせる方法もある。

僕はいずれにしても、そんじょそらのどうでもいいような馬鹿講師じゃなくて、芯のある授業をやる、気骨ある授業をやるということを一貫して通した。そうしたら「現代報道研究会を作ったから顧問になってくれ」と言ってきた。よく一緒に飲んだ。だから、講師室においても、それなりの処遇を受けていたつもりなんだ。あるときは、なんか面倒というか、講師がいない科目は全部僕のところに来て、ジャナ専だけで週に7コマ持たされた。

目白短大もずっとやってたから、えらい忙しい時期もあった。そういうときに限って、また外部からの講演依頼、その他がわんさと来て、身体1つではとても持たないような状況もありました。

——時々、学生の中から住民図書館のスタッフに入って来たりすることはあったんですか。野村さんがそうでしたが。

丸山 ジャナ専では鈴木肇子という女子学生が、二子玉川の時にアルバイトで来ていました。

——短大の方から来た人とかは？

丸山 『ローカルネットワークの時代』の出版記念パーティーのとき、ゼミの学生5〜6人を連れてきて、受け付けをさせたときくらいかなあ。他にはいませんね。全然問題意識が違うから。だけど、コミュニケーション論っていうのも教えて、自分のお父さんお母さんがいまの君らと同じ年齢だったときに、何を考え何をしていたかを聞いてレポートにまとめろ、それが夏休みの宿題だといって出したら、驚きましたね。うちの両親はいわゆる集団就職組で東京に出てきた。苦労に苦労を重ねたことを初めて聞いたと言うんだ。親と子のコミュニケーションが全く成り立っていない。最も親しくあるべき人たちのコミュニケーションがディスコミュニケーションになってる。これは問題だなと。そういうところから派生する問題は、その後いっぱい起こってるけど、僕はあのときにそう思いましたね。

和光大学

——和光大学ではいかがだったでしょうか。

丸山 和光はね、できる奴とできない奴が極端なんだ (笑)。和光は、まだ大学を受けて入ったからいいんだけど。ジャナ専のは、それ以前の段階の連中だから。だからジャナ専と比べると、目白ですら一定の試験を受けて受かってきているから、線の引き方ができるんですよ。全体のレベルというもののつかみ方ができるんです。ジャナ専のはめちゃくちゃですからね。だから、和光も目白と同じように、一定の成績を上げて入ってきてるだけ、より授業はやりやすい。

優秀なのは2割、ジャナ専みたいに箸にも棒にもかからないのが2割、真ん中は真ん中と、一線を引くことが可能なので、授業の仕方が非常に楽でしたね。

——反応はどうでしたか。

丸山 ええ。和光あたりへ来てもらってもったいないと、まっとうに言う学生もいたよ。だけど、だんだん授業ってのは、マンネリ化しますから。双方に慣れが出てくるから新しい視点を持ち込んで、ただ出席してればいいという、後ろのほうでザワザワしている一部の連中を無視して、前から真ん中にいる連中に向かってやっていくというのは、これは大変な商売だな。いや、道場君なんて毎日それやってるってんじゃ、大変なものだなと思ってますよ。

——怒ったりはしなかったですか。

丸山 大いにやりましたよ、それは。すぐ怒鳴るんだよ。目白なんかで、怖い先生って。あれ、あの怖い先生って、俺は怖い先生のイメージで通ってたのかと。だから、使いわけを。「誰だ、しゃべってんのは!」と怒鳴りつけるのと、それはもう無視して、にこにこことやる (笑)。そ

ういろいろなことをやりました。それと、やっぱりクラスの中にリーダー的存在、女の子や男の学生がいるとやりやすいですね。ちょっとした、5～6人のグループを形成してて、こういう連中はあまり雑談をしたり、居眠りはしない。そういうのが教室に1グループあると非常にやりやすい。

14. 東高円寺時代

六度目の移転

——いよいよ最後の場所、東高円寺の時代 (杉並区和田3-60-13 全富ビル401号室) です。北新宿時代はおそらく一番テナント料が高い時期だったと思うんですが、それでも7年半と一番長く続きました。中津問題があって、苦難の時期でもあり、長続きした時期でもある。この北新宿の時期に、朝日新聞が「住民図書館存続ピンチ」という記事を載せていて、住民図書館のあった場所を地図の上に印づけているんですが⁸⁴⁾、これを見ると全部、ぎりぎり東京都って感じで、東京都の中で移転をされている。あくまで東京都内という形で続けておられたというのは、お考えがあつてのことだと思うんですが、たとえば、書庫は田舎に移して、重要なものだけ都心に置くとかですね。そういうことも考えられなかったのかと思ったんですが、いかがでしょうか。

丸山 何度か述べていますが、僕は、住民図書館の資料は東京にあってこそ利用者に対して公平であるという考え方で、移転する際も23区内が望ましいということを常に思っていました。北新宿のビルはバブル崩壊で不良物件化して出ななきゃならなくなったわけですが、そういう条件がなかったとしても、すでに中津問題が発生しておりましたので、あそこにはそれほど長くはいらなかったと思います。

——不良債権化というのは、オーナーさんが手放した。

丸山 そうです、倒産したんです。持ち主の不動産屋さんが倒産して、われわれの入ってる建物は競売物件になったわけです。それで、補償金をもらって出たと。補償金は新しい債権者が出した。

——この補償金は「いくら出せ」とかっていう交渉はしたんですか。

丸山 それは一切なしで、その負債処理の不動産会社か弁護士か知りませんが、非常に慣れて

授業科目	言語文化関係 講義11	授業 題目	現代メディアを読む	4単位	担当者	丸山 尚
授 課 マ ー	世の中を、別のメディアを通してのぞいてみないか! ミニコミと呼ばれる、小さなメディアがある。マスコミとはその視点、伝え方がまるっきり違う。小さいが故に自由で、本質を衝くミニコミを素材に、人間、社会、自由、教育などを考え、討論し発表しよう。					
前 講 義 計 画	①ミニコミとは何かを、教科書、教材を通して考える。②いまミニコミとはどんな考えのもとに、どんな人々によって、どんな問題をテーマに発行されているかを、ミニコミを読みながら知る。③それを通して自分の意見を確立し、レポートにまとめ、討論をする。					
後 講 義 計 画	前期に続き、ミニコミで提起されている個別記事を教材に、自らの問題として考え、自分の意見をまとめ、討論のベースになり得るレポートをまとめ、それを元に積極的な討論を行う。それを通して、日本の現実と人間の多様性、他者の存在、歴史の意味などを考える。					
教 科 書 と 参 考 文 献	教科書『ローカルネットワークの時代』(日外アソシエーツ刊、紀伊国屋書店発売) '97年刊、定価1,800円+税。他に必要教材はコピーして配布。		履修条件成績評価の基準等 授業の形態上遅刻・欠席お断わり。それができない場合は、初めから履修しないこと。			

99年度和光大学表現学部の丸山氏講義シラバス

て、てきぱきと先へ先へと手を打ってくるものですから。われわれは確か160万と査定されて、もう交渉の余地はなし（笑）。だけど、いまお話しの東高円寺へ入居するには、それに間に合う金額であったということです。

—あれだけ膨大な資料があって、しかも、あとの年度になればなるほど、ものすごい量になっていくと思うのですが、引越しは業者さんに頼むんでしょうか？

丸山 市民運動全国センターから目黒へ行くときはまだ自前でやってたんですが、世田谷へ行くときには、もうたまたま業者を頼みました。

埼玉大への資料移管問題

——東高円寺に移ってから間もなく、資料の埼玉大への移管問題というものが発生してきたと思うんですけども、最初は住民図書館の棚に並べられないミニコミ以外の資料、たとえば宮崎さんの横浜新貨物線反対運動資料とか、こういうのを部分的に移管するという感じでした。これはまだ北新宿時代の97年のことですね。

丸山 ええ、そうです。最初は、宮崎さんの資料は新貨物線関係資料として、キャビネット一本に、小さなスチールの棚が1本ありましたからね。そこに整理をきちっとした上で、いかにも宮崎さんらしい几帳面な分類の仕方での整理をきちっとして、彼は置く場所に困ってたんです

ね。

で、住民図書館が北新宿に移るときに、じゃあ一緒に預かりましょうと。そのときには、金銭関係を入れずに話をしたんですが。最後には、彼は200万円を出してくれた。資料を預かっている住民図書館に、資料の預り賃として向こうは納めてあるだろうと思います。したがって、住民図書館の中にあっただけども、あれは個人のものだから、個人である所有者が「譲る」といえば、運び出されていって当然だ。この話は、埼玉大に「社会動態資料センター」ができたときに、こちらでスペース不足と人手不足で整理できないと思われる資料を移管することを提案して、先方もそれは喜んでいただきたい、ということから決まったものです。それで最初に横浜新貨物線の資料が行った。

そしたら、消費者連盟の資料も行くことになって。われわれより早く吉川勇一も、個人所有になっていたべ平連関係の資料を、藤林君のほうへ譲ることを決めた。われわれは、あとへずっと残るわけです、決めかねて。

——宮崎さんの資料というのは、そうすると、いつ頃住民図書館に寄贈されたものなんでしょう？

丸山 北新宿ですね。それで持参金を付けた分
が中津に盗み取られた。

——次の段階で、住民図書館本体の資料を埼玉

[illegible]

大に移管するにあたっては、『住民図書館25年のあゆみ』によれば、何ヵ月かに渡って議論を続けたとあります。

丸山 そうです。いずれにしても、即断・即決は得策ではないと。なぜなら、若いスタッフは、かなりあの頃まとまってきましたからね。反対意見も、湯瀬君の友人の望月君なんていうのは、どうみても最初から反対しそうな男なんで。資料をめぐる混乱が起こったという逸話をつけて、資料を送り出すのではなくて、双方合意のもとに、きちっとした形でやりたいと。ただ、そのためには、若い連中の意見も聞くべきことは聞かなきゃいけない。

住民図書館の理念、一つは、基本的には誰もが使えるということですね。それから、利用、立地条件がいいということ。そして誰もが利用する権利を保有する。できればこちら側からも人を送る委員会のようなものがあればうまくつながる。しかし、国立大学に物を渡すときは寄付するということに決まっているので、委員を出すとか口を出すなんていう話は一切もう不可能になってしまうだろうと。そうすると思いは残る。すぐには決めかねるけど、年を越す話じゃないだろうということで、適当なところで落しどころをつくった。

——内部では、平川さんや沢西さん、湯瀬さんはどういうふうなご意見だったんでしょうか。

丸山 迷われたと思いますね。せっかくここまでやってきたのにという気持ちは、どなたにもあったでしょう。だけど、これからまたこれと同じ苦勞をするのかと思うと、もういいだろうという思いもしたでしょう。要するに、心は揺れたと思いますね。

——いくつかの条件を先ほど丸山さんはおっしゃいました。すべての人に開かれているとか、アクセスの問題を中心にいくつか条件をつけられたと思うんですが、これはもう全部飲まれたと。

丸山 全部飲まれましたよ。要するに、条件はわれわれの要請を入れるということで、1つでも問題が残れば成立しない可能性があったので。われわれだってそんなに非常識なことを言うるわけではないと。ごく当たり前のことを言っただけです。

——2001年10月に出た『ぶりずむ』第75号には閉館決定と書かれていますから、夏から秋ぐらいに大体結論は出たということでしょうか。

丸山 結論は出たってことですね。まあ、継続

すべきだという声は当然ありましたけど、それが渦となったり、集団にはならなかった。少し休めと、ご苦勞であったという反応が優ったということでしょう、会員、その他協力者の中で。そういう雰囲気を感じたと、その上の判断・決定であったということですね。

——これは運営委員会の中で決めたんでしょうか。それともほかに？

丸山 運営委員会で決めました。

——運営委員会の外で相談された方とかいらっしやいますか。

丸山 特におりません。浪江さんはもう亡くなられてましたし、報告する人といっても特別ななかったですね。

——最初に宮崎さんの資料を動かすということだったんですが、この資料の移管の話があったときに、丸山さんご自身は住民図書館の資料も将来的に移すものだというふうにお考えになりましたか。

丸山 それは何も考えなかった。このままえっちらおっちらやってくんだろうと。ただし、結論めくけど、住民図書館のやるべきものはもっと公的なものなので、地方自治体にやれ、国にやれとは言わないけれど、少なくとも大学ぐらいは私たちがやりましょうかというレベルにあ

住民図書館コミュニケーションペーパー

ぶりずむ NO.76

第3期発行 / 第200号
http://www2u.biglobe.ne.jp/~jumin

○発行日: 2001.10.10
○発行人: 丸山 尚
○発行 行: 住民図書館
〒166-0012 東京都杉並区和田3-60-13
金室ビル401号
TEL / FAX 03-3313-5760

住民図書館閉館

25年の御支援に感謝します

全資料は埼玉大・共生社会研究センターへ

編集 丸山 尚

住民図書館は2001年12月15日(土)をもって閉館となり、同時に資料室も閉鎖となります。これまで以上に大切に「保存」されてきたという「重宝」としての資料は、埼玉大学・共生社会研究センターへ搬送されます。資料の搬送も、カンパでもお預けしたいという方々、資料を搬送して下さった皆さま、その他いろいろとご支援いただいた方々に、心より御礼申し上げます。また、この機会に、各館の資料や資料室の資料を、各館の資料室へお預け下さる方も、ぜひご検討ください。25年間の御支援に感謝いたします。そして、貴重な資料を一点も散逸することなく、共生社会研究センターにバトンタッチすることができました。

不安定な運営を乗り越えて

しかし、会費や印刷費の不足、館内での火災、など大学と関係の深い問題も発生。閉館決定の経緯について述べておきます。

住民図書館は1976年4月1日、東京都杉並区で開館されました。当初、この館は、各館の資料や資料室の資料を、各館の資料室へお預け下さる方も、ぜひご検討ください。25年間の御支援に感謝いたします。そして、貴重な資料を一点も散逸することなく、共生社会研究センターにバトンタッチすることができました。

で、それに代わってのもやりました。人間や動物、植物や自然など、自然の活動に目を向けた活動も増えていきました。

住民図書館の活動内容は、これらグループ活動の発展や、活動の場を提供するところ(各館や資料室、25)やイベント、資料室、ビラ、チラシなど、誰でも自由に利用でき、そして自由に活用できるという「開放、公開、共有」の精神で、住民図書館は運営されてきました。

残念ながら、住民図書館は経営、資料や資料室を運営していくことができませんでした。そのため、どうしても資料の入手が難しくなりました。この25年間の活動の中心は、各館の資料や資料室の資料を、各館の資料室へお預け下さる方も、ぜひご検討ください。25年間の御支援に感謝いたします。そして、貴重な資料を一点も散逸することなく、共生社会研究センターにバトンタッチすることができました。

収蔵・公開・保存の3原則を掲げて

住民図書館が掲げた1976年、60年代に盛況だった活動中、大学と関係の深い金銭問題も発生しました。

住民図書館閉館を告げる「ぶりずむ」最終号

るのではないかと期待もしましたが、その体質は非常に古くて、既成の学問体系に則ったもの以外は価値を認めたがらない。いわゆる権威主義に固まっていて、ミニコミのようなものを研究素材、学術研究対象にするという意識が、なぜないのだろうと。民間でこれだけ努力して、苦勞してるのに。非常にいい位置にいながら、いい禄を食みながら、なぜ下りてこないんだろう。ごく一部の、僕がつき合った学者連中は何十人もいるけれども、ごく一部のそういう連中だけで、彼らは常に体制にはなり得ない。社会運動ってのは反体制的なものだから、銭や金でやってる人は一人もいないんだけれども。いずれにしても、うーん、我々、普通の市民がこんなに苦勞してやるべきことではないのではないかと、私は思いました。

そしたら、藤林さんのような人とか、いろいろな人が出てきて、今は大学がいよいよ立ってくれて、我々の残した成果を花開かせてくれつつあることに、大変感謝している。

——僕も思うことですが、これはいろんな偶然と、それからしかるべき人がいないとできなかったと思うんですね。住民図書館が2001年まで持ちこたえて、そのときまたま藤林さんが埼玉大のポストに入って、このタイミングがちょっとずれてたら、住民図書館はまだ今も続いたかもしれないけれども。

丸山 それはあり得ない（笑）。

——ちょうどいいタイミングで埼玉大に行って、しかし埼玉大でも単独では維持できないということで立教大学と学長間協定を結んで立教に移管する、という動きがありました。協定が結ばれたのは2009年3月、資料の移管が全て終わったのは2012年の3月です。こうしてミニコミセンター以来のミニコミが、移動を続けながらもずっと守られている。もうダメかと思ったときに絶妙なタイミングで人がいた。その丸山さんたちの努力と、それに共感してそのあと引き継いだ人たちの努力だという感じがします。

丸山 おっしゃる通りだ。

——埼玉大に移ったときに、いくつか残金とか、残務の整理があったと思います。お金については平川さん主宰の「市民・住民運動資料研究会」と、それから水俣病センター相思社と、立川の「アンティ多摩」に寄贈したということだったのですが、この残金残務の整理は丸山さんがやられたんでしょうか。

丸山 これは沢西事務局長がやりました。僕は

大いに賛成しました。

——ミニコミを搬送したあと残っていた仕事は、各ミニコミへの連絡なんでしょうか。ミニコミ発行者への。

丸山 それと、25周年記念パーティを兼ねて全部通知を出しました。

25周年と住民図書館閉鎖

——住民図書館の25周年は同時に埼玉大への移管問題を抱えた25周年でした。移管が決まる前に『住民図書館25年のあゆみ』の編集が始まり、完成したときには閉鎖が決まっていた。

丸山 25周年記念パーティは、その25年史の出版記念会と閉鎖の慰労も兼ねて行なわれました。——パーティは2001年11月、閉鎖のひと月前に、日本出版クラブで行なわれています。どんな方々が参加されたんでしょうか。

丸山 吉川勇一さんが乾杯の音頭を取ってくれて、久野綾子が名古屋からやってきたり、共同通信にいた僕の友人、パーキンソン病の先輩、伊佐木健も来てくれた。僕の学生時代からの本当に親しい友人、鳥居哲男はもちろん来てくれた。それから、上井喜彦さん⁸⁵と藤林さんが埼玉大学から来てくれて。急だったし暮れだったのですが、それでも出版クラブの部屋がいっぱいになるぐらい来てくれました。

——そうしますと、全部荷物を送り出して、25年の丸山さんの苦闘が一つ段落を迎えた感じだったと思うんですけど。それで、最後の住民図書館だった建物ががらんととなりますよね。どういうふうに思われましたか。



東京新聞01年12月14日

丸山 世の中なんてこんなもんだ。終わりのある世界だから、まあ、こんなもんだらうと思いましたがね。しかし、別れるっていうのはつらいことですね。相手が人間でも資料でも（声が詰まる）。とくに僕は病気になってから涙もろくなって困るんだ。テレビ見ても泣いちゃうんだね。最後のさよならパーティでもお礼とお別れのあいさつで、泣けて仕方がなくて、大変皆さんに失礼した。花束をもらったときにどっと涙があふれてきました。もう、こういう人たちとは二度と会うことはないと思いましたからね。事実、住民図書館関係では平川さん、沢西さん、宮崎さん除いては、ほとんど会っていません。

V. 住民図書館閉館後——いま思うこと

——住民図書館閉館から10年を経過して、いまどのようなことをお考えでしょうか。

丸山 ミニコミセンターや住民図書館が、少しは人に知られていたとしても、社会的意義がどれほどあったか、今も気になりますね。それにしても僕は、自分のやったことの中に、ずいぶん乱暴というか無思慮なところがあったと、いまだに冷汗をかく思いです。まっすぐ行けば、大した難所でもないところを、自分から遠回りして事をかまえるような所がなかったかどうか。それと、人間の価値です。人としてどのような価値を持っているか。住民図書館の運営に参加された、実に多くの人たち、1銭にもならないことに力を貸してくれた人たち、どうしてあんな人たちが、住民図書館程度のものに犠牲的ボランティアをしてくれたのか。面白ければその理由はわかります。でも住民図書館をやったって、別に面白くない。私は25年間、人に支えられてやれたことだという思いを、年々強く感じています。

ミニコミは1970～80年代の日本の社会的変動をリードしてきました。実に幅広く、色んな分野からたくさんのミニコミが生まれました。私はこれを「市民ジャーナリズム」の誕生と見ます。ブームは2、3年ですが、人に伝えたい情報や思いを持つ市民が、自由に意見を投げ合うという行為は、実に人間的なものです。

それが60年代から70年代にかけ、実現したんです。そう考えれば今後もそういうことはあるかもしれない。しかし今は社会的課題はプロの政治家や行政にまかせて、それが時代に合ったスタイルだとして、自分の意見や要望は持たな

いようになっています。特に若い人は、わずか10年前のことがわかりません。これは相当危ない状況ですよ。

だが社会は変化する。そうした兆しはたくさんあります。市民の直接行動が起きたとき、世の中は必ず変わる。いま市民はおまかせ民主主義で、社会的行動をしないが、それは必ずくる。何かはわからないが、変化は必ずある。人間の歴史がそう証明しているんだから。だが、未来は見えない。そのとき、どんな「市民ジャーナリズム」が活動するか、メディアはどう動くか、ミニコミジャーナリズムは存在しているのか、どんな機能を持っているのか。突拍子もないようだが、考えると楽しい。

2013年 3/11 号外 第6号

60～70年代の市民運動 資料を共同研究

埼玉・立教大が協定

埼玉大学は、70年代の市民運動に関する資料を立教大学（東京都豊島区）に移し、一般公開したり、共同で利用・研究したりする協定を結んだ。一般の人が、よりアクセスしやすい場所での研究を進める狙いがあるという。資料の移送は6年度中に半数を終える予定で、ともに「できるだけ早く整備し、公開したい」と話している。

現在、資料を保管しているのは、埼玉大学共生社会教育研究センター。97年にできた経済学部の資料センターが発展したもので、資料の収蔵量は約10万冊に達している。

協定を結ぶ上井喜彦・埼玉大学長（左）と大橋英五・立教大総長（東京都豊島区）

並べ替えて開架した「市民運動」から受け継いだ約16万冊の資料は、水戸市立図書館の第一号の蔵書・宇井善三の資料や「ベトナムに平和を」の資料など、研究に活用されている。9日締結された協定では、①向センターの約35万冊以上の資料を、01年度を以て立教大学に移す。②資料を一般公開し、共同で研究・活用する。③向センターの約35万冊以上の資料を、01年度を以て立教大学に移す。④資料を一般公開し、共同で研究・活用する。⑤向センターの約35万冊以上の資料を、01年度を以て立教大学に移す。⑥資料を一般公開し、共同で研究・活用する。

長は「高度成長期の負の面に目を向け、市民運動のあり方を問いかけ、現代の社会研究にも通じる」と共同研究（03・3・28・2200）

——住民図書館の資料についてはいかがでしょう。

丸山 まあ、いい研究者にめぐり合って、十分に資料価値を生かしていただくことを願うだけです。ときどき先人の苦労をしのんでいただければいいですけど、これからは忘れられていく一方でしょう。

何しろ、社会構造が非常に変わっているわけですから、われわれが情緒的にミニコミというメディアについていろいろ考えても、いまの社会機構そのものがもう、それに当てはまらないようになっているわけですから。ものの考え方、発想の仕方が大きく変わってしまって、過去の歴史的遺物にミニコミはなるのではないかと。だけど、時代を形成した事実は消えない。それから、真のミニコミ者といわれる人たちは、まだ手づくりのミニコミをコツコツ出している。パソコンで打ち出せるんだけど、あえて手書きに固執している人もいるんだ。その中には、先ほどもふれた四国の安岡さん、鈴木さん夫妻のような、死ぬまでミニコミから離れることができない人たちがいる。『四国西南海岸レポート』をやめたと思ったら、案の定新しいミニコミを出す。これはただひたすら書く。あの夫婦のミニコミはただひたすら書くということで、対象にへばりついて、へとへとになるまで書き込んでいて、それを人に伝える。あれはマスコミもできないし、誰もできない。そして、大きな影響力を読者の周辺につくりだしている。あれもミニコミというものに魅入られた人たちの1例ですね。ミニコミというのはそういうふうに人を引き込んで離さないところがある。引き込んでしまっただけでね、一生そこに張りつづける力を持っている。

——最近若い人たちが、フリーペーパーという幅が広すぎるんですが、コミュニティセンターあたりに行くと、紙代だけで印刷機が使えるということがあって、手軽に小さい雑誌を出していたりします。

以前ニューヨークに行ったときに、社会運動系の小さな本屋さん、模索舎よりもちょっと大きいような本さんがいくつかあるんですけど、

そういうところに行くと、やっぱり小さい雑誌で運動関係の人たち、とくにフェミニストとか、あるいはセクシャルマイノリティの人たちとか、いろんな手作りの雑誌が出ていて面白かった。そういうのを日本に持ち込んで売ったりしている人たちもいます。こういう雑誌の文化が世界的にはある。それが最近活性化してきたかなという印象があります。

丸山 40年程前、人びとは生き生きとしていました。あれは自由にモノが言える時代だったからです。ふつうの市民でも何かやれば受け入れられ、評価される習慣が生まれたからです。関心があったんですよ、人にもものごとにも。今は人が何をやろうと言おうと、関心がないんだ。ミニコミ活動もそう活発でない原因に、人のやること、あるいは人そのものに関心を持たない風潮が強いからなんだ。もちろん、その逆もある。あるが少数派だ。しかしこの少数派こそがイニシアティブを握ったのが、60年代～70年代の社会的変化です。ただ今は市民はあまりモノを言っていないが、個の自立というか自分のものをそれぞれに持っている。いざとなれば社会的に必要なポジションに駆けつける人が、40年前よりはるかに多い。40年前の変化の時代がもたらした社会的体験が、自己形成が行われる頃、機能したのではないかと僕は思っています。1970～80年代に起こったことは1945年の敗戦が社会的体験としてつながっていたからこそ、起こったのだと思うよ。

こうした社会的体験をしっかりつないでいくと、また40年前頃のことがあるかも知れないね。イヤ、今の日本ではそれは無理か。「市民」という実像の中身がどんどん変わりつつあるんだからね。

まあそんなことより、かつてのような面白いミニコミ、読者とのいい関係をつくり出してくれるミニコミ、鋭い批評性に満ちたミニコミ、周りを楽しくしてくれるミニコミ、要するに読んでうれしいミニコミをたくさん出してほしいね。

——長時間にわたりありがとうございました。

《注》

- 1) 鈴木の前著はとて多いが、さしあたって『現代ジャーナリズム論：日常生活批判の眼』（三一新書、1969年）、『ジャーナリストに何が可能か：現代報道論』（三一新書、1972年）、『ジャーナリスト：毎日の旅の記録』（三一新書、1980年）の三部作を挙げておく。
- 2) さしあたり、「住民図書館への軌跡」（『総合ジャーナリズム研究』第84号、1978年4月）、「住民図書館とその資料：「小さなメディア」にどのような目が向けられているか」（『図書館雑誌』第75巻8号、1981年8月）、「市民社会の形成とミニコミの役割：解説にかえて」（住民図書館編『ミニコミ総目録』平凡社、1992年5月）、「住民図書館の現在」（『みんなの図書館』第206号、1994年6月）「住民図書館の25年半：健全なジャーナリズムのバランスを求めて」（『総合ジャーナリズム研究』第179号、2002年1月）および「住民図書館の25年」「住民図書館は、なぜ生き延びられたか」「住民図書館25年史年表」を含む住民図書館25年史編集委員会編『住民図書館25年のあゆみ：ミニコミを収集・公開・保存して』（住民図書館、2001年10月）などがある。
- 3) 各回の日付を記録しておく。第1回・2011年12月13日、第2回・2012年1月24日、第3回・2月14日、第4回・3月6日、第5回・4月3日、第6回・5月8日、第7回・6月5日、第8回・7月3日、第9回・7月13日、第10回・8月9日、第11回・10月2日。各回のインタビューは丸山氏の健康上の理由により2時間ずつであった。
- 4) 鈴木前掲『ジャーナリスト』88頁（強調原文）。
- 5) 鈴木均「丸山尚」（朝日新聞社編『現代人物事典』朝日新聞社、1977年）。
- 6) 学徒援護会編『財団法人学徒援護会二十五年史』（学徒援護会、1972年）には、アルバイト幹旋に先立って技能講習会が行なわれ、それに基づいて「ふすまグループ」「塗装グループ」などが編成されていたことが記されている。
- 7) この経緯については、鈴木前掲『現代ジャーナリズム論』第1章に詳しい。
- 8) 家永『権力悪とのたたかい：正木ひろしの思想活動』（弘文堂、1964年）。のち増補されて三省堂から1971年に再刊。
- 9) 正木ひろしが戦時中に発行していたミニコミ。のちに旺文社文庫より全5巻にまとめられ（1979年）、同文庫廃刊後は現代教養文庫から刊行された（1991年）。また、雑誌本体は不二出版より1989年に復刻されている。
- 10) 1955年に静岡県三島市で起きた殺人事件。犯人として逮捕された2名（うち1名は在日朝鮮人）は無実を訴えたが、1960年に最高裁で有罪が確定。正木は上告審から弁護に関わり、最高裁判決後、真犯人は被害者の家族であるとする書籍を出版、これが「名誉棄損」にあたるとして刑事告発され、有罪判決を受ける。丸正事件後援会は、この正木及び同じく「名誉棄損」に問われた鈴木忠吾弁護士の救援会である。その後も新たに組まれた弁護団によって再審請求が続けられた。詳しくは家永前掲書、および青地農『冤罪の恐怖：無実の叫び』（毎日新聞社、1969年）、丸正事件再審を待ちとる東京・神奈川の会編『開かずの門へ：丸正事件は終わっていない』（同会、1978年）などを参照。
- 11) 1966年3月発足。会長は伊藤整。これ以前に中央公論社の編集者・柳田邦夫氏を世話人として1965年6月に「丸正事件の真実を伝える会」が発足、発展解消して後援会になった。
- 12) 注7)と同じ。同書によれば、鈴木は1962年8月に編集長になり、11月に退社している。
- 13) 大野明男は1930年東京生まれ。1950年に東京大学での反レッド・パージ闘争で退学処分。その後業界紙記者を経てフリー。著書に『全学連：その行動と理論』（講談社、1968年）、『雑兵の思想：反エリート的「市民」論』（創世記、1976年）他多数。
- 14) 鈴木均・石川弘義・丸山尚『社内報：サラリーマンのジャーナリズム』（東洋経済新報社、1965年）。
- 15) 「組合機関紙と『社内報』：社内報にどう対処すべきか」（『月刊社会党』第99号、1965年8月）。
- 16) 『現代ジャーナリズム』は1・2号がタイプ謄写版（表紙は活版）、3号以降活版刷り、A5版。第2号編集後記によれば、編集委員は鈴木均・谷川公彦・平野俊治・丸山尚・山崎範子の5名。なお、現代ジャーナリズム研究所の「設立趣意書」には次のようにある。
「現代ジャーナリズム研究所は、現場の体験知に根ざした、ジャーナリズムの総合的研究をめざして創設される。歴史の浅いジャーナリズムの科学は、「現場」と「アカデミー」の共同作業によってはじめて実りある成果を生み出すことが出来るであろう。諸先輩の貴重な科学的労作を継承し、おびただしい芸談を俳優術にまで総合し展開させることが、この研究所スタッフの任務である。
このような目的と自覚のもとづいて、われわれは、明治以来のジャーナリズム史、現代ジャーナリズムの構造、編集労働論、ジャーナリズムの方法論等の探求に向かう。さらにアカデミッシュな[A?]とジャーナリストの協力によるジャーナリストの養成機関を設置し、ジャーナリズムに関心をもつすべての人びとに開かれた機関紙・誌を発刊する。
以上われわれはジャーナリズム諸分野にわたる自主的な研究・創作活動によって、ジャーナリストの趣能[A?]、職能[B?]確立の道を開拓する。
一九六三年十月二十八日」（創刊号、13頁）
- 17) 谷川公彦は1930年熊本県水俣市生まれで、兄に編集者・民俗学者の谷川健一、詩人の谷川雁、中国研究者で京都大学教授の谷川道雄がいる。のち吉田姓となる。
- 18) 小林一博は1931年生まれの編集者・出版評論家。2003年没。著書に『遺稿 出版半生記1959-1970』（『小林一博遺稿集』刊行会、2003年）他多数。
- 19) 金子勝昭『丸山さんとのかい』（住民図書館25年史編集委員会編『住民図書館25年のあゆみ：ミニコミを収集・公開・保存して』住民図書館、2001年）93頁。『考える』はタイプ謄写版、A5版。各号巻頭に「はじめに」と題した次のような文章が掲載されている。
「考えないジャーナリストが多すぎる。編集プランを考え、生活設計を考え、利殖を考えるジャーナリストは多い。しかし、ジャーナリズムとはどういう仕組みなのか、ジャーナリズムは社会の中でどのような役割を果たしているのか、ジャーナリストはその仕事を通じて何をしなければならぬか。要するに、ジャーナリストとは何なのか。考えなければならぬことはたくさんある。それをいつしよになつ

て考えてゆこうというのが、このサークルを作った目的だ。

考えただけでは、もちろん無意味だ。考えは実行されることによって試され、鍛えられ成長する。その成長をみんなのものにしたいというのが、ぼくたちの決意である。」(原文ママ)

- 20) 日本書籍出版協会編『日本出版百年史年表』(日本書籍出版協会、1968年)。
- 21) 巖浩は1925年大分県生まれの編集者。『日本読書新聞』編集長ののちは現代ジャーナリズム出版会社長兼伝統と現代社社長。伝記として井出彰『伝説の編集者・巖浩を訪ねて：「日本読書新聞」と「伝統と現代」』(社会評論社、2008年)がある。
- 22) 『デスク日記：マスコミと歴史』(全5巻、みすず書房、1965-69年)
- 23) 丸山尚『ミニコミ戦後史：ジャーナリズムの原点を求めて』(三一書房、1985年)。引用は170頁から。
- 24) 同誌1971年3月26日号。
- 25) 小田実とは1932年大阪生まれの作家。1961年に刊行した『何でも見てやろう』(河出書房新社)が大ベストセラー。1965年飛足の「ベトナムに平和を！市民連合(略称、ベ平連)」では代表をつとめる。1974年のベ平連解散後も生涯にわたって社会的発言を続け市民運動を続けた行動的知識人。2007年没。
- 26) 丸山尚編『[ミニコミ]の同時代史』(平凡社、1985年)、35頁。
- 27) 「東京都港区新橋5丁目17番2号 日金ビル」と、『ミニコミセンターニュース』創刊号にはある(1972年5月、1頁)。
- 28) 田村紀雄は1934年前橋市生まれ、文中で触れられている東京大学新聞研究所助手のあと、桃山学院大学助教授を経て東京経済大学教授(現在名誉教授)。専攻はコミュニケーション学、思想の科学研究会員。著書は『日本のローカル新聞』『コミュニティ・メディア論』(現代ジャーナリズム出版会、1972年)他多数。
- 29) 菊池はその後、栗田出版会に勤め、独立して出版社「双柿舎」を設立する。「双柿舎」は静岡県熱海市にあった坪内逍遙の住居の名前。
- 30) 村上知彦は1951年兵庫県芦屋市生まれ、関西学院大学在学中にミニコミ『週刊月光仮面』を発行。卒業後は『スポーツニッポン』を経て「チャンネルゼロ」を設立。現在はまんが評論家、神戸松蔭女子学院大学教授。著書は『黄昏通信：同時代のまんがのために』(ブロンズ社、1979年)他多数。
- 31) 奥野卓司は1950年京都市生まれ、情報人類学者、関西学院大学教授。著書は『パソコン少年のコスモロジー：情報の文化人類学』(筑摩書房、1990年)他多数。
- 32) 『ミニコミセンターニュース』は全26号(1971年9月～73年12月)。立教大学共生社会研究センターに合冊版が所蔵されている。
- 33) 田村紀雄『ミニコミの社会史』全20回。足尾鉾毒事件の際に発行されたビラやパンフレットから運動を考えるもの。
- 34) 長谷川修児は1932年東京生まれの詩人。ベトナム戦争時は「詩のベ平連」を名乗り、「ベトナム反戦詩集」を19集まで刊行、その後も詩集発行や詩の朗読会を続けている。現在もガリ版刷りの詩誌『游撃』を毎月刊行中。
- 35) 『an・an』1973年2月20日号の「anan JOURNAL」のコーナーで8頁にわたってミニコミを紹介している。『ミニコミセンターニュース』第17号(1973年2月)と18号(3月)でもこの問題を取り上げている。
- 36) 東京・渋谷で発行されていたタウン誌。丸山『ミニコミ戦後史』には「渋谷は新宿、池袋ほどに街としての顔がなく、したがって若者をひきつける魅力に乏しかった。そこに西武流通資本の進出によって新しい街のイメージづくりが画策され、“若者の街”づくりがすすめられていった。『だぶだぼ』はいわば、それに乗ったのである」と書かれている(129頁)。
- 37) 持ち込まれた自主出版物はすべて販売するという方針をとっていた模索舎に対し、四谷警察署は72年8月、同舎で販売された『四畳半襖の下張』が「わいせつ文書」に当たるとして五味氏他1名を逮捕・起訴した。この件については、小中陽太郎・五味正彦・柘植光彦編『対決・刑法一七五条：「四畳半襖の下張」模索舎裁判』(垂紀書房、1977年)を参照。
- 38) 根上砒『郵便料金値上げ粉碎への新しい提起① メール・ゲリラを』(『ミニコミセンターニュース』第7号、1972年4月)。向井孝は1920年愛知県大山市生まれのアナキスト・詩人。2003年没。生涯に大量のミニコミを編集・発行した。著書に『向井孝の詩』(ウリ・ジャパン出版部、1996年)『暴力論ノート：非暴力直接行動とは何か』(「黒」発行所、2002年)他。
- 39) 『企業広報のすべて：社外広報・PR・パブリシティ・社内報の効果的すすめ方』(中央経済社、1981年)『広報紙・社内報づくりの実務』(中央経済社、1988年)。このほか『企画立案の方法：読まれる編集プランはこうしてたてる』(交鈴社、1976年)『社内報の実務と理論』(交鈴社、1977年)『住民とつくる広報紙：“参加時代”の広報活動をどうすすめるか』(交鈴社、1979年)『文章の書き方、直し方：誰にもわかる原稿の書き方とリライトの方法』(交鈴社、1980年)『こんなにも使える 社内報の上手な活用法』(二期出版、1989年)『ビジネスマン・OLのための楽しくスラスラ書く文章術』(中央経済社、1994年)『DTP・インターネット時代の広報紙・社内報のつくり方』(古賀弘幸と共著、中央経済社、2001年)などがある。
- 40) 『新編豆記事全集』(交鈴社、1972年)日本ミニコミセンター編『実用カット集』(交鈴社、1973年)。
- 41) 『面白びっくり大全集』PART I～Ⅲ、三一新書、1982年。
- 42) 注39) 参照。
- 43) 鈴木均『出版界：その理想と現実』(理想出版社、1979年)。清水英夫『現代出版論：書く・作る・売る・読む・自由の軌跡』(理想出版社、1980年)。
- 44) 仲井富は1933年岡山県生まれの社会運動家。元社会党書記局員(青年部長、国民生活部長)、公害問題研究会。丸山氏の語るとおり全国の公害現場を歩いて1969年に『住民の公害白書：いのちとくらしをおかすものへの告発』(日本社会党公害追放運動本部編、社会新報刊)を編集。1969年12月の総選挙で社会党が大敗して書記局員を削減したときに退職し(70年春)、渡辺文学・奥沢喜久栄とともに「公害問題研究会」を設立、月刊誌『環境破壊』を発刊した。住民図書館とのかかりについては「住民図書館にたどりつくまで：住民図書館前史」(前

- 掲『住民図書館25年のあゆみ』所収) 参照。
- 45) 丸山尚「ミニコミの概況」(『環境破壊』第3巻3号、1972年3月)。
 - 46) 岩田薫は1952年東京生まれ。文中に登場する「苦惱舎」のあとフリーライター。1991年から99年まで長野県軽井沢町議。著書に『タウン誌の論理：創る・読む・旅する』(潮出版社、1977年)『住民運動必勝マニュアル：迷惑住民、マンション建設から巨悪まで』(光文社新書、2005年)他。
 - 47) むのたけじ(武野武治)は1915年秋田県六郷町生まれのジャーナリスト。朝日新聞在職中に敗戦を経験し、新聞の戦争責任を自らに問うて退社。故郷秋田県で1948年から78年の30年間、週刊新聞『たいまつ』を刊行。著書に『たいまつ十六年』(企画通信社、1963年)、『戦争絶滅へ、人間復興へ：九三歳ジャーナリストの発言』(岩波新書、2008年)他多数。
 - 48) 『ミニコミセンターニュース』第26号、1973年12月。
 - 49) 『ミニコミセンターニュース』第24号 (1973年10月)で、丸山氏は次のように述べている。「一、ミニコミ同志の連帯など、不可能であることを確認せざるをえないこと。／二、センターに対する批判・批難に、もはや応える意欲と方法を持たないこと。／三、財政的支出に、これ以上たえられないこと。／以上の三点が、ごくおおざっぱな、センターをやめる理由です。」「(12月限りで／センター活動を停止／以後は個人的立場で)」
 - 50) 坂口順一は1930年東京生まれ。タクシードライバーの立場からの異色のミニコミ『タクシージャーナル』を発刊し続ける。2010年没。著書に『タクシードライバーの言い分：運転席からの人権宣言』(重信幸彦と共著、JICC出版局、1990年)『たったひとりのメディアが走った：『タクシージャーナル』三十三年の奮闘記』(重信幸彦構成、現代書館、2004年)。
 - 51) 「現在までに整理出来た自主出版物(ミニコミ)」『タクシージャーナル』第100号、1979年11月。
 - 52) 注50) 参照。『たったひとりのメディアが走った』に記された住民図書館とのやりとりの経緯は丸山氏の語るものとは異なっているが(とくに68頁)、当時の資料に照らす限り坂口氏のこの部分での記述は記憶違いというほかないように思われる。この点、逆向きに丸山氏との没交渉を裏づけているといえるかもしれない。
 - 53) 『たったひとりのメディアが走った』69頁。重信氏にも直接確認した。
 - 54) 前掲『住民図書館にたどりつくまで』75頁。
 - 55) 「郵便料金値上げ阻止へ、共同行動を／ミニコミ大共闘 17日発足」(ピラ、1975年11月20日、丸山尚氏所蔵)。
 - 56) 「『住民図書館』開設のごあいさつとお願い」(原稿用紙に手書き、日付未記入、丸山尚氏所蔵)。
 - 57) 「ひと 『住民図書館』の館長になる／丸山尚『朝日新聞』1976年2月28日。
 - 58) 前掲『住民図書館への軌跡』46頁。
 - 59) 「住民図書館」設立委員会「共同の資料室『住民図書館』にご協力をお願い」(リーフレット、活版刷り、丸山尚氏所蔵)。住民図書館1周年の集いの案内では、このスペースは「協働舎フロア」と表現されている(住民図書館館長丸山尚「『住民図書館一周年の集い』ご案内」1977年4月、ピラ、活版刷り、丸山尚氏所蔵)。
 - 60) 浪江虔は1910年札幌市生まれの社会運動家・図書館運動家。戦前は農民運動に携わり、1939年に東京府鶴川村に私設南多摩農村図書館(のち私立鶴川図書館)を開館、戦後は鶴川村議を1期つとめ、のち農山漁村文化協会の運動に積極的に関わる。住民図書館には開館以来援助を惜しまなかった。1999年没。著書は『農村図書館：かく生れかく育つ』(河出書房、1947年)『図書館運動五十年：私立図書館に拠って』(日本図書館協会、1981年)他多数。
 - 61) 前掲『住民図書館25年史年表』179頁。助成額は10万円。
 - 62) 岡部一明は1950年栃木県生まれ、米カリフォルニア大学を卒業後、長くアメリカで市民活動に関わる。現在は愛知東邦大学教授。主な著書に『パソコン市民ネットワーク』(技術と人間、1986年)『インターネット市民革命：情報化社会・アメリカ編』(御茶の水書房、1990年)『サンフランシスコ発：社会変革NPO』(御茶の水書房、2000年)他。
 - 63) 『ぶりずむ』第7号(1980年1月)および第8号(1981年1月)。構想が示されたのが7号で、原稿が一部できているとあるのが8号。
 - 64) 須田春海は1942年東京生まれ、東京都立大学を中退後都政調査会に勤務、1980年から市民運動全国センター代表世話人。「アースデイ」日本連絡所代表や市民立法機構共同事務局長などをつとめる。現在はALS(筋萎縮性側索硬化症)で闘病中。著書に『須田春海採録』全3巻(生活社、2010年)など。
 - 65) 前掲『住民図書館の25年』68頁。
 - 66) 丸山尚「自立へのメッセージ・住民図書館の八年」(『模索舎年鑑'83』、1984年3月)99頁。
 - 67) 丸山尚「住民図書館の自立と再生に向けて」(『環境破壊』第151号、1984年1月)19頁。
 - 68) 中村紀一は1941年横浜市生まれ、千葉大学教授を経て筑波大学教授(現名誉教授)、専攻は政治学。編著に『住民運動“私”論：実践者から見た自治の思想』(学陽書房、1976年)がある。
 - 69) 『ぶりずむ』第19号(1985年3月)。
 - 70) 同上。
 - 71) 「＜シンポジウム＞ネジ釘一本引っこ抜け：運動の財産を確認し、21世紀への方向を探る」(『月刊自治研』1986年3月)、『ぶりずむ』第22号(1985年12月)。
 - 72) 岩根邦雄は1932年京都府生まれ、1968年に生活クラブ生協を設立する。現在、生活クラブ連合会顧問。著書に『生活クラブとともに：岩根邦雄半生譜』(新時代社、1979年)、『生活クラブという生き方：社会運動を事業にする思想』(太田出版、2012年)などがある。
 - 73) 丸山尚「いま、なぜ「民衆学会」か：住民図書館がその設立を呼びかけるわけ」(『ぶりずむ』第23号、1986年4月)。
 - 74) 「丸山尚氏に聞く／図書館は民衆の願い怒りを知る手掛かり」(『毎日新聞』1985年1月10日)。
 - 75) 前掲「市民社会の形成とミニコミの役割」22頁。
 - 76) 『ミニコミ戦後史』『ミニコミ』の同時代史』は前掲。『ニューメディアの幻想』は1985年、現代書館。
 - 77) 丸山尚「四月に、住民図書館設立20年 これから何をすればよいか どうかご意見をお聞かせ下さい」(『ぶりずむ』第59号、1996年1月)。
 - 78) 『ぶりずむ』第31号(1988年12月)。

- 79) 丸山氏の文章は、「住民図書館の現状 やはり課題は財政と人手不足」『ぶりずむ』第39号（1990年12月）、飯島春子「拝啓、丸山図書館長様」は『ぶりずむ』第40号（1991年3月）。
- 80) 『ぶりずむ』第49号（1993年7月）。
- 81) 『ぶりずむ』第60号（1996年5月）。
- 82) 同上。
- 83) 丸山尚「マスコミはなぜ役に立たなかったか」『ぶりずむ』第57号（1995年6月）。
- 84) 「住民図書館 存続ピンチ／都心の事務所費が重荷」『朝日新聞』1996年4月5日。
- 85) 上井喜彦は1947年大阪府生まれの経済学者。当時埼玉大学共生社会研究センター長。のち経済学部長、学長。著書に『労働組合の職場統制：日本自動車産業の事例研究』（東京大学出版会、1994年）など。

〔みちば ちかのぶ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授〕

〔まるやま ひさし・元和光大学表現学部非常勤講師／元住民図書館館長〕